

社曹勸

編中巻下

イブセン
生野春曙釋

65

70

75

80

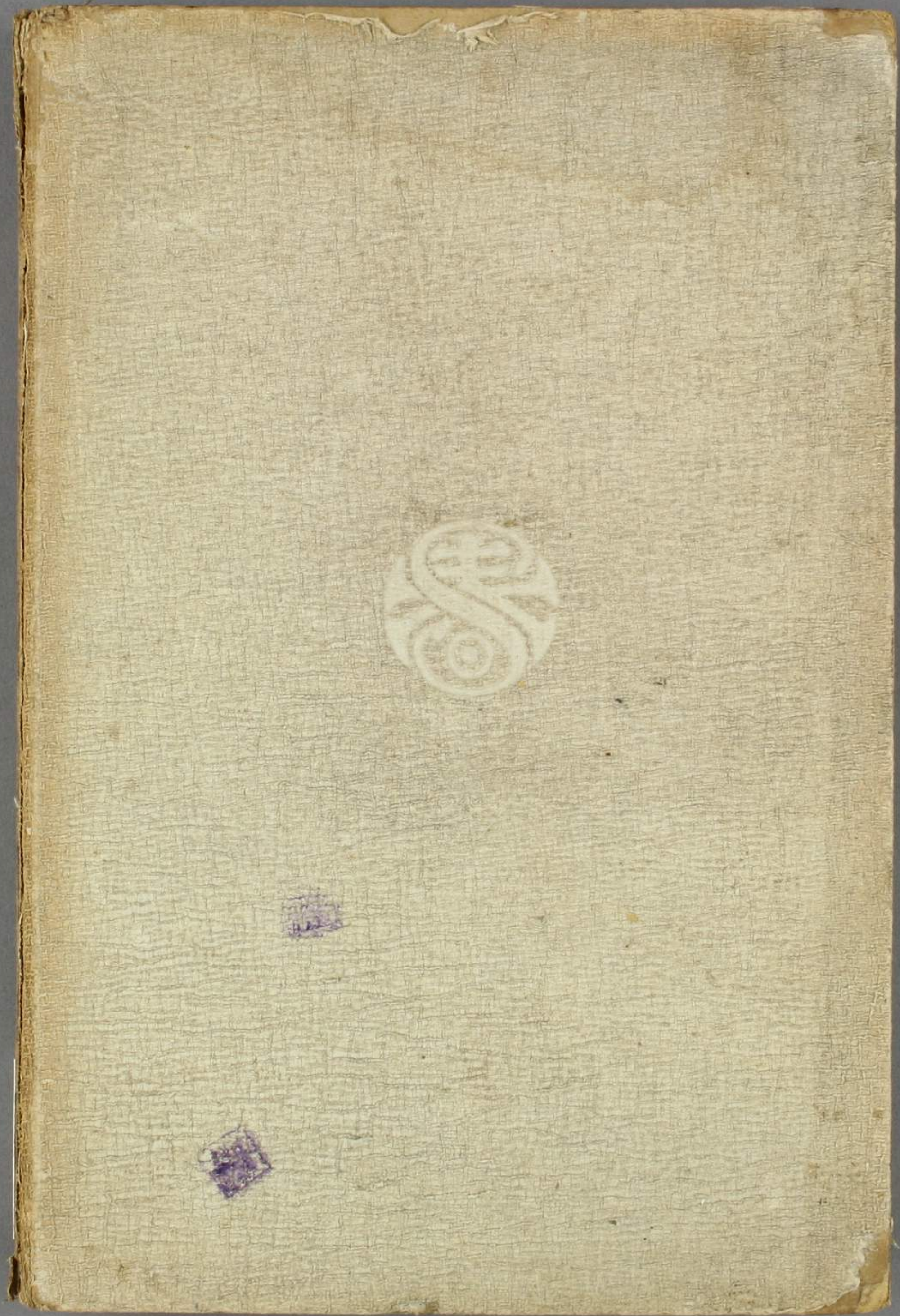
85

社會

籙本考序

土肥春曙

本問
文庫
D 27



ISSEIDO
田神 成 京東

¥
3570
3年1月24日



イ
社^ブ會^セ
劇^ン
鏑木秀子
春
曙
譯

緒言

此篇はイブセンが後年の傑作なる「ヘダガブラ」を翻案せしものなるが、場所と人物の名と已み難き事件のかどくゝとを變更し及び此等に伴ふ白のところゝに聊か手心を用ゐし外は能ふだけ翻譯振に原作の面影を寫出さんと試みたり。「義朝」と「ヴェニス」の商人とは孰れも一昔前の作にて一度び世に公にし、殊に後者は川上一座のために執筆せし予が最初の拙き翻譯劇にして爾來諸處にて演じふるせしものなれど紙數の都合によりて兩つながらこゝに附録となせり。

庚戌三月

春 曙 するす

劇案翻

鋪

木

秀

子

四

幕

第一幕

場所は東京附近ドクトル手島讓次の住居。凡ての裝飾黒くくす
 んで雅致に富み、廣々として美麗なる西洋客間。正面に大きな出
 入口。窓帷は一方に絞つてある。奥に稍々小さき間。裝飾萬端
 客間と同じ。奥下手中程に折戸の出入口。廣間に通ず。同じ部
 屋上手中程に玻璃窓窓帷。玻璃越しに突出てる縁側の一部と黄
 みかけた秋の樹立が見える。此方の客間の中央に楕圓形の卓子、
 數脚、下手壁際に陶器製の黒色の大きなストーヴ。其前に背の高
 い肱掛椅子、踏臺、坐褥、數枚土耳其椅子(二脚)。同じ側の奥の隅に寄
 せて長椅子、小卓子(一脚)。上手壁から少し離れて安樂椅子(一脚)。
 玻璃窓の向ふ側にピアノ臺。正面出入口の兩側に數個の土焼と
 マチヨリカ焼とを載せた棚。奥正面中央の壁に添うて安樂椅子

登場人物

博士	手島讓次
博士の伯母	手島百合子
博士の新夫人	鏑木秀子
秀子の舊同窓	海老名千代子
判事	黒木正勝
文學士	江木亮
博士の下婢	お花

と卓子と三四脚の椅子。安樂椅子の上に將軍服を着けた立派な老人の肖像。卓子の上には乳白色の圓蓋を掛けた釣ランプ。客間には花瓶や玻璃蓋などに入れた花束、諸所好き處に在り、卓子の上杯にもよろしく。兩室とも一様に厚いカーペットを敷いてある。時は朝。朝暉の光が玻璃窓から映しこんでゐる。

ドクトル手島の伯母は下婢お花を連れて、奥下手入口より這入つて来る。伯母は日傘とハンケチを手にし、下婢は紙で巻いた花束を持つて。伯母は六十四五歳人柄の好さうな婦人、サツパリとした装。下婢はやゝ歳上質素といふよりは、田舎めいた風。

伯母 戸の傍に立ち耳歌て、小聲で「マア二人ともまだ起きないんだね！」
下婢 同じく小聲で「ねえ、貴女、私が申上げた通りでございます。昨夜汽車の着いたのは、あんなに遅かつたぢやございませんかねえ！そして夫れから、何を爲すつたと思召します！あの澤山のお荷物を奥様がすつかり

お解きに成つたんでございますよ、お寝みになる前に！

伯母 マアさうかい。寝るだけ寝かしてお置きよ。けれども起きて来たら兎に角朝の新鮮い空気を吸はせないといけません。(ト奥へ行つて玻璃窓をすつかり開放す)

下婢 (花束を持つて卓子の傍に躊躇して) 何處にも置場所がございませんね。此處へ置いとさせよう。(ト花束をビヤノ臺の前に置く)

伯母 お前も、とうとう新らしい御主人を持つ事になつたね！私は又お前と離れるのが、どんなに辛いかわからないよ。

下婢 (涙ぐみて) 私もねえ、貴女！何と申上げてようございますか、永の年月召使つて頂きましたのに。

伯母 お互ひに誦めやうよ。實際仕様がなからね。お前はどうぞして、も此家に居て貰はなくちやならんのだから。お前が此家に居てくれな、いと讓次がどんなに困るか、しれやしないよ、眞個にさうだね、お前にや幼

少い時分から、絶えず面倒見て貰つてゐたんだから。

下婢 そりや、然うでもございませうが、お宅の御病人の事が氣になりましたね。お可哀相に、全く御不自由でございませう。それに新參の彼の娘でございませう。どうして貴女、彼んな者に御病人の御世話が満足に出来ませう。

伯母 それは出来るやうに、私が段々仕込んで行くさ。そして大概な事は、私が自分でやつて行くから大丈夫だよ。マア、可哀相でも、妹の事はさう心配しなくてもいいよ。

下婢 さうでございませうか。けれどもねえ、貴女私モ一ツ他にございませうの。私見たいなものは、若奥様の御氣に入るやうには行くまいと思ひますと、夫れが何寄恐くて心配で堪りませんの。

伯母 そりや、初の中は、氣に入れない事も、一ツや二ツはあるだらうよ。

下婢 餘んまり、御立派な方でございませうからね！

伯母 其の筈ぢやないか——鏑木大將のお嬢様だもの——大將の生きていらつしやる時分は、如何なだつたか、お前も覚えてるだらう！ホラ、阿父様と好く馬に乗つて？長い黒の乗馬服を着けて？そして羽の着いた帽子を冠つてさ。

下婢 然うでございませうたつけね。マア、彼のお嬢様と若旦那様が、御夫婦にお成り遊ばさうなんて、其時分には夢にも思ひませんでしたわ。

伯母 私だつて思ふもんかね。そりやさうと、お前に言つとくかね、讓次には、これから若旦那と言つちや不可いよ。先生といふんだよ。

下婢 え、モウ承知して居ります。奥様が昨夜そんなやうな事仰有いました——御家へ御這入り遊ばすと直ぐでございませう。マア先生と申し上げるのでございませうか？

伯母 そりや、勿論だよ。今度亞米利加でドクトルになつて来たんだからね。新婚旅行をしてさ。實は昨日停車場で話を聞くまでは、私もちつとも知

らなかつたんだよ。

下婢 マア若旦那様は御自分のお好きなものには、何にでもお成り遊ばされるのでございますのね。マア御發明でいらつしやいますこと！けれども、私は、若旦那様が、お醫者様にお成り遊さうなんて、思ひも寄りませんてしたわ。

伯母 お醫者様のドクトルぢや無いんだよ、ホラ文學博士とか法學博士とかいふ、彼のドクトルなんだよ。

下婢 ヘエ！私は又ドクトルは、お醫者様の事だとばかり聞いて居りましたの。

伯母 夫れからね、今度は其上にモット立派な、日本の眞實の博士の肩書を貰ふ事になるかも知れないよ。

下婢 マア。何處まで。御出生遊ばすんでございませう！

伯母 (微笑して) けれども、そりやまだ確かな事は分らないがね。(ト一寸慌て

トマアほんとに亡くなつた親父さんに、讓次が成人くなつただけでも、見せたらと思ふよ。(ト見廻はして) おや、ちよいと——お前なぜ此んな事したの？被ひをすつかり除つちまつたね？

下婢 奥様が然う仰有いましたんで。椅子に被ひを掛けるのは、大嫌ひだつて。

伯母 だつて、毎日此のまゝに爲とく積りかね！

下婢 え。然うなうございませうよ。奥様がさう仰有いました。先生は何とも仰有いませんでしたけれど。

手島讓次 下手の戸を開け、開いた空の鞆を携へ、嘯きながら奥の間へ入り来る。三十三歳歳よりは若く見える、快活で圓く愛嬌ある顔付、中脊で寧ろ岩疊、口髭を生やし眼鏡かけてゐる。着物は平生着、何處か構はぬ風

伯母 お早う讓次や、お早う。

手島 伯母さんでしたか、(ト此方へ来て)大相お早くから。

伯母 え、これからちよいと世話を焼に來なくちやならないからね。

手島 それに昨夜は、ろくにお就寝になる時間もなかつたでせうに。

伯母 そんな事心配しなくつてもいいよ。

手島 停車場から、ズット御歸宅でしたか?

伯母 判事さんがね、親切に宅まで送つて下すつたから、ほんとに都合が好か

つたの。

手島 實は馬車でお送りしなけりやならん處でしたけれど——あの通り秀

子が澤山の手荷物を持つてゐたやうな始末でしたから、どうもお氣の毒

でした。

伯母 ほんとに、秀子さんは恐ろしい澤山の手荷物を持ってたぢやないか。

下婢 (手島に向ひ)奥様の御部屋へ參つて、何か御用を伺つて參りませうか。

手島 イヤ有難う。態々行かなくても好いよ。用があると鈴を鳴らすと云つ

てゐたから。

下婢 (右手を向ひて)左様でございますか。

手島 しかし、ちよいと——此靴を持つて行つてお呉れ。

下婢 (靴を取つて)一番上の部屋へ持つて參りませう。

ト廊下の戸を開けて出て行く。

手島 ねえ伯母さん——今の靴にギツシリ詰つてるのは、皆んな書きもの計りですよ。他にや何にも這入つてゐません。亞米利加で方々の圖書館へ行つて、そりや集めたも集めた、ほんとに嘘だと思ふ位、集めましたよ。それが皆んな驚く程古い物ばかりでしてね——恐くさういふ本が、今日存在してゐるかどうか分らん位の物から、拔萃して來たんです。

伯母 さうかい新婚旅行しても、時間を空費にしておしなかつたんだね。

手島 え、空費にやしなかつた積りです。マアお暑いのに、お羽織をどうぞ、取りませう。(ト伯母の後へ行つて羽織を脱いでやる)

伯母 まだ何だか私の家に一緒にゐるやうな気がするね。(トハンケチで一寸口の邊を拭く)

手島 (ハンケチに目を注いで) 大變粹な派手なハンケチをお求めでしたね、

伯母 さうかい。お前の奥様の爲に、態々ハイカラなのを撰つて買つて来た

んだよ。

手島 秀子の爲にですか？

伯母 町でも一緒に歩く時にや、ハンケチの一つでも汚い物持つてると秀さんの耻になると思つてさ。

手島 伯母さんの御注意の届くのには恐入りますね。マア此處へ掛けてお話しませう。秀子も今に參るでせう。

伯母 ト兩人は腰をかける。伯母は日傘を座床に置き。ね讓次や、お前は外國へ行くし、私は取る年だし、どうかと思つたら、マア無事に逢へたんで、どんなに私嬉しいか知れないよ。ほんとにお前は見

れば見る程阿父さんに似て来たよ。

手島 私も無事にお目にかゝる事が出来たので安心しました。ほんとに伯母さんには、これまで両親同様にお世話になつたんですからね。

伯母 お前も私達を大切にしてお呉れるのは、好く知つてるよ。

手島 ところ若い伯母さんは、別にお變りもありませんか？

伯母 どうもねえ可哀相に、好い方に向かないよ。此四五年病蔭についたまゝなまだから。どうしてもモ少し生かして置きたいと祈つて居るけれど、

彼女が死んでしまつたら、私どうしやうかと思つてるよ。お前の傍にだつて、モウかうして始終居られる譯ぢやなし。

手島 マア、そんな事は……

伯母 (俄に調子を變へて) しかし讓次や、お前もいよ、女房持になつたんだよ。お前がアノ、鏑木秀子さんを奥様にしたんだからね。評判の鏑木秀子さんをさ。ねえ讓次や！彼のお嬢さんにや夢中になつて騒いだ人が、

随分あつたぢやないか。
手島 (得意氣に打笑み) え、此の東京にや羨望してる友人が澤山ありませうよ。
伯母 そして今度の新婚旅行は大變に長いもんだつたね。ちようど一年に
なるよ。

手島 そりや新婚旅行と云つても私に取つちや一種の研學旅行でしたから
ね。そりや亞米利加に在る圖書館といふ圖書館は、殆ど漁り盡しました
よ。實に驚く程澤山の本を読みました。

伯母 然うかい、私も然うだらうと思つてたよ。(少し小聲になつて)だが、ちよ
いと讓次や、私に——何か——話す事がありやしなにかい

手島 旅行についてですか？

伯母 さうさ。

手島 手紙に書いて上げたより外には別は無いと思ひますがね。外國でド
クトルを貰つた事は、昨日お話ししましたね。

伯母 え、そりや聞いたよ。私の云ふのは——何か別にさ——目的がつい
たかね？

手島 目的ですか。

伯母 マア何だね讓次や——私はお前の伯母ぢやないかね。

手島 え、目的はいろ／＼あります。

伯母 然う！

手島 近い中に大學教授になる有望な目的が——一ツあります。

伯母 さう大學教授——

手島 そりや十中八九までは確かだと申上げてても可いんです。

伯母 (笑つて) そりや勿論だらう。(ト調子を変へて) だが今の旅行の話ね。随
分要つたらう？ 加之に外國だから。

手島 え、要りましたとも。しかし彼の留學費で大分助かりはしましたか
ね。

伯母 けれども二人だからね、足りたかどうか、夫れを心配してゐたよ。

手島 そりや充分なんていふ譯にや行きはしませんよ。然てせう——え？

伯母 それにお前の同伴が普通の女ぢやないんだから。そんな同伴だと何

物でも馬鹿々々しい程費用がかかるさうだからね。

手島 え然うですとも——そりや確かに豫想以上でした。けれども秀子は

どうしても亞米利加まで行くと言つて聞かないのです！實際収まらな

かつたのです。さうしなけりや。他に仕方がなかつたもんですから。

伯母 然りや仕方がなかつたらうよ。外國位ゐの新婚旅行は、全く現今の

お定まりなんだから。そりやさうと家はすつかり廻つて御覽かい、まだ

かい？

手島 え、夜が明けると直ぐ見廻つて見ました。

伯母 如何だい家は？

手島 結構です——實に結構ですよ！が、只ね、此の奥の部屋と秀子の寢室の

間に、明間が二ツあるです、夫れを如何しやうかと思つてゐるのです。

伯母 (微笑して) そんな事、お前心配しなくつても、何かに使へるやうにならね。

手島 それや全くさうです。私の書類も段々嵩張つて來ますからね。

伯母 さうだよ。私もさう考へてゐたのさ。お前が本をお集めだから。

手島 ねえ伯母さん、私は秀子の爲に非常に喜んでゐるのです。結婚前から

此の大木さんの別荘でなくちや、他に住む氣は無いと云つて居りました

から。

伯母 ほんとに都合が好かつたよ。お前達が旅行に立つと直ぐに此の家が

賣物に出たからね。

手島 全く、我々は運が好かつたんですな。

伯母 けれどもお前費るよ！こんな處にゐちや——お前にや費り過ぎるだ

らうと思ふよ。

手島 (少し悄氣て) え、全く費りませうね。

伯母 ほんとにさ！

手島 どの位費るでせう？ マア概と——え？

伯母 私だつてまだ見當は附かないよ。拂ひをして見なけりや。

手島 しかし。幸ひ判事の黒木君が此方に都合の好い約束で、先方へ談判してくれたさうです。秀子へさういふ手紙が來ました。

伯母 え、其事は心配しなくても好いよ。其他に道具だとか敷物だとかいふものには、私が抵當を遣つて置いたから。

手島 抵當を？ 貴女が？ マア伯母さん、どんな種類の抵當をお遣りになつたんです

伯母 ナアニ私達の収入を抵當に遣つたのさ

手島 飛上つて何ですて？ 貴方と若い伯母さんの収入をですか？

伯母 然うだよ。他に道が無かつたからさ。

手島 伯母の前に立つて頼だ事なすつたんですね、伯母さん！ 貴方と若い伯

母さんの生活してお出でになる物は、其の収入の他に何にもないぢやないですか！

伯母 マアいゝよ、そんなに驚かなくつても。皆んな形式ばかりの事なんだから。黒木さんもさう言つてだつたよ。彼の方が萬事私の爲にそんな

やうに親切に計らつて下さつたんだから。ほんの表面だけの事だつて。手島 そんなら安心しました。しかし、それと同時にすね、伯母さん——

伯母 てお前は、お前の収入だけ使つてお出でなさい。そして私達や少しづつ入れて行つて貰ふ事にしやうぢやないか？ 初めはぼつちりていゝよ。ねえ、私達も夫れを樂みのやうにして行かアね。

手島 伯母さんは、丸で私の犠牲になつて下さるですね！

伯母 私はお前が段々都合好くなつて行くのが何奇樂みだよ。其他に何の樂があるもんかね！ お前の世話をしに行かうといふ、阿父さんも阿母さんも無いんだから。しかしマアやつと目標がついて來たのさ。今迄は

始終如何なる事かと思つてたけれど、漸く重荷を下ろしたやうな氣になつたよ。有難い事だね。

手島 ほんとに、どうしてかう、萬事が好い工合に運んで行つたかと思ふと、實に不思議な位だすな。

伯母 さうだよ。そして、お前に反對して、出世の邪魔をした人達ア、皆んな閉口して仕舞つたし。ほんとに皆んな零落れて了つたんだね。其中でも、一番の敵だと思つた江木さんが、其江木さんが一番酷く零落れてるぢやないか。そして、今ぢや、自分で掘つた穴の中へ落込んでるんだよ。可哀相に。

手島 江木の事について、何かお聞込みになりましたか——私の留守中に。伯母 何にも、只ね、何か新しい本を出版しやうとしてゐる事だけは聞いたがね。

手島 え、眞實ですか江木が？ 最近の事ですか？

伯母 え、そんな話だよ。どんな大した物だかね、お前の新しい書が出来りや、それとは大分違ふだらうよ。しかしお前の書かうといふのは、一體どんな物だね？

手島 え、中世紀のブラバンド人の内國商業といふ問題です。

伯母 マアお前にそんな事が書けるやうになつたのかね！

手島 けれども本が完成するまでにや、大分かゝるてすよ。第一あの蒐集めた材料を整理しなけりやならんてすから。

伯母 集めたり整理したりするのは、お前の得意だね。そこは、あの阿父さんの子だもの！

手島 此れから、其の仕事が始めるのが實に愉快で堪りませんよ。殊にこんな住好い家を持つて勉強するのは。

伯母 そして何よりも第一にお前、眞から思つてゐた人と一緒になつたしさ。手島 ほんとに然うてすね、伯母さん！ 秀子は——何より彼より最も私の氣

に入つたんですからな、ト入口の方を見て秀子が参つたやうてすね——

秀子 奥右手から入り来る。年は二十九、顔面容姿に品位があつて人の目を惹く。皮膚の色は一樣に蒼白く、目は何處となく冷かな情を表はし、髪は餘り濃くはない。洒落れた寛かな朝の部屋着を着てゐる。

伯母 お早う秀さん！お早う！

秀子 伯母の方へ手を伸ばして。

秀子 お早う！大層お早くから？御親切様！

伯母 (少し當惑して) え、昨夜はお初の家に好く寝られましたか

秀子 え有難う。少しは！

手島 (笑つて) 戯談ぢやないよ、秀さん！私が起きた時分は石のやうになつて眠てゐた癖に。

秀子 其時は僥倖と。これから新世帯に馴れて行きませんとね。段々にさうなりますよ。(と左方を見て) チッ！彼の婢は戸を開つ放なしにして。日がこんなになさしこむのに。

伯母 (戸の方へ行つて閉めませう。

秀子 いえ、閉めないで。良人、カーテンを引いてください。すると日が直接に來ないでせう。

手島 よし、。かうすると蔭も出來て鮮い空氣も這入る。

秀子 え、こんなに花があるんですから、少しは空氣の流通も要りますよ。マア貴嬢お掛け下さいまし。

伯母 いえ有難う。マア萬事都合好く運んで結構でした。これで私もお暇しませう。病人が獨りて淋しく待つてゐますから。

手島 どうぞ呉々も宜敷く。後程お見舞ひに上りますからつて、さう仰有つて下さる。

伯母 ハイ。オさうだつて、讓次や！お前に上げるものがあつたよ、すつかり忘れつちまふ處だつた。

手島 何ですか、伯母さん——え？

伯母 (新聞紙に包んだ平たい物を取り出して) ちよいと開けて御覽！

手島 (開けて見て) マア私の爲に取つといて下さつたんですか、秀さん、御覽よ、

伯母 さんが御親切に——え？

秀子 (右方の架の傍に立つて) え、何ですか？

手島 私のスリッパだよ！これまで穿いてゐた。

秀子 ア然う？旅行中に度々伺つた、彼物ですね。

手島 ウム、大變欲かつたもんだからね、(ト秀子の方に行つて) ちよいと見て御覽。

秀子 (暖爐の方に行つて) 洋山。そんなものはどうでも可いぢやありませんか。

手島 (秀子に随つて行つてもね——若い伯母さんが、あんなにお悪いのに、態々私の爲に、繻刺をして下さつたんだね。秀さんにや分らないけれど、

これには私の紀念になる事が、いろ／＼あるんだよ。

秀子 (卓子の傍に立つて私にや別に關係が無いんですもの。

伯母 そりや秀さんのお言ひの通りだよ、讓次や。

手島 え。けれども、今ぢや、モウ、秀子は、此の家の人になつて居るので、すからね

秀子 (つぶやいて彼の女中はほんとにだらしが無いとね、良人、

伯母 女中が不調法でもしましたか

手島 花が如何かしたの——え、

秀子 (椅子の上のハンケチを指して) ちよいと、こんな汚いハンケチを放棄か、しにして、行くんじやありませんか。

手島 (驚いてスリッパを落し) オイ秀さん。(ト慌て、袖を引く、

秀子 お客でも来て、こんもの見られると——いやですよ。

手島 だだつて秀さん——そりや伯母さんのハンケチだよ。

秀子 オヤ然うてすか？

伯母 (ハンケチを取つて) え、こりや私のです。(ト取上げて) まだそんなに古いんぢやありませんよ。

秀子 マア好く拜見しなかつたもんですから。

伯母 使ふのも今日が始めてです。え、全くですよ。

手島 そして粹ぢやないか。實際氣が利いてるよ！

伯母 ナアニ只派手でないといふだけだよ。(ト邊りを見て私の洋傘は？ア此處にありました。(ト洋傘を取つて) これも私のですよ。(トつぶやくやうに) 下女のぢやありません。

手島 新しいハンケチに新しいお洋傘だよ！え、秀さん。

秀子 そして大變可愛らしくて奇麗ですことね。

手島 ウム、然うだらう——え？しかし伯母さん秀子をよく見て行つて下さる。どんなに秀子が奇麗で可愛い、か御覽下さる。

伯母 マアお前何をお言ひだね、今更。秀さんはいつ見ても奇麗ですよ。(ト頷いて下手に行く)

手島 (伯母の後に) ついてえ。ですが。どんなに肥太つて元氣がついたか伯

母さんお分りですか？旅行中は今よりか、モット肉がついてゐましたよ。

秀子 (部屋を横つて) マア澤山よ。

伯母 (止つて振り返り) 肉がついて？

手島 え、今着物を着てゐますから、伯母さんにや、好くお分りにならないでせう。しかし私にや、その機會ありますから——

秀子 (玻璃戸の傍に立つて) マア機會なんて嘘ばかり！

手島 外國の變つた、好い空氣を吸つて歩いたのが、何奇藥になつたんですな。

秀子 (聲鋭く) 逃つて私立つた時分と、少しも變つちやゐませんよ。

手島 さうかも知らんけれど、そりや秀さんが違つてるよ。さうでせう、伯母さん？

伯母 (手を組んで秀子を見詰めて) 秀さんは奇麗ですよ、ほんとに奇麗で可愛いわ！ (ト秀子の傍に行つて) どうか譲次の爲めにいつまでも變らないでゐて下さい。

秀子 (冷やかに) 有難う。

伯母 (一寸當惑して) これから毎日のやうに、二人の世話を焼きに来ますから、

手島 え、どうぞ伯母さん。

伯母 左様なら！ 左様なら！

ト廣間へ通ずる戸を開けて出て行く。手島は其後について出る。戸は半ば開いて、若い伯母さんによろしくと繰返してスリツバの禮を言つてる聲が聞える。此間秀子は室内を横切り、心に苦痛を感じたかの如く、両手を舉げて虚空をつかむ。やがて玻璃窓の方

に行きカーテンを引開け、其處に立つて窓外を眺める。こゝに手島入り來り戸を閉める。

手島 (下に在るスリツバを取上げて) 秀さん、其處に立つて何を見てる？

秀子 (再び冷かに落ついて) 森を只見てるんです。すつかり黄んで寂びれつちまつてね。

手島 (スリツバを包んでテーブルの上に置いて) さう、モウ秋になつたからな。秀子 (何か感じたらしく) え、ねえ、ちよいと——私達もモウ——秋に這入つたのね。

手島 秀さん、伯母さんは變な方だと思はないのかね？ 随分不思議だらう？

秀子 なぜだか、秀さんに分るかね——え？

手島 私、彼の方好く知らないんですもの。一體あんな風な方なの？

秀子 (玻璃戸の傍を離れて) ハンケチの事がお氣に障つたんでせうか？

手島 ナアニお氣に障る程の事は。そりや一寸位あつたかも知れないがね。

秀子 人の家に来て、自分のハンケチを抛つたらかしにして置くなんて、随分ね！あんな事する人はなくつてよ。

手島 しかし二度とあんな事をなさるまいから——大丈夫だよ。

秀子 兎に角此度は御機嫌の直るやうに、私も注意しませうよ。

手島 然う、え秀さん然うして呉れるかね？

秀子 後で行らした時に伯母さんに今晚来て下さるやうに良人から言つて下さい。

手島 ウム屹度さう言ふよ。それからね秀さん、伯母さんが大變お喜びになる事が一つあるがね、それを秀さんが爲て呉れると——

秀子 何をです？

手島 伯母さんにね、貴嬢と言はないで、伯母さんと言つてくれないか？勉め

ていもさう言つて呉れさいすりやい、だよ。私の爲だと思つて、ねえ秀さん。

秀子 厭よ——そんな事は私に強ゐないで下さい。良人に一度お話したんぢやありませんか——前に。そりや勉めちや見ますけれども、貴嬢で澤山ですわ。

手島 そ、そりや澤山だとも。しかし秀さんは、モウ私の家族に成つたから、一寸然う思つて見たのさ。

秀子 フ、ム——私まだ、しつかり成つた譯ぢやありませんよ——と横ぎつて入口の方へ行く。

手島 (一寸黙つて秀さん、何してゐるの？)

秀子 私の古いピアノを見てゐるんです。何だか他の調度との對照が好くなかつてね。

手島 然うだらう！だから私がさう言つたんだね。チャ今に取替へさせや

う。

秀子 否々——取替へないで。他處へ遣つちまふのは厭よ。奥の部屋がい
ぢやありませんか。そして其の代りに他の置きませうよ。いつか
都合のいい時分にね。

手島 (ちよつと困つて) さう然うしやう。

秀子 (ビヤノ臺から花束を取上げて) オヤ此の花は、昨日來た時や、此處に無か
つてね。

手島 そりや屹度伯母さんが持つて來て下すつたんだよ——秀さんに。

秀子 (花束の中を見て) オヤ名刺。(ト名刺を取出して讀んで) 後程また伺ひま
す。誰れからだか、良人分つて?

手島 否。誰れから——え?

秀子 「海老名千代子」としてあつてよ。

手島 さう? 海老名千代子! そりや小松と云つてゐた彼女ぢやないか?

秀子 え然うです。(ト手眞似をして) こんな長い黒い毛の、アノ評判だつた。
良人の昔の戀人聞いてますよ。

手島 (笑つて) そりや、ほんの一寸ばかりだつたよ。そして、そりや秀さんと懇
意になる前の事だね。しかし變ぢやないか、東京へ來てゐるのは。

秀子 第一私達を訪ねて來るのが變ね。學校に一緒にゐて出てから、一度も
私逢つた事は無いのよ。

手島 さう、私も其後は顔見た事もないよ——幾年になるか忘れて了つた。
好く彼んな田舎に辛抱して住んでるもんだね!

秀子 (少し考へ込んで突然口を開いて) ねえ良人、彼處はアノ文學士の——江
木さん——のゐる處ぢや無くつて?

手島 さう、何でも其の近處だ。

下婢 (奥の下手の戸を開けて入り來り) 彼の御婦人がまたお出になりました、
今し方花を置いていらした婦人でございます。

秀子 ア、！然う？デヤ此方へ御通ししてお呉れ。

下婢戸を開けて海老名夫人を案内して出て行く。夫人は疲形の奇麗な柔和しい顔。黒味勝の目は丸く大きくやゝ凸出して何となく物に恐ぢけて疑惑の情を表し、黒く光澤ある髪の毛は房々と波を打つてゐる。秀子よりは一ツ二ツ年下。衣服の好みはよいが流行ではない。

秀子 (嬉しさうに) マア海老名さん好うこそ！ほんとに久濶ね！

千代子 (態と落付いて) え、ほんとに久濶お目にかかりませんでしたね。

手島 (千代子の方に手を出して我々も御同様ですな！)

秀子 結構なお花を有難う。

千代子 いえ、ほんの——昨日午後直ぐに此方へお訪ねしやうと思つたんですけれど、旅行で御留守だと聞きましたもんですから——

手島 東京へお出になつたばかりですか——え？

千代子 昨日の正午着きました。ほんとに、どんなに、私失望したか知れませんの——お留守だと伺つた時は。

秀子 失望つて！如何なすつて？

手島 しかし、小松さん——ぢやない——海老名さん、そりや何でせう——

秀子 何か御心配な事でもおありなのですか？

千代子 え、少し心配な事が。他に誰れも御相談するやうな方つて有りませ

んもんですから。

秀子 (テーブルの上に花束を置いて) マアゆつくり伺ひませうよ。長椅子へ

お掛け下さい。

千代子 私今日は落着いてお話してゐられませんかから。

秀子 急がなくてもいいんでせう。此處へいらつしやいよ。

ト千代子を引張つて強ゐて長椅子にかけさせ自分も其傍にかけ

手島 そして、何ですか——

秀子 何か急な事が起つたんですか？

千代子 え、起つたやうな、起らないやうな——これからお話を致すんですが、それについて私を誤解して下さらないやうにお願ひして置きますわ。

秀子 マア構はず打明けてお話を為さいな。それが一番御相談がし好いんですよ。

手島 其のお目的で、此處へお出になつたんぢやないですか——え？

千代子 え、さうでございます。それで、アノ文學士の江木さんも矢張此市

へ参つてゐるんでございますよ。御存知ですか？

秀子 江木さんが此市へ——？

手島 ヘエ！江木君が又歸つて來たんですて！變ぢやないか、秀さん！

秀子 マアどうしたんでせう！

千代子 モウ此市へ來てから、一週間に成りますの。ねえ貴方——全一週間

もゐるんですよ！こんな危険い市へ一人で！悪い御友達が揃てるのに。
秀子 ちよいと千代子様——江木さんは貴女と實際はどんな御關係になつてゐるんです？

千代子 (恐怖の色を帯べる秀子の顔を見て早口に) 冢の子供の先生をしてゐましたので。

秀子 貴女の御子さんの？

千代子 いえ、良人のです。私は子は持ちませんの。

秀子 デヤ先の奥様の？

千代子 え——

手島 (ヤ、慌て氣味に) スルト、アノ江木君は、そんなに——何と言つたらいいですかね、——ツマリ家庭教師見たやうなものが出来るやうに眞面目に、なつたのですか——え？

千代子 近年は評判の悪いやうな事は、さつぱりないやうになりましたの。

手島 實際然うなつたですか？え、不思議ぢやないか、秀さん！

秀子 ほんとにね。

千代子 そりや眞實でございますよ。まるで生れ變つたやうになりましたの。けれども今度此市へ御金を澤山持つて來てゐるもんですから、私心配して、ビクビクして居りますの。

手島 しかし江木君は今迄ゐた處に、何故落着いて居なかつたですか？貴女

や御主人と御一緒に——え？

千代子 本が出版されると、モウ私共の家に落着いてゐられなくなつたんですよ。

手島 ア！成程。何でも新著を以て來たと伯母が——言つてましたつけ。

千代子 え、大分大部な新作で文明の發達を書きましたんです。出版したのは二週間前でございました。此頃は大變に評判になつてるやうでございます。

手島 然うですか？そりや江木君が眞面目な時分から遣つてゐた仕事ですね。

千代子 以前からと仰有るんですか？

手島 え、無論然うでせう。

千代子 いゝえ、私共の家へ來てから、お書きになつたんです。さうです——昨年中でございました。

手島 そりや目出度い話だね秀さん。さうぢやないか！

千代子 え、今の分て續いて行けば結構ですけれど。

秀子 此市でも逢ひになつて？

千代子 いゝえ、まだです。居る處が分らないので大變困りました。けれども、今朝やつと發見出しましたの。

秀子 千代子を探ぐるやうに見てお話伺ふと、何だか變てすね、貴女の御主人の事が——

千代子 (一寸困つて)私の主人でございますか？それが如何したと仰有るんですか？

秀子 そんな江木さんの御用で、貴女を此市へおよこしになつたのですか。御友達だのに御自分で来て、お世話なさりさうなもんですね。

千代子 いえ、どうして貴女——主人はそんな閑暇がございませぬから。私が参たのは少し買物なぞもありましたもんですから、それかたぐいで。

秀子 (ほゝゑみ)てそりや又事が違ふてせう。
千代子 (立上つて不安の體で)そして、私手島さんにお願ひいたしますが江木さんがお宅へ伺ひましたら、どうぞ逢つて遣つて頂きたいのです。屹度伺ひますてせうから。一時は御親友のお間柄でもございましたし、それに御研究なさることも、たしか同じやうに伺つてますから。

手島 え、兎に角昔は親しくしたてすから。
千代子 それで特に私からお願ひして置くのでございます。奥様もどうぞ、

手島さんと御同様にお友達として待遇つて遣つて下さいまし。手島さんお聞き下さるでせうね？どうかさうして下さいましな。

手島 え、喜んでお目にかゝりませう。小松さん——ではない——
秀子 海老名さんてすよ。

手島 江木君の爲なら、私の出来る丈お力になりませう、御安神なさい。
千代子 御親切に有難うございます。奥様有難う！有難う！主人も江木さん

んは、大變氣に入つて居りますんですよ。
秀子 (立上つて)良人手紙をお上げなさい。ねえ、でなけりや、江木さん遠慮して來ないかも知れませぬから。

手島 然う。夫れが好からう——え？
秀子 チャア直ぐお書きなさいよ。早い方がいゝんですよ。

千代子 どうかさう願へれば。
手島 今直ぐ書きませう。江木君の處書お持ですか。

千代子 ハイ。(トポケットから、小さい紙片を取出して手島に渡し)此處でございませう。

手島 いゝです！いゝです！チャ一寸失禮します。(ト邊りを見て)オヤ、スリッパは？ア此處にあつた！(小包を取つて出て行かんとする)

秀子 昔のお友達のやうに親切に書いてお上げなさいよ。そして少しは長

くね。

手島 ア、よろしい。

千代子 私から願ひしたやうにはどうか一言も。
手島 え、勿論です。一言も書きやしません。(ト右方へ行き後の室へ出て行く)

秀子 (千代子の方へ行きほゝゑみながら低い聲で)一舉兩得！

千代子 何がですか？
秀子 さつきから、手島を追つ拂はふと苦心してゐたのよ。

千代子 え手紙を書きにいraftしつたんでせう。

秀子 そして貴女と二人で、お饒舌をするのよ。

千代子 (まごついて)先刻のお話？
秀子 然うです。

千代子 (困つて)けれどもモウ何にも有やしませんよ。奥様實際モウ何にも有りますとも。まだ澤山あつてよ。チャンと分つてますわ。サアこ

ゝへいらつしやい、そしてお互ひに打明けてしませうよ。(ト千代子を捕へてストロップの傍の脇掛椅子に引据えて自分は床几にかける)

千代子 (時計を出して心配さうに見て)けれども奥様——私——モウ御暇しやうと思つてますの。

秀子 マア！何も急ぐ事アないでせう。あるんですか？田舎にゐらしつた

時や、どんな様子だつたか、少し聞かして下さいな。

千代子 實は其の事で、少しお願したいと思つてましたの。

秀子 マアお願ひなんて何ですよ！一緒の學校に居たんぢやありませんか

千代子 え、さうですけれど私よりは一級お上りしたものだ！其時分私どんなに貴女が恐かつたてせう！

秀子 私が恐かつたんですて？

千代子 え、びく／＼してゐましたわ。階子段で逢ふといつても私の髪を引張つちやお酷めなすつたんですもの。

秀子 私がそんな事して？

千代子 え、いつてしたか私の頭髪を焼焦がして遣るなんて、仰有つた事もありませんわ。

秀子 マアそりや戯談だつたのよ。

千代子 え、けれども私其時分は馬鹿でしたから。それから兎に角其後は随分遠く離れつちまひましたわね、お互ひに。私達の仲間はすつかり變

りましたわね。

秀子 けれどもね、これから又、お互ひに親密にならうぢやありませんか。ねえちよいと！學校にゐた時は、モット親しい言葉を使かつたてせう。秀

さんとか何とか。

千代子 い、え、なか／＼そんな御交際ぢやありませんでしたわ。

秀子 い、え、さうよ。私好く覺えてゐてよ。だから昔の通りに、お互ひに打解かせせうよ。(ト千代子の頬にキッスして)これから敬語なんか扱にして、秀さんと言つて頂戴。

千代子 (兩手を揉んで)そんなに親密なお友達扱ひにですか！私何だか言ひ馴れないから變ですわ。

秀子 變な事はなくつてよ。私これから敬語扱にして、貴女の名も美しいやんて言つてよ。

千代子 千代ですよ

秀子 さうく。千代ちゃんね。(ト懐かし氣に千代子を見て)ほんとに貴女は友達を姉妹見たやうに親密にした事は餘りないのね。貴女の家庭ぢや?

千代子 家庭があればですけど、そんな家庭など持ちませんの!一度も持つた事がないんですよ。

秀子 (ちよつと千代子を見て)でも家庭みたいなものはあるんでせう。

千代子 (絶望の體で秀子を見詰めて)え、そりやありますわ。

秀子 私好くは覺えてゐないけれど、最初郡長さんの家の家事取締に行つたんぢやなくつて

千代子 え、寧ろ家庭教師見たやうなもんでした。けれども、其處の奥様が——其時分の奥様が、ねえ貴女——病身で、大抵寝て計りゐたもんですから、家事向の事は實際私が遣つてゐました。

秀子 で、マアつまりは——貴女が其處の奥様になつたんでせう。

千代子 (困つたらしく)え、マアそんな事です。

秀子 ちよいと。それから、もうどの位ゐになるの?

千代子 結婚してからですか

秀子 え。

千代子 今年で五年になります。

秀子 ア! 丁度其位でせう。

千代子 マア其五年の間がですよ! 殊に後の二三年が、ほんとに私の身になつて下すつたら——

秀子 (軽く手を打つて)敬語抜きさの筈ぢやないの

千代子 馴れないからつい出るんですもの。(語中に心易立の言葉を使はんとして失敗る)後の二三年はほんとに私の身になつて察して見て下さいましよ。

秀子 (不意に)其の二三年は江木さんが一緒にゐやしなくつて?

千代子 (一寸困つて秀子を眺め) 江木さんですか？え——居ましたの。

秀子 江木さんとは此市にゐた時からモウ戀意だつたの？

千代子 いえ少しも。勿論姓名だけは存じてゐたんです。

秀子 それで彼の人が田舎へ行つてから——貴女の家に来たんでせう？

千代子 え、毎日見えました——宅の子供を教へに。私ばかりぢや家事のこ
とが遺切れなくなつたもんですから。

秀子 ア然う能く分つてよ。そして貴女の御主人は？好く御旅行なさるん
てせう？

千代子 え、地方官の役目だもんですから、各地好く巡回に出張ますの。

秀子 (椅子の脇掛に凭れて) 千代ちゃん！モウ有りの儘を——すつかりお話
しなさいよ。

千代子 チャ何とか貴女から聞いて下さいな。

秀子 ねえ、千代ちゃん、御主人は實際どんな方なの？ツマリねえ——家にゐ

る時や——どんな方？貴女には親切にしてくれて？

千代子 (問を避けるかの如く) え、出来る丈の親切は盡してくれると思つてま
すわ。

秀子 貴女にや少し老人でせう？私さう思ふわ。二十歳よりか、モツと違ふ
てせう？

千代子 (刺激されて) え！年も違へば性質も違ふんですよ。爲る事爲す事、
皆な私の氣に入らないとはかりです！第一思想が全て別々ですもの。

秀子 ツマリ何一ツ氣の合つた事が無いんですよ。

千代子 けれども絶えず貴女を可愛がつてるんでせう？

秀子 何だか分りませんわ！全くお役に立つてるばかりですよ。そして
私がゐたつて特別に費る譯でもありませんから。私見たいな安つばい
物は。

秀子 ほんとに詰らないわね。

千代子 (頭を振つて) だつて他に仕様がありませんから。私彼んな人とはほんとに厭ですわ。彼の人には自分の外に可愛いものは無いんですから。子供は少し位も可愛いかも知れませんが。

秀子 江木さんに對しては、

千代子 (秀子を見て) 江木さんですか？ 貴女は何うお思ひになつて？

秀子 だつて御主人が貴女を此市へおよこしになつたんだせう。——江木さんの後から。(分からね程に微笑して) 然う手島に言つたぢやありませんか。

千代子 (神経を痛めたらしく動いて) え、そりや然うお話ししました。(ト急に小聲になつて) どつちにしても、早晩分かる事ですから、寧ろ打明けてお話しませう。

秀子 そんなら早くお話しなさいよ。

千代子 實をお話ししますと——主人は少しも存じてゐませんのです——私

が家を出た事は。

秀子 マ然う！御主人は御存じないの？

千代子 え、存じませんとも！おまけに家にや居なかつたんですから——又旅行してましたの。私逆もモウ辛抱が仕切れなくなつたんです。逆も駄目なんです！これから又田舎に歸つて燻つて仕舞ふ事は！

秀子 そして——

千代子 てすから、私自分の物は——ツマリ必需品だけは——荷拵へして——

秀子 後には放棄かして？

千代子 え、それから汽車で此市へ參つたんです。

秀子 けれども、ねえ千代ちゃん、よくそんな事が出来てね！

千代子 (立上つて室内を横切り) え、別にどうつて仕様がないうんですもの。

秀子 しかしこれから又田舎へ歸つたら御主人が何とか仰有るてせう？

千代子 (テーブルに着いて秀子の顔を見て主人の家へてすか?)
秀子 え、さうよ。

千代子 モウ主人の家へは歸りません。

秀子 (立上つて千代子の傍に行き) さう! チャ好い目的があつて、眞面目に決心して來たんですね。

千代子 え。目的つて別にありませんけれど、出る外に仕方がないと思つたもんですから。

秀子 チャ公然と出て來たのね。

千代子 えッえ。こんな事はいくら秘密にしやうと思つても、出來ない事ですから。

秀子 だつて世間の手前もあるわ。そりや貴女構はなくつて?

千代子 何とでも言ふ人にや勝手に言はせて置きますわ。(疲れて大儀らしくソファに掛けて) どうせ。仕方がない羽目になつたんですから。

秀子 (少し考へて) これから貴女如何しやうと思ふの?

千代子 まだ分りませんの。けれども此方へ住めば江木さんと一緒にゐることだけは分つてます。

秀子 (テーブルの傍にある椅子を動かして千代子に近づき其手を打つて) 千代子 代ちゃん如何して、あなたはそんなに親密になつたの? 江木さんと?

千代子 段々となつて來たんですよ。ツマリ私の言ふ事を、大人しく聞くらうになつたもんですから。

秀子 マア!

千代子 彼の人もすつかり改心してしましたの。私から願つた譯ぢやないんですけれど——ほんとに一度だつて意見がましい事など言やしませんでしたけれども、私が厭がつてたことが江木さんに分つたもんですからすつかり改めたんですの。

秀子 (時々表はさんとする冷嘲の笑を隠して) 千代ちゃんの所謂御感化ね!

千代子 え、少くも私の感化だと江木さん自身もさう言つてますの。ツマリ江木さんは私の爲に眞人間になつて、私は江木さんの爲に、物事が了解るやうに教育されたんです。

秀子 何か一緒に研究でもしてゐたの？

千代子 いえ、研究といふ譯でもないんですけど、私にいろんな事を聞かして呉れましたの。其中に僥倖と彼の人の爲てる仕事か、どうか、私に手傳へるやうになつて來るし、夫が又面白くなつて、双方が自然親密になつて來たんです。

秀子 皆んな貴女が手傳つて？

千代子 え、何か書く時には、始終私を傍に呼ぶんですもの。

秀子 仲の好いお朋達のやうに。

千代子 (快活に) お朋達！えほんとは然ですよ。江木さんも私を朋達だ／＼と言つてゐましたの。其時分はほんとは幸福だと思つてゐましたけれ

ども、今ぢやモウ駄目でございますの。私も此後どうなりゆくのか分りませんから、

秀子 お朋達以上に江木さんの心は、貴女にや分らないの？

千代子 (物憂げに) 江木さんと私の間には誰か女の幻影が立つて、邪魔してゐるやう心持がしてなりませぬの。

秀子 (千代子の顔を鋭く見遣つて) エ！そりや、一體誰れなの？

千代子 誰れだか私にも分りませぬ。何でも昔關係した者に違ひないんです。どうしても忘れきれない者が有るんですよ。

秀子 江木さんは其女の事について何か話した事があつて？

千代子 ほんのちよいと、口走つた事がありました。

秀子 然う！何と言つて？

千代子 別れ話になつた時に其女がピストルで射うとしたさうです。

秀子 (冷やかに落付いて) マア！けれどもそんな事する女は東京にや滅多に

ないでせう。

千代子 え、ですから田舎の藝者か何かの違いはないと思つてますの——以前
關係した——

秀子 え、屹度そんなものに違ひないわ。

千代子 それから當分其の女がピストルを持つて、附け廻してゐたとか言つ
てゐましたッけ。

秀子 チャ——勿論其の女よ。

千代子 (手を揉んで) そしてね、ちよいと、其の女が又東京へ來てるやうな事も
聞いたんですよ。私、今ぢや、全く絶望してゐますわ。

秀子 (後の室の方を一瞥して) ちよいと！手島が來てよ。(ト立上つて耳打を
して) 今の話は皆んな貴女と私ッ切りよ。

千代子 (驚いて立上り) え、さうですとも——決して！

此處に手島讓次手紙を持つて奥下手から入り來る。

手島 手紙が出來た

秀子 そりやようござんす。千代子さんはそろそろお歸りでせうから。一
寸待つて下さい。庭口までお送りしてよ。

手島 手紙はお花に持たせて遣つちや不可ないかね？

秀子 秀子は手紙を受取つて

秀子 然う言ひませう。

下婢 お花廣間から入り來り

下婢 判事の黒木さんが入來しやいました。お二方にお目にかゝれませう
かつて。

秀子 どうぞ此方へ御出て下さいました。お前一寸此手紙を、ポストへ入
れて來てお呉れ。

下婢 (手紙を受取つて) 畏りました。

ト黒木判事を通して出て行く。判事は脊低く、嚴疊作りの輪廓の

九顔の紳士、四十四五歳。動作活潑。短く刈込んだ頭髪をブラシ
て奇麗に分け、濃き睫毛の下に目がキラ／＼と輝き、年には少し派
手過る立派な運動服を着け、鼻眼鏡をかけて、時々それを取り放す。
黒木判事(帽子を手に持つて)辭儀して餘んまり早く伺つて御迷惑ぢやないで
すか？

秀子 いしえ毫も。

手島(手を抑へて)サア此方へ(ト判事の前へ出て)黒木君——小松令嬢——

秀子 良人！

黒木判事(辭儀して)アさう。そりや丁度。

秀子(判事の顔を見て笑つて)貴君に白晝間お目にかかる、何だか變ね。

黒木判事 人相でも變つてますか？

秀子 え少し、お若く見えるやうよ。

黒木判事 どうも有難う。

手島 しかし黒木君、君や秀子を如何思ふ？色澤が好くなつたらう？實際何
だよ——

秀子 マア私の事なんか澤山ですよ。夫れよりか黒木さんに、色々御厄介に
なつた御禮でも仰有いよ。

黒木判事 頓でもない——好んで御世話した事なんだもの。

秀子 ほんとにいる／＼御親切に。一寸私失禮しますよ。此處に友達が待
つてますから。直ぐに参ります。

ト相互に挨拶があつて、千代子と秀子とは廣間の戸を開けて出て
行く。

黒木判事 ところで、どうだね、萬事奥方の御機嫌に叶つたかね。

手島 イヤいろ／＼どうも有難う。まだ其處此處變へなくちやならんさう
だよ。又少し足りないものもあるし、お互ひにちよい／＼した用を命令
かるだらうと思つてる。

黒木判事 あゝ然う！

手島 しかし、モウ何にも心配して呉れ無くてもいいよ。入用な物は自分で買ひに出掛けるて言つてるから。マア掛け玉へ。

黒木判事 有難う。デヤ少し御邪魔しやう。(トテーブルの傍にかけ時に君に少し話して置きたい事があるよ。

手島 然う！勿論そりやト腰を下ろし第一結婚披露といふ差當つての重荷があるから夫れを考へて置かんけりやならんし。

黒木判事 マア金の要る事なんかさう慌てしなくつていゝさ。それよりかだ、モ少しその経済的に遣つて行くやうな方法を講じやうぢやないか。

手島 ところが夫れが實に困難いよ。秀子の事を考へて見給へ——君が好く知つてる通りの女だ。萬事恪齋臭く遣れないからな。

黒木判事 そりや然うだ——勿論其處が困難い處だて。
手島 しかし僥倖と博士論文の材料は集つたし。それが出來りや大學教授

に任命されるのもさう遠い事ぢやないから。

黒木判事 處が——その任命なんていふ奴ア得て長びくものだからね——よし論文が合格しても。

手島 何か其後聞込んだ事でもあるかね？

黒木判事 別段精確な事は聞かんがねト語氣を強くしてしかしこれだけは事實だよ——元より一端に過ぎないけれど。

手島 ハ、ア！

黒木判事 君の舊友の江木君ね文學士の又東京へ舞戻つて來たさうだよ。

手島 その事は私も聞いたよ。

黒木判事 然う。如何して分つた。

手島 今の婦人の話で——秀子と一緒に出かけた。

黒木判事 ア然う！あの婦人は？今好く見なかつたが——

手島 海老名千代子。

黒木判事 ハ、ア！郡長の細君だね。然う、江木は其處へ一緒におたんだ。
手島 ところで彼の男が再び眞面目な社會の一員になつたといふ事を聞いたので大に喜んでるよ。

黒木判事 然ういふ話だね。

手島 そして、著作を出版したさうだな——え？

黒木判事 さうだ！

手島 評判が好いさうぢやないか。

黒木判事 評判は全く非常だよ。

手島 君の話といふのは此事だらう？彼の男は驚く可き天才を持つてるからな——屹度うまく遣つたに違ひないと思ふよ。

黒木判事 輿論もそのやうだ。

手島 しかし、私にやどうも解せんが、彼の男は今何をして行く積りだらう！
一體どうして生活が立て、行かれるのかな——え？

秀子は室に入るとき最後の一語を聞いて、

秀子 (手島を見てや、嘲笑して) 良人は生計が立つとか立たないとかいふ話になると始終びくびくしてゐるんですね。

手島 秀さん何を言つてるんだよ——今氣の毒な江木の話をしてる處ぢやないか。

秀子 (鋭く手島を見遣つて) へえ！(トストーブの傍の脇掛椅子にかけて冷やかに) 江木さんが如何かしたんですか？

秀子 さう、江木は自分の財産といふ財産は疾の昔すつかり消費つてしまつたんだね。そして其後一冊の本も書けないだらう——え？だから。どういふ風にしてゐたのか、それが眞面目に知りたいといふんだよ。

黒木判事 僕にや、多少分つてる。

手島 さう？

黒木判事 彼の男にや頗る勢力ある親類があるのを知つてるだらう。

手島 ム、だが其の親類は不幸にして全く手を放して了つたからな。

黒木判事 けれども江木は親類中で一番望を囁かれてゐたんだよ。

手島 然う。望は囁かれてゐた——にや違ひなかつたが、今ぢや、其の信用はすつかり地に落して了つてるから。

秀子 どうして？(ト軽く打笑みて)だつて、海老名さんの家族に信用されてるさうぢやありませんか。

黒木判事 ツマリ此度の本も、それて出来たんだね。

手島 そりや然うだらう、兎に角其の海老名の家族に、多少の補助を受けてる位ゐるが、關の山だらうと思ふよ。丁度今江木に手紙を出した處だ。今夜來て、少しゆつくりするやうに言つてやつた。

黒木判事 君は今夜我々のパチエラ會に來るんぢやないか。昨夜からの約束だね。

秀子 お約束して忘れたの？

手島 さうく、そりやすかつり忘れてゐた。

黒木判事 しかし江木は來やしまいから、大丈夫だ。

手島 どうして？

黒木判事 (一寸慌て氣味に立上つて椅子の後ろに手を休めて)ねえ手島君——奥様、貴女にもお知らせしないで置くのは、悪いからお話しますがね、そりや或る事件があるんですよ——

手島 江木に關した？

黒木判事 君と江木の兩人に。

手島 そりやどういふ事だ聞かし玉へ。

黒木判事 君の例の任命一件だがね、ありや君が希望通り豫期通りにや——早く運ばないかも知れないよ。其積りてゐたまへ。

手島 (不安の體に立上つて)何か故障でも起つたのかね？

黒木判事 今度の大學教授の位置は博士論文で、多分競争試験見たやうな事に

なるだらうと思ふんだ。

手島 競争！え、秀さん變ぢやないか。

秀子 (椅子に尙深く凭れて)へエ！

手島 しかし誰れと？君今迄ちよつともそんな事！

黒木判事 僕も今聞込んだばかり。江木とだよ。

手島 (兩手を組合せて)イヤ、そりや全く分らん話だな。到底不可能な事ぢや

ないか——え？

黒木判事 フーム！だが實際探つて來た事なんだ。

手島 しかし、黒木君——そりや僕にや如何考へても、信用の出來ない話だな。

(ト手眞似をして)ねえ、考へて見玉へ。私は今世帯持だらう！其希望があつたから、秀子と結婚したんだね。旅行をして莫大の金錢を費つて、其の上には伯母から借金もして。任命の確信が無くて、そんな事が遣れるもんぢやないぢやないか——え？

黒木判事 然うく、そりやその通りだ！勿論早晚任命があるにや違ひないさ。しかし最初は矢張競争ださうだ。

秀子 (椅子にかけたまゝ、身動もせず)ねえ、良人、競技見たいなものよ。

手島 しかし秀さん、そんなに長閑にしてゐられる話ぢやないぢやないか。

秀子 (尙依然として)長閑にしちやゐませんよ。私だつて大變心配してますわ。

黒木判事 兎に角、ねえ、奥様此事情を貴女も御承知なすつて置いた方がいゝんです。いろく、これからお買物もあさるうですから、夫れを爲さる前にね。

秀子 そりや、どつちにしても、同んなしてすよ。

黒木判事 然うですか？お買物とは又事が違ひますからね！サア僕はこれでお暇しやう。(手島に向ひ午後散步の序に誘ひに來るよ。左様なら。

手島 然うして呉玉へ。困つた事になつたな！

秀子 (後に凭りかゝつて手を伸ばして) 左様なら黒木さん、デヤ後で又入來つ

しやう。

黒木判事 有難う。左様なら！左様なら！

手島 (入口までついて行つて) 左様なら。大變失敬した。

ト黒木判事廣間入口の戸を排して出て行く。

手島 (室内を横切つて) え、秀さん！冒険などするもんぢやない。

秀子 (手島を見て笑を含み) 冒険なんですか、今迄の事は！

手島 全くだ——然ういはれても仕方がない。空虚な希望を抱いて結婚を

して、家を持つて、樂園へ行かうとしたのは、確かに冒険だつたよ。

秀子 そりや然うかも知れません。

手島 しかし兎に角、好い家を持つたからねえ、秀さん——日比我々が夢想し

て居た。寧ろ狂ひ廻つて探してゐた家を。然うだらう？

秀子 (徐かに大儀らしく立上つて) そりや初めつからの約束ぢやありません

か。相當の家を持つて。交際社會に立たうといふのは。

手島 然うだとも！だから私の家の事は、以前から大變心配したのさ。來る

人だつて、いゝ階級の者ばかり撰抜いて、そして秀さんを女主人公にして

見たいといふ希望だつたけれど。マア、今の處は我々二人が、不自由

なく遣つて行くだけだ。時々伯母さんを見舞ふ位にして。ア、こん

なに目的が放れやうとは思はなかつた！

秀子 勿論モウ馭者も置かれないわね。

手島 どうして、婢僕だつて置けやしない。

秀子 そして、私の乗用にする筈だつた馬もですわね——

手島 (恐怖の色をなして) 馬？

秀子 モウ乗らうとも思はないからいゝんです。

手島 モウ、そんな事は、當分思はない方が好いよ。

秀子 (空を見やつて私にやたつた一ツ當分氣晴しになるものがあるからよ

うござんす。

手島 (喜色を表はして) さう！ そりや何寄結構だ！ そして、それは何だね秀さ

ん——え？

秀子 (戸の傍に立つて手島の顔を見て冷笑ひ) 私のピストル！

手島 ピストル！

秀子 (冷かな目つきで) 鍋木大將のピストルです！

ト秀子は奥へ行き上手に出て行く。

手島 (戸の方に走り行き秀子の後から叫んで) 不可ないよ、秀さん。そんな危

険な物に觸つちや不可ないよ、秀さん、お願いだから止してお呉れ——え

？

第二幕

前幕と同じく手島博士の部屋。但ピアノ臺のかほりに書架附の

奇麗な小さな卓子がある。尚下手長椅子の傍に一層小さな卓子。

又前幕にあつた澤山の花束の代りに海老名千代子の持つて来た

花束が中央の大きな卓子の上にのせてある。時は午後。

身装を拵へ、只一人來客を待つてゐた秀子は、今しも開かれたガラ

ス戸の傍に立つて、ピストルの弾丸を込めてゐる。彈丸箱はライ

チング、テーブルの上に開かれたまゝのせてある。

秀子 (庭を見下して聲高く) 黒木さん入來つしやい。

黒木判事 (下から聲がして) ヤア又お邪魔に。

秀子 (ピストルを舉げて黒木判事を狙つて) 黒木さん貴君を射ちますよ。

黒木判事 (聲高く叫んで) と、頓てもない！ 此方に向けちや不可んよ。

秀子 後庭から這入つて来る罰です！(トピストルを放つ。)

黒木判事(聲が近くなつて)眞個に氣でも違つたんですか？

秀子 マア！貴君に命中つて？

黒木判事(尙戸外にゐて)そんな馬鹿な眞似お止しなさい！

秀子 チヤお這入んなさい。(黒木判事は奥上手の玻璃戸を開けて入来る。)

モイニングを着けて手に薄外套を持つてゐる。

黒木判事 ビストル持て何を馬鹿な眞似してゐるんです？何を射てるんです？

秀子 只青空を向けて射つてるのよ。

黒木判事(秀子の手からそつとピストルを取つて)一寸拜見。(ト見つめて)ハ、

ア彼物ですわね。(ト四邊を見廻はして)匣は？ア此處に在つた！(ピストル

を匣の中に收めて蓋をして今日はモウ此んな馬鹿な眞似止すんですよ。

秀子 私の氣晴になるものが、これより他に何があると思つて？

黒木判事 お客は？誰れも來ない？

秀子 え誰アれも！お朋達は田舎から、まだ一人も歸つて來ないのよ。

黒木判事 そして手島君も留守？

秀子(ライチング、テーパールの傍に立つて)ピストルを抽斗の中に仕舞ひ、手

島は御飯濟してから直ぐ伯母の處へ出掛けたんです、貴君がこんな早

く入來つしやるとは思は無つたもんですから。

黒木判事 フム！さう！さうと知つたら——へム私も随分間拔だよ！

秀子(黒木を振返つて)間拔つてなぜ？

黒木判事 さうと分つたら、モ少し早く伺ふ處だつたのさ。

秀子(横切つて)モ少し早かつたら、此處にや誰れもゐなかつてよ。私は丁度

着物を着變へに行つてたから。

黒木判事 しかし其室を一寸覗いて見る空穴位あつたてせう！

秀子 なぜ拵へとかなかつたの？

黒木判事 同處までも間拔に出來てらあ？

秀子 マアお掛け下さい。手島は直にや歸つて來ませんから、御ゆつくり。

黒木判事 さう！ぢや久し振りによつくりしませうかね。

ト秀子はソファの角に掛ける。黒木は其傍の椅子に外套を掛けて腰を下ろし、帽子は手に持つてゐる。双方とも暫時無言。やがて兩人は顔を見合せて、

秀子 テニ？

黒木判事 (同じ調子で) え？

秀子 私が先に聞いているのよ。

黒木判事 さう。ぢや少しお空談を遣らかさうかな。

秀子 ねえちよいと、彼時からまるで百年も経つたやうね！貴君さう思はなかつて？そりや昨夜も今朝もお目にはかゝつてますわけれども——落つて出来なかつたから勘定に這入らないわね！

黒木判事 つましかうやつて兩人水入らずでといふんですね？

秀子 マア然うよ！

黒木判事 ところで奥様私は毎日のやうに、此處へ來ちや、貴女の歸京を待つてゐたもんだよ。

秀子 私だつて同じことよ。一日も早く歸京りたくて堪らなかつたわ。

黒木判事 貴女が？實際かね？私はね、どんなに御愉快な事だらうと、實はそればかり想像してゐたんだ。

秀子 マアそんな風に想像されて！

黒木判事 でも手島君からの手紙に始終そんな事が書いて來たんだから！

秀子 さう！手島の手紙に？そりや彼の人は方々の圖書館を漁つて歩くのが、何寄の樂でしたから、古い記録を書抜いたり、何か、そんな事にばかり氣を取られてゐたんですもの。

黒木判事 (皮肉らしく) そりや仕方がない。そんな事が手島君の本職なんだもの。少くも本職の一部なんだから。

秀子 然うね！てすからね他人はいざ知らず私はもうほんとに厭に成つちまつたの。

黒木判事 (同情した調子で) 奥様そりや眞實に？眞面目に言つてるのかね？

秀子 然うですとも。マア私の身になつて考へて御覽遊ばせよ。まる一年てせう！其間一人だつて我々のやうな親密なお朋達に出逢つた事がないんでせう！

黒木判事 成程その點は大いに可哀相だつた同情しますよ。

秀子 そしてね、私何が世の中で一番詰らないつて――

黒木判事 フ、ルーム、

秀子 年百年中――相も變らない人と！一緒にゐるほど――

黒木判事 (合點して) 成程朝つから夜まで――二六時中ぢや！

秀子 年百年中よ！

黒木判事 しかし手島君は、あゝいふ如才ない人だから、巧く行くだらうと私は

思つてゐたんだ實は――

秀子 學問屋さんですからね彼の人は。

黒木判事 全く、夫れに違いない。

秀子 學問屋さんなどと、一緒に旅行したつて、何にも面白いこたないわ。長い旅となると尙更よ。

い

黒木判事 でも愛してゐたら學問屋さんだつて――ね奥様？

秀子 オ、厭だ！そんな事聞くと胸が悪くなるわ。

黒木判事 なんてすて？

秀子 (半は笑ひ半は怒つたやうに) マア私の身になつて御覽遊ばせ。朝起き

てから夜寝るまで文明史の講釋を聞かされるんだから、眞個に堪らない

わ！

黒木判事 年百年中かね――

秀子 ほんとに然うよ！夫れから中世紀の内國商業論と來た日にや！これ

が一番うんざりしてよ!

黒木判事(秀子の顔を熟視して)しかしねえ、貴女のその話は實際如何解してい
か私にや分らんで。

秀子 私と手島と結婚した理由がですか?

黒木判事 マア然う言つてもよろしい。

秀子 私達の結婚がそんなに不思議に見えて?

黒木判事 左様不思議のやうでもあるし、でないやうでもあるし——

秀子 ツマリね、私は踊り疲れて了つたのと同じよ。私の時代はモウ過去つ
たんです——全く過去つて了つた譯でもないけれど——マアくそん
なやうなものですわ。

黒木判事 さう自分から好んで老込まなくつてもいゝぢやないか。

秀子 老込む譯ぢや無いけれど。(ト黒木の顔を詰るが如く見て)兎に角手島
といふ人は、好人物にや違ひ無いわね——どの點から見ても。

黒木判事 好人物! マアくそんやうでせうな!

秀子 そして別に變な處もないわね、然うでせう?

黒木判事 變な? サア變といふよりは、もつと適當な言葉は——

秀子 ツマリね、手島は物を集めたり何かする事にや恐ろしい熱い人ね! だ
から私いつか成功する人にや違ひないと思ふわ。

黒木判事 貴女もさう考へてたらうと思つたよ、世間の入が手島君を他日の成
功者と見てると同じやうに。

秀子 (少し氣の抜けた様子で)え、然う思つてよ。手島も私の爲にや大騒ぎ遣
つて、出来るだけ懸命に盡して呉れたんですからね! その厚意を受け遣
らない譯にや行かなかつたんです。

黒木判事 其點から見や御尤だ。

秀子 友達の中ぢや、手島が一番好意を持つてましたからね。

黒木判事 ハ、他人は貴女を如何思つてたか、そりや私の返事の出来る限

りぢやない。しかし私はだ、御承知の通り結婚といふ事についぢや平生から少し考を持つてたんだから。世間一般の結婚についぢや。

秀子 (冷やかに笑つて) へ、エ！そんな事伺ふのは今日が初めてね！

黒木判事 ツマリ私の希望といふのはどんな内證話でも出来る、極めて親密な愉快な朋達があつて——其朋達の爲にや、私は何でも盡して遣るし心配もすりや働いても遣る代りに自由にて其家庭に出入を許して貰ふ——

秀子 ちよいと、そりや男のお朋達の家庭に？

黒木判事 白状すりや婦人の家庭に。が、其婦人の次には勿論御亭主が控へてござる。ねえさういふ風に——言はゞ家庭に於ける三角同盟——といふやうな組織をつくりたい、こいつア實際愉快な交際法だと私は思ふんだ。

秀子 全く然うね、さしづめ今度の旅行で、私しみく、その三角同盟の必要を感じたわ——誰れか一人位のお朋達ががあると好いと、度々思つた事があ

つてよ。ほんとに厭でしたわ、只た二人切でせう！朝つから晩まで？
黒木判事 しかし其の新婚旅行も有難い事にややつと済んで了つた。

秀子 (頭を振つて) どうして、まだなか／＼。私は今途中の停車場に一寸止つてるやうなものよ。

黒木判事 テヤ如何です、其處で一ツ飛出して、そして少し歩き廻つて見ぢや？
え、奥様。

秀子 ところが私飛出さないの。

黒木判事 決して

秀子 え。誰か知ら私を始終附廻はして——

黒木判事 そして人の足もとばかり狙つてる奴があるから？ ハ、ハ、ハ、

秀子 然うよ。

黒木判事 しかし、ねえ——

秀子 いえ、私、そんな事するのは嫌ひよ。だから、私は今ゐる處に——静とし

て矢張差向ひてゐるの。

黒木判事 成程其處へ第三者が来て割込む。

秀子 そりや又別問題だわ。

黒木判事 好く氣心の分つた同情に富んだ朋達が――

秀子 いろんな面白い世間話をして慰めて呉れる？

黒木判事 學問屋さんの究窟な話は一切抜きにして――

秀子 (嬉しそうに息を引いて) え、そうしたら私眞んとに壽命が延びてよ！

此時戸の開いた音がする。黒木はじろりと奥を見て

黒木判事 三角同盟が出来た！

秀子 (小聲で) そくて又汽車が立つ！

手島は鼠色の三つ揃ひの運動服を着け柔かな毛帽子を冠つて、奥の室の下手の戸を開けて入り来る。手には澤山の本を抱へ、兩のポケットにも本が一杯這入つてゐる。

手島 ブウ！暑い〜！(ト本を下に置いて) 秀さんこんなに買込んで来た！

「ヤア黒木君！君も来てゐたのか」ト秀子に向ひ「お花は黒木君のと何とも言はなかつた。」

黒木判事 僕は後庭から来たから知ら無かつたんだよ。

秀子 何の本をそんなに買つて来たんです？

手島 (頁を繰りながら新しく出た私のプロフェッショナルの本だよ、だから仕方なしに買つて来た。

秀子 プロフェッショナル――？

黒木判事 皆んな手島君の商買用の本でさね。

ト兩人は顔見合せて笑ふ。

秀子 まだそんなに商買用の本が要るんですか？

手島 いくらあつても足りはしない。寫本でも印刷ものでも手に入れるだけはいれとかと。

秀子 然うてすかね。
手島 (本を弄りつゝ) 江木の新著も買つて来たよ。(秀子に渡しちよいい見て御覽)

秀子 澤山。後で拜見しませうよ。
手島 今道々読んで来たかね。

黒木判事 どうだね其本は——専門家の君の目から見ても。

手島 イヤ素晴し物だ。如何して江木はかういふ確かな判断力を持つてるだらう。以前は斯んな風にや書けなかつたんだかね。(ト堆くなつてゐる本を掻き集めて彼室へ皆んな持つて行かう。え、秀さん新しい本を一々切つて讀むのは、實際愉快だね。さう、衣服を一寸着變へて来やう。(ト(黒木に向ひ)君、今直ぐ行くんぢやないだらうね?)

黒木判事 さう慌てなくても大丈夫だよ、

手島 さう、チャ少し待つてゐて呉れ玉へ。(ト本を抱へて戸の傍まで行つて

振返つてサウ、秀さん、伯母さんは今夜お出はないよ。

秀子 なぜですハンケチの事がお氣に障つたんですか?

手島 否——なぜそんな事いふの? 若い伯母さんがお悪いからだよ。

秀子 御病人はいつもお悪いでせう。

手島 今日はいつよりか悪いんだよ。お可哀想に!

秀子 チャ誰れかお傍にゐなけりやならないでせうから、仕方ありませんわね。

手島 それから伯母さんは大變喜んでいらしたよ。秀さんが旅行して来てから、見達へるやうに肉附が好くなつたつて。

秀子 (立上つて獨語して) 伯母さん、く、澤山だわ?

手島 え?

秀子 (ガラス戸の方に行つて) 何でもないんですよ。

手島 (黒木に向ひ) チャ一寸。

ト奥を通つて出て行く。

黒木判事 ハンケチの事とは何です奥様？

秀子 ナアニ今朝手島の伯母の事について一寸した事があつたんですよ。

いえね彼の伯母さんが自分のハンケチを抛棄しにして置いたんですよ。
(ト一寸笑つて)それをね私が下女のハンケチだと態と間違へたのよ。

黒木判事 そりや酷い！あんな人の好いお婆アさんを！

秀子 だつて其時やついさう思つたものだから仕方がないわ。(ト暖爐の傍の肱掛椅子に身を投げて)今ぢや如何な氣で言つたのか私も好く分らないのよ。

黒木判事 (肱掛椅子の後で)ツマリ貴女は今の自分の境遇に満足してゐないから、そんな事になる。

秀子 (向ふを見詰めて)なぜ私は満足しなければならいの？如何いふ理由で？

黒木判事 理由などは兎も角もさ貴女は平日執心してゐた家が手に入つたから、夫れが何寄ぢやないか。

秀子 (黒木を見上げて)笑つて貴君までさう思つてるの私が執心して此家を持つたやうに？

黒木判事 デヤそんな事は、何にも無かつたんだな？

秀子 まるで無い譯でも無いの——確かにあつた事はあつてよ。

黒木判事 といふと？

秀子 といふのはね、去年の夏、夜會の歸途に、よく手島に送つて貰つた事があつたでせう、その時分のことなの。

黒木判事 生憎その時分は私は方角違ひに住んでゐたもんだからねえ奥様！

秀子 ほんとにね！去年の夏は、方角違ひにばかり！

黒木判事 (笑つて)マそんな事は如何でもよしさ。ところで貴女と手島君とが——？

秀子 或晩二人で此處を通つたと思召せ。すると手島は其晩どうしたのか、口も碌に利かないで、大變沈んでるんでせう。元氣がなくて。それを見て何んだか私可哀想になつて來たの――

黒木判事 (訝り笑つて)へエさう！

秀子 實際さう思つたの！だから何とか元氣を附けて遣らうと思つて、此の別莊を借りて二人で世帯を持ちませうかつて私うつかり言つちやつたの、何の氣なしに。

黒木判事 只それつきり？

秀子 其晩はそれつきりよ。

黒木判事 すると其後？

秀子 え。心にも無い事言つたのが、こんな結果になつたつたの。

黒木判事 我々も心に無い事言つちや、よく頼だ目に逢ふて。

秀子 澤山よ！しかしね、大木さんの此の別莊に住んで見たいといふ考だけ

は私にも手島にもあつたから、其の考は一致したんですよ。ソマリそれが一緒になる約束の始りて、そしてとう／＼結婚をする、旅行をする、といふ騒ぎになつたの。言はゞ寢床を拵へて、それに寢たゞけの話でさね。

黒木判事 驚入つたね！スルト此家といふのは實際何でも無かつたんだな。

秀子 然うですとも。何でもありやしなかつたわ。

黒木判事 しかし今ぢや？貴女の住みいゝやうに、我々が整然として上げたんだからね！

秀子 私此家厭てならないの。部屋中變な臭ひがするんですもの、何だか花の匂たやうな。手島の伯母さんに附着いて來た臭ひか知ら？

黒木判事 (笑つて)イヤそりや亡くなつた大木の後家さんの臭が紀念に残つてるに違ひない。

秀子 まるで死人の臭だわね。丁度夜會や舞踏會のあつた翌日の飾花をかぐやうな臭を思ひ起してよ。(ト頸元に兩手を遣つて後ろに凭りかゝり、

黒木の顔を見て私こんな家にゐるのは、何だか氣味が悪くつて厭になつて了つたわ。

黒木判事 ねえ、奥様一人てさうくさくさしてゐるより何か憂晴しになる面白い仕事を、見附けちや？すると氣が變つて来るよ。

秀子 仕事つて私の氣を引附けるやうな面白い物があつて？

黒木判事 あるとも。

秀子 さう、そりやどんな仕事。ねえちよいと私時々かうも思つて見たの――（ト口の中でつぶやいてけれども如何だか分らないから止しませう――）

黒木判事 マア話して御覽なさい。聞かなけりや分らない。

秀子 アノ手島にね、政治を遣らせたら如何かと思つたの。

黒木判事 手島君に？そりや不可い。一體政治なんていふ奴ア、手島君に向く仕事ぢやありませんや、柄に無いんだから。

秀子 そりや私も知つてますよ。けれども遣らせて見たら出來ない事は無

いでせう。

黒木判事 遣らせた處で、貴女は如何な満足が得られると思ふんです？成功しないと分つてる仕事を無理に遣らせる必用もないぢやないか。

秀子 だつて私今のやうぢやあんまり詰らないから、お話して見たのよ。（ト一寸間を置いて）手島が大臣になれるやうな事は、絶対に駄目だと貴君思つて

黒木判事 フ、ム！ねえ、奥様大臣などになるにや、相應に財産が無けりやならん、これが第一條件だて！

秀子（座に堪えず立上つて）全くそれ！私此の家へ全く貧乏しに來たやうなものね！（ト横切つて）ほんとに詰らない馬鹿々々しい目に逢つたわ、お金が無ければかりに。それが私堪らないわ！

黒木判事 しかしその不満足の原因は、強ち金が無いばかりでも無いでせう。秀子 チヤ何か他にあつて？

黒木判事 實際いふと貴女は凡て物事を眞面目に見てゐないから不可い。

秀子 私は不眞面目だと仰有るんですか？

黒木判事 ア然う言つてもいい。しかし今に眞面目になる時が来るてせう。

秀子 其時が来ると仰有るのは手島が博士論文を書いてそれに合格して、大學教授にならうと思つてやきもきしてるから夫れが首尾好く行けばといふ意味なんてせう。けれどもそりや手島自身の仕事ですわ。私そんなつまらない事考へてるんぢや無くつてよ。

黒木判事 否々そんな事は如何でもないさ。私の言ふのは、貴女の身の上、今よりは一層眞面目に、そして一層責任を負はなけりやならんものが早晚新しく出来るといふ意味さ(ト微笑して)新要求が、ねえ、奥様！

秀子 (怒つて) 澤山よ。そんなものは一生出来つこないんだから。

黒木判事 マア見てゐて御覧なさい、これから一年の後にや——遅くとも。

秀子 (早々に) 憚りさま私はそんな運命の女にや出来てゐないんですから。

責任なんて何にも分らないんですから。

黒木判事 貴女だつて矢張女でせう——スルト女の運命を持たない譯にや

秀子 (ガラス戸の傍に行つても澤山ですつてば。ねえ私に女の運命があるとする) と此の世の中になつた一つしきや無いと思つてます。

黒木判事 (秀子の傍に行つて) そりや如何いふ？

秀子 (戸外を見遣つて) 自分で自分の生涯を縮めるんです。ね、分つたてせう。(ト振返つて奥の室を見て笑つて) 夫れて結構！ちよいと、大學教授が来てよ！

黒木判事 (小聲で注意するやうに) そんな大きな聲しちや不可んよ！

手島 秀さん、江木の處から誰か謝絶に来やしなかつたかね？

秀子 いんえ。

手島 チヤ今に遣つて来るだらう。

黒木判事 君や實際遣つて来ると思つてるかい？

手島 屹度来るよ。今朝君が話ししてゐた彼の博士論文の一件は全く浮説に過ぎないからね。

黒木判事 然う？

手島 兎に角伯母の話に依ると、此後僕の向ふを張るやうな事は、萬々しないさうだ。そりやさうだらうぢやないか。

黒木判事 成程然うなりや萬事都合が好い。

手島 (手袋を帽子の中に入れて冠り、椅子の右方に坐を占めて) ところで江木は待つだけ待つて見なけりやなるまいな。

黒木判事 時間はゆつくりあるよ。七時——七時半までは誰れも来やしなから。

手島 チヤ夫れまで、秀子のお相手をして、様子を見てみやう。

秀子 (長椅子の上にある黒木の外套と帽子を持って来て) 若しか都合が悪いやうだつたら、江木さんは、此處へお留めしときませうよ。

黒木判事 (秀子の持つてる外套と帽子を受取らうとして) どうも有難う。そして其の都合が悪いと仰有るのは？

秀子 いえね、江木さんが、一緒に行くのが厭だつたら。

手島 (秀子の顔を訝り見て) しかし秀さん、江木君とお前と、只つた二人残るのは、何んだか變んぢやないか——え？伯母さんも、今日はお出がないだらう。

秀子 いえ、海老名の奥様が見えるんです。だから三人でお茶でも飲みませうよ。

手島 然う、そんなら可いけれど。

黒木判事 (微笑して) 江木にや、其方が却て都合がいゝでせう。

秀子 なぜ？

黒木判事 なぜつてねえ奥様貴女は私の獨身會の事についちやこれまで随分
非難をしたでせう。ねえ貴女の好く仰有る高等主義を抱つてるものな
ら兎も角さもないものにはあんな會は危険だつて。

秀子 しかし江木さんも今ぢや高等主義になつてよ。罪人も改心すりや—
此時下婢廣間の入口に現はれて、

下婢 奥様にお客様が御面會でございます。

秀子 然う。御通し申してお呉れ。

手島 (傍自) 屹度江木だ！さうぢやないか！

江木は奥下手から入り来る。瘦せてひよろりした男。手島と同
年輩なれど少し老けて見え何となく消沈してゐる。髪も髭も黒
褐色にて顔は長く蒼白めてしかし頬の邊りに少し紅色を帯びて
ゐる。黒の立派な三揃ひの服を着け手に黒の手袋と高帽を持つ
てゐる。戸の傍に立つて懐し氣に辭儀して當惑の體にてモヂモ

デしてゐる。

手島 (江木の傍へ行つて握手をして) ヤア江木君其後は久濶。

江木 (低い聲で) 御手紙を有難う。(秀子の方に行つて) ヤア奥様御機嫌好う！

秀子 (握手をして) マア好く！手眞似をして私好く存じませんが、お兩人は、ア

ノ、何ですか—

江木 (軽く辭儀して) たしか黒木判事ですね。

黒木判事 (同じ様に然うです—) 幾年前でしたつけね？

手島 (江木の肩に手を遣つて) ね江木君家にゐると同じやうに思つて呉玉へ。

然うぢやないか秀さん。ところで君は又東京へ住ふやうな話を聞いた

が— 然うかね？

江木 然うしたいと思つてる。

手島 そりや然うするのが當然だよ。君の新著を買つたよ。しかしまだ餘
暇が無いのですつかりは拜見しない。

江木 餘暇潰しだから止し玉へ。

手島 そりや如何いふ譯て？

江木 ナニ大した事もないからさ。

手島 そんなことが——そりや餘り御謙遜だよ！

黒木判事 けれども大變な評判ださうですぜ。

江木 實は其の評判を得やうと狙つたんですよ。誰れが見ても頷けるやうな風に書いたんです。

黒木判 ほんとは非常にすよ。

手島 しかし——江木君——

江木 僕の目的は其の本の評判で、自分の地位をモ一度回復さうといふんだ。ツマリ新しく出直すんだね。

手島 (少しギョツとして) ハ、アさういふ考で？

江木 (帽子を下に置き外套のポケットから紙包を取出し微笑して) しかし手

島君、こいつが出版された時や是非一讀して貰はふ。實はこれが眞物なんだから。僕の本領は即ちこれなんだ。

手島 然う？そしてそりや如何いふ？

江木 續稿だよ。

手島 續稿？何の？

江木 彼の本の。

手島 新著の？

江木 勿論。

手島 さうしかし江木君、彼書や現代まであるんだらう？

江木 然う。此の方は將來を論じたんだ。

手島 將來？しかし君一體將來の問題なんて、分りやしないぢやないか！

江木 そりや分らんさ。けれども論じて見りやいろんな面白い問題があるよ。(ト紙包を開いて) マア見て呉れたまへ。

手島 こりや君の自筆ぢやないな。
江木 ムウ筆記させたんだ。(頁数を繰つて)二章に分けて見た。第一章が將來に於ける文明の勢力。第二章ト幾頁か繰つて)將來の文明の進歩といふのを論じて見た。

手島 こりや非常なもんだな!僕にやかういふ問題を書いて見やうといふ考からして第一起らなかつた。

秀子 (玻璃戸の傍に立つて獨語のやうに)フム——如何して起るもんか!

江木 (原稿を集めて卓子の上に置いて實は今夜此の原稿を少し聞いて貰はふと思つて持つて来たんだがね。

手島 そりや大いに結構だが今夜——ト黒木の顔を見て)え、と何と君に斷つていゝか——實はね——

江木 チャ此の次にしやう。急ぎやせんから。

黒木判事 實はね、江木さん今夜私の家で小宴を遣らうといふんです。主とし

て手島君の爲に。

江木 (自分の帽子を見て)ア然うですか、チャモウお暇しやう。

黒木判事 しかしどうです。君も願くば來て呉れませんか。

江木 (言葉短かに)有難う。折角ですが、僕は失禮しませう。

黒木判事 マアいゝぢやありませんか!内輪ばかりの小數の寄合ひですから、

奥様の所謂陽氣に面白く遊ばうといふだけですよ。

江木 そりや大いに結構ですが、シカシ僕は失敬しませう。

黒木判事 其の原稿を持つて來ちやどうです、そして私の家で手島君に讀んで

お聞かせなさい。部屋は澤山ありますから。

手島 何なら然うして呉れ玉へ、江木君。

秀子 良人、江木さんは厭だと仰有つてるんぢや有ませんか。此處に残つて

一緒に御飯でも喰べませう。ねえ、さうした方が江木さんいゝでせう。

江木 貴女とてですか、奥様?

秀子 千代子さんも見えるんですよ。

江木 アさうですか？ 彼の人にや今日正午頃一寸逢ひました。

秀子 然う？ 今に此處へ來ますよ。 ですから貴女は此處に残つて居て下さい。 さも無けりや、歸りに誰れも千代ちゃんを送つて行く人がないんですよ。

江木 そりやさうですな、チャ御厚意に甘へて、御邪魔しませう。

秀子 さう。 チャ私一寸下女に言附けますから。

ト奥下手入口に行つて鈴を鳴らす。 下婢入り來る。 秀子は小聲で何か命じて奥の室を指す。 下婢領いて出て行く。

手島 (此間江木に向ひ) ねえ江木君今の其の新題目なんだね—— 將來を論じた—— ツマリ君が東京で講演を開かうとしているのは？

江木 然う。

手島 書籍店の話に依ると其の講演は此の秋始めるさうだね。

江木 さう。 さうしやうと思つてる。 君悪く思つて呉れたまふな。

手島 頓でもない。 しかしね君——

江木 そりや分つてるよ、君だつて、好い心持のしない事は。

手島 そりや、僕の勝手の好いやうに斗り君に望むことも出来ないから——。

江木 マア君が博士論文を出して教授に任命されるまで僕は待たうよ。

手島 待つて呉れるかね？ 然う、しかし—— スルト君は僕と教授の位置を競争しやうといふ譯でも無いんだね。

江木 競争はしないが、したら勝つにや極つてるだらうよ、先づ世間の定評がさ。

手島 しかしそりや何寄有難ひ—— チャ矢張伯母の言つた通りだ！ ねえ秀

さん、矢張さうだつたんだね。 江木君は、我々に反對しやうといふんぢや

ないんだよ。

秀子 (鋭い聲で) 我々ですて？ 私まで卷添は御免ですよ。

ト横切つて奥へ行く。奥には下婢が卓子に白布をかけて、其上に、酒器や盞を並べてゐる。秀子は「然う」と頷いて再び此方へ入り来る。下婢出て行く。

手島 しかし君黒木君は——どう思ふ?

黒木判事 そりや君の名譽にして且勝利だよ——フム、素敵に結構な話ぢやないか。

手島 勿論だとも。しかし夫れと同時にだね君——

秀子 (冷かな微笑を手島に送つて) 良人何を其處にぼんやりして立つてるの?

手島 近傍に雷でも墜落ちたやうね?

手島 丁度そんな心持だよ。何だか嬉しくつて茫然してしまつた。

黒木判事 ねえ奥様手島君の身になりや雷が落ちて我々の頭上をおさへてゐた低氣壓が除れたやうなもんでさね!

秀子 (奥を指して皆さん、パンチ酒は如何がです? 彼室へ行らつしやい。

黒木判事 (時計を出して見て) 祝盃? 結構々々!

手島 祝盃とは結構だね秀さん。大いに結構だよ。かういふ心持の好い時

や尙更だ——

秀子 江木さん、貴君もどうぞ。

江木 否有難う。僕は。

黒木判事 しかしパンチ酒は毒にやなりませんよ、受合つて。

江木 他の人には毒にやならんでせうがね!

秀子 江木さんには、其の間此方でお話のお相手しませう。

手島 チヤ然うしてお呉れ。

ト手島と黒木とは奥へ行き椅子に掛けて、パンチ酒を飲み、シガレットを吹かしつゝ愉快氣に話始める。江木はストロップの傍に立

ち、秀子はライチング、テーブルに行く。

秀子 (少し聲を揚げて) ね、亞米利加の寫真を見せませうか。ナイヤガラにも

行けば、ロッキイ山にも登つて来たんですよ——手島と二人で——

ト秀子はアルバムを持来り長椅子の傍の卓子の上に置いて自分
は其椅子の上手の一隅に腰をかける。江木は秀子の傍近く行き
其處に立つて秀子の顔を見詰めてゐる。やがて椅子を引寄せ奥
の方を背にして秀子の左方に掛け、アルバムを開いて。

秀子 ちよいといふ景色でせう。これがロッキイ山よ。下に手島が書いと
いたの。ね、此處に「ロッキイ山腹」であるでせう。

江木 (此間始終秀子の顔を見詰めてゐるが、やがて低い調子で徐ろに口を開
き) 鐮木秀子さん!

秀子 (江木の顔を鋭く見て) そんな大きな——

江木 (静に) 鐮木秀子さん!

秀子 (アルバムを見ながら) 鐮木といふのは、以前御懇意にしてゐた時分の私
の名でせう。

江木 然うでしたね——チャ僕はこれから一生——鐮木秀子さんといふ名
は用ひますまい。

秀子 (アルバムを繰りながら) 勿論です。うつかり昔の名など言はないやう
に稽古なさいよ。今日から。

江木 (少しムツとして) スルト、鐮木秀子嬢は手島讓次なる者と愈結婚したん
だね?

秀子 結婚してよ。夫れがどうしたの?

江木 豈夫と思つたら。え、秀さん、如何してそんな事になつちまつた?

秀子 (江木の顔を鋭く睨んで) そんな風に話をするのはよして下さい。

江木 そんな風とは? どんな!

手島 (入り来り) 長椅子の傍に寄る。

秀子 (手島の入り来る氣勢を聞いて無頓着にアルバムを指し) ね、江木さん、こ
れがミスシツピーよ。ちよいといふ此の山を御覧なさいよ。(ト手島をやさ

し氣に見遣りてねえ、良人此の恐ろしい高い山は何と言つたんでしたつ
けね。

手島 孰れ？こりやロツキー山の一部だよ。

秀子 そう／＼そうでしたね。矢張ロツキー山よ。

手島 秀さん、パンチ酒を少し持つて来て上げやうか、秀さんだけお上り――

え？

秀子 有難う。お序にビスケットを二ツ三ツね。

手島 巻煙草は？

秀子 澤山。

手島 さう。不要。

ト手島は奥に行き右方に出て行く。黒木は彼室から時々秀子と
江木の様子を窺ひ見る。

江木 (低い聲で) 秀さん。一體如何してかういふ事に爲て了つた――夫れ

を聞かしてお呉れ。

秀子 秀さんといふなら、貴君とはモウお話しません。

江木 二人きりだから好いぢやないか！

秀子 二人きりでも不可なくつてよ。そりや相變らず昔のやうに思つて

分は貴君の御勝手だけれど、そんなこと口に出されてちや困つてよ。

江木 成程分つた。手島君への愛情と相容れない譯だからね。

秀子 (莞爾と打笑みて) 愛情？へム御戯談もんだわ！

江木 ぢや愛情は無いといふのかね？

秀子 どつちにして主人に裏切はしないわ。モウこんな事話するのは止

しませうよ。お互に厭だから。

江木 チャ只つた一つ聞きたい事がある。

秀子 シッ！

手島 盆の上にパンチ酒とビスケットを載せて持来り。

手島 サア好い物を持つて来たよ(ト卓子の上に置く)。

秀子 御自分でそんな事なさらないでよ。

手島 (二ツの杯に酌いで秀さんのお酌をして見たいからだよ！)

秀子 マア二ツとも酌い了つて！江木さんは召上らなくてぢやありませんか。

手島 イヤ海老名の奥様が今に見えるよ。

秀子 さうでしたね。

手島 忘れてゐたの——え？

秀子 あんまりアルバムに夢中になつてたもんだから。(ト一枚の寫眞を示して)此の村は何とか言ひましたね？

手島 ロッキー山の麓に在る村だよ。其處にや一泊したぢや無いかあの—

秀子 お客がいろ／＼藝盡しを遣つた？

手島 さう／＼其の村だよ。君が一緒だつたらねえ江木君。アさう！(ト思

ひ出したやう黒木のゐる室へ行く)

江木 オイ秀さん、僕はたつた一つ聞きたいことがあるんだ。

秀子 何？

江木 他ぢやない、秀さんは僕に對しちや一體愛なんでもものは無かたのかね？

秀子 愛の影も閃も無かつたのか、夫れを聞きたいのだ。

江木 實際あつたか如何か私にや分らないわ。單私の方から言や大變親密

なお朋達だと思つてゐてよ。水も漏さぬ——(ト微笑して)お友の中でも、

貴君の露骨なのにや實際恐れ入つてよ。

江木 そりや仕方がないよ、御本人の御希望だつたから。

秀子 その時分のこと回顧ふと眞實に愉快かつてね。何だか美しい夢に魅

せられてゐたやうなものね、思出しても氣が興奮して來るやうな心持が

してよ。迎も他人の想像にも出來ないわ、兩人の秘密な友情に、ついでや、

ねえ！

江木 全くだよ。其時分は好く秀さんの阿父さんをお訪問したつけ。スル

ト將軍はいつも窓の傍で新聞を讀ていらしたね、我々に後を向けて――

秀子 私達や一隅のソファで――

江木 いつも繪入新聞を、兩人の前面へ引張つちや――

秀子 アルバムの代りに――

江木 さう――。そして好く秀さんに話して聞かしたもんだね！其時分にや世間で誰れも知らない僕自身の秘密の談を。秀さんの側に坐つちや、毎日毎晩だらしも無く遊蕩び回つてゐた不身持の實驗談を思切つて演つたね。今思ふと、其時分の秀さんの魔力は偉いもんだつたよ、僕に罪状の有つたけを懺悔させて仕舞ふなんて。

秀子 それや私の魔力の所爲だと思つて？

江木 勿論。魔力といふより外に説明は出來んよ。そしてそら秀さんの質問が――

秀子 その神秘的な事を貴君が――説明して下さつたんだわね――

江木 如此な質問をするなんて大膽に。

秀子 大膽といふよりは不思議に思つてせう。

江木 イヤ兎に角大膽だつたよ。僕にあんな事を聞くなんていふ事が。

秀子 だつてそれが貴君の答の出來る事なんてしたからね江木さん。

江木 それがさ、我ながら了解に苦むよ――今日から考へると――好くもあんな馬鹿なことが言へたもんだと思つて。それは兎に角として、ねえ、秀さん、我々があんな關係を作つたにも係らず、其の根底にや愛情は無かつたのか、夫れを聞かしてお呉れ。若し其時僕が眞に懺悔したら、汚がれてゐた僕を洗ひ清めて遣らうといふ考は秀さんに毛頭も無かつたのかね？ さうでも無かつた？

秀子 え、それ程でも。

江木 デヤ何の爲にあんな事を熱心に聞いたんだね？

秀子 貴君にや若い娘の心は解らないの――ねえ若しか秘密に――出來る

ことなら—

江木 出来ることなら？

秀子 世間のことを出来るだけ知つて見たいのよ。

江木 世間のことは？

秀子 娘時分に解らない事を。

江木 ハ、アそらいふ譯だつたんだね。

秀子 それも一の譯だつたと思ふの。

江木 スルト僕は秀さんが世間を知りたい爲の親友だな。チャ寧そのこと

何故モ一歩進め無かつた？

秀子 そりや貴君自身の罪よ。

江木 破つたのは秀さんぢや無いか。

秀子 然らうよ、そりや兩人の關係が事實になりさうで危険だつたから。貴君

其時分の事思ふと私に對して面目ないと思は無くつて？ 貴君が眞實の

お友達としてゐた、その私を捕まへて如何しやうとしたんですよ？

江木 (極り悪げに手を揉んで) 秀さんは又なぜ僕の言ふことを眞面目に取つ

て呉れなかつた？ あのピストルを差向けた時、なぜ一と思ひに撃殺して

呉れなかつた？

秀子 私の名譽に關するから、夫れが恐かつたの。

江木 して見ると矢張心底は臆病なんだな。

秀子 大臆病！ (ト調子を變へて) けれどもその臆病なのが貴君に取つちや却

て僥倖だつたのよ。そして今ぢや海老名さんといふ可愛らしい慰藉者

が発見つたんだわね。

江木 ハ、ア千代さんが何か話したね

秀子 そりや貴君の方が私達の關係を彼女に話したんでせう？

江木 否一言だつて言ふもんか。よしんば言つた處が、そんな事にや極めて

遅鈍だからな。

秀子 遅鈍?

江木 さうだよ、一體そんな風の事にや覺りの鈍い女だよ。

秀子 それに私が臆病と來てるからね。(ト江木の傍に近寄りながら其の顔は見ずに上から凭れかゝつて低い調子で)ちよいと、事實を話しませうか。

江木 (訝り問ねる調子で)事實といふのは?

秀子 先刻の話よ、貴君を撃たなかつた――

江木 その理由?

秀子 え、實は彼晩は全く臆病といふ譯からでも無かつたの。

江木 (秀子の顔を暫時見詰めて、聽て合點したらしく情を籠めて囁くやうに)

秀子 さん―― 鑄木秀子さん! やつと分つたよ、我々の友情の影に潜んでゐ

た理由の一端が。ツマリ何だ矢張生の煩惱だつたんだね。

秀子 (江木の顔を鋭く睨んで)小聲で)御冗談ですよ! 夢にもそんな風に解ら

れちや困つてよ! (此時室内段々薄暗くなり始める。廣間の戸は戶外か

ら下婢の手にて開かれる。秀子はアルバムを閉し笑ひに紛らしながら聲高くやつと來てね、サアお這入んなさい。

海老名千代子盛装して廣間から入り來る。戸は直に閉る。

秀子 (長椅子から手を伸ばし握手を求め私先刻から如何なに待つてゐたか知れなくつてよ。

千代子は此間奥にゐる手島黒木の兩人と軽く會釋を交換はし卓子の前を横切つて秀子の方に行き握手をする。江木は立上る。兩人は互ひに頷合つて會釋をする。

千代子 手島さんに一寸御挨拶して來なくつてもよろござんすか?

秀子 よくつてよ。兩人は彼室へ置いとさやいゝのよ。今に出掛けるんだから。

千代子 お出掛けてすて?

秀子 え、これから痛飲に行かうつていふの。

千代子 (江木に向ひ口早に貴君は行くんぢやないてせう?)

江木 否。

秀子 江木さんは此處に残るんですよ。

千代子 (椅子を引寄せて江木の傍に掛けやうとして)ほんとに好いお住居ですことね。

秀子 ちよいと其處に掛けちや不可いことよ。私の傍へいらつしやい。スルト私はかうやつて兩人の間に割込むの。いしてせう。

千代子 え、お好きならやうに。

ト千代子は卓子を迂回つて行き秀子の右手に掛ける。江木は再び椅子に掛ける。

江木 (一寸沈黙の後秀子に向ひ)かうして見ると千代子さんは奇麗ぢやありませんか。

秀子 (軽く髪を搔いて)只見て奇麗なばかり?

江木 千代子さんとは實際の親友なんだから何と言つたつて好いてせう。

互ひに信じて腹藏ない事を言ひ合つてる間柄だから――

秀子 何の秘密もないんですか、お兩人の間にや?

江木 え――

千代子 (柔かに秀子に絶付いて)私どんなに僥倖だと思つてますわ! 江木さん

んは私に鼓舞されたと言つてますから。

秀子 (千代子を見て微笑して)へエ! 江木さんが然う言つて?

江木 のみならず千代子さんは實行といふ事にかけてちや勇氣を持つてるから實に敬服ですよ。

千代子 マア勇氣なんて如何して私が!

江木 自分の友達の遣つてる仕事にや實に非常なものだ。

秀子 え、その勇氣ね! 勇氣さいありやアね。

江木 勇氣があれば?

秀子 自分の一生の事は如何にか遣つて行けるんですわね。(ト俄かに調子を變へて)パンチ酒の冷たいのを一杯お飲みなさいよ。

千代子 いえ有難う。私そんなものは頂けませんから。

秀子 デア江木さん、貴君少し。

江木 有難う。僕も、

千代子 江木さんも不可いんですよ。

秀子 (キツト江木を見て)私がお願ひしても。

江木 駄目ですよ。

秀子 (笑つて)デヤ私モウ貴君に對しちや勢力は無くなつたのね。可哀相なものね!

江木 飲むことだけは。

秀子 私真面目にお勧めするから今日は飲んで下さい。御自分の爲だと思つて。

千代子 だつて秀子さんそりや不可せんわ。

江木 (秀子に向ひ)なぜです?

秀子 御自分の爲でなけりや、人の爲だと思つて。

江木 とは?

秀子 ツマリ貴君が今迄好きな御酒を一滴も飲み得ないのは、自分で自分を信用してゐないといふ證據を示すやうなものぢやありませんか、又世間の人にさう思はれても仕方がないでせう。

千代子 (獨語して)そりや秀子さん違ひますわ。

江木 世間の奴にや何とでも勝手に思はせるが好いんです——今の處は。

千代子 (喜ばしげに)ほんとに然うですわ。

秀子 私今黒木さんの顔に然う讀めたからいふんですよ。

江木 黒木君が如何な顔してゐたんです?

秀子 貴君が彼室の食卓によう行かなかつたでせう。その時黒木さんがい

かにも嘲弄したやうにニヤリ笑つたんですよ。だからさ。

江木 僕が行き得なかつた？ 勿論初つから貴女とお話をする積りて、好んで此處へ残つたんですもの。

千代子 そりや然うでしたわ。

秀子 しかし黒木さんは、其事を知らないんですもの。だから貴方が彼室へ行き得なかつた時に、黒木さんは手島をジロリと見て厭な顔して笑つたんですよ。

江木 貴女は僕が行き得なかつたといふんですか？

秀子 私ぢや無くつてよ。黒木さんの顔に、如何にもさう見えたとといふんです。

江木 何とでも黒木君の勝手に思はせときやいゝんです。

秀子 チヤ一緒に出掛けることもしないでせう？

江木 え、お兩人の相手をして残りませうよ。

千代子 え、夫れが一番いゝんですよ、ねえ秀子さん。

秀子 (微笑を含んで機嫌よく江木に向つて頷き) チヤモウ岩石のやうに堅くなつてね！ 何處までも其の主義をま守んなさい。さうなけりやならな
い筈ですよ。(ト千代子に向ひねえ千代子さん今朝貴女が大變心配して
入來つた時に、さう話したぢやありませんか――)

江木 (驚いて心配して？)

千代子 (當惑して) 秀子さんその事はどうぞ――

秀子 マア好くつてよ。貴女モウ何もあんなに蒼白くなつて心配する必要
はないんだから。(ト話頭を轉じて) サアこれから三人で面白い話をして
陽氣に遊びませうよ。

江木 (驚いて) 一體何の事です今の話は？ 僕にや少しも分らん。

千代子 秀子さん、モウ何にも仰有らないで下さいましな。

秀子 静かになさいよ。あの厭な判事さんが、貴女をじろく見てるぢやあ

りませんか。

江木 一體千代子さんが蒼白くなつて来たといふのは、そりや僕の事についてですか？

千代子 (泣聲で忍音で) あんな事仰有るから私全く困つちまひますわ！

江木 (しばし千代子の顔を見詰めて、次第に溢面を作つて) それが秘密はないといふ親友の僕に對する貴女の仕打ですか？

千代子 (訴へるやうに) さう怒らないで、私のいふ事を先に聞いて下さい。

江木 (波々と酌がれてあるパンチ酒の一杯を取上げて角ある聲で徐ろに) 千代子さん、貴女は健康を祝するよ！(トグツト呑干して下に置いて又他の杯を取上げる)

千代子 秀子さん、貴女は江木さんの飲むのを黙つて見ていらつしやるんですか？

秀子 私が？黙つて見てゐるて？氣でも違つたの貴女？

江木 手島夫人の健康を祝します。お蔭ですつかり分りました。萬歳！(ト呑干して又酌を頼む)

秀子 (江木の腕を抑へて) ちよいと、モウお止しなさい。ね、それから黒木さん處の宴會へ行くんぢやないの？

千代子 いえ、行くやしないんですよ。

秀子 シツ！彼室から二人で貴女を見てるぢやありませんか。

江木 (杯を除けて) 千代子さん、モウ事實を白状してもいいだらう。

千代子 え！

江木 ね、一體郡長は、貴女が僕の後を追ふて来た事を何と思つてるだらう？

千代子 (手を揉んで) マア秀子さん、彼んな事を聞くんですよ！

江木 一體貴女が東京へ来て僕の世話をしやうといふのは、夫婦相談の上なんだね。

屹度郡長が自分の指金で貴女を越したんだね！ハ、ア！して

見ると僕を又呼戻して何か使はふとも思つたのか、夫れとも骨牌の相

手にてもしやうといふんだね?

千代子 (唸るやうに静かに) マア江木さん! そりやあんまりですわ!

江木 (杯を取つて酌がうとして) 序に老郡長の健康を祝しやう!

秀子 (止めて) モウ飲んぢや不可せん。今から黒木さん處へ行つて手島へ讀んで聞かせる約束ぢやありませんか。

江木 (そつと杯を引いて) イヤ千代子さん、こんな事言つて祝したのは私が悪

かつた。謝罪るから何卒怒らないで下さいねえ。僕が墮落して再び起

上る事の出来たのは、偏に貴女の力ですからね! 世間でも認めてる通り。

千代子 (喜色を現はして) どうも有難う!

黒木 (黒木は時計を出して見て) 手島と共に席を立つて此方へ入り来る。

黒木判事 (帽子と外套を持つて) 奥様追々時刻ですから、お暇しますよ。

秀子 然うですか?

江木 (立上つて) デャ僕もお供しやう。

千代子 (静かに慰めて) 江木さん——不可せんよ!

秀子 (千代子の腕をつねりて) 聞えてよ。

千代子 (軽く叫んで) アッ!

江木 (黒木に) 僕も御厚意によつて御邪魔に上らうか。

黒木判事 眞實に來て呉れるんですか?

江木 是非上りませう。

黒木判事 そりや大いに有難い。

江木 (ポケットの中に原稿の包を入れて) 手島君、此の原稿を書籍店へ遣る前

に、一二ヶ所君の高説を伺ひたい處があるんだがね。

手島 そりや有難う。ところで秀さん海老名さんの歸りはどうしたらいい

かね。

秀子 そんな事御心配なさらなくてもようござんすよ。

江木 (秀子と千代子を見て) 千代子さんですか勿論僕が迎ひに來ますよ。(ト

秀子の傍に行つて奥様十時頃ぢやどうですか？

秀子 結構です、丁度いゝ頃ですよ。

手島 ぢやそりや夫れていゝと。しかし秀さん私はさう早くは歸られない

かも知れんよ。

秀子 え、御ゆつくり——何時までも御遠慮なく。

千代子 (心配氣に) ぢや江木さん私は貴君が迎ひに入來しやるまで、此處でお

待してゐますよ。

江木 (帽子を取つて) 屹度待つてゐて下さい。

黒木判事 ては諸君そろそろ線出すとしやう。今夜の會は大陽氣に遣らうぢ

やないか。或る美人の仰有つたやうに。

秀子 其の美人はそつと行つて隠れてゐますよ。

黒木判事 なぜ隠れてです？

秀子 水入らずの陽氣な話、少し承りに。

黒木判事 (笑つて) マア其美人には御遠慮なされた方がいゝと御忠告しませう。

手島 (笑つて) 然う——！ 秀さん然うぢやないか、え？

黒木判事 ぢや奥様千代子さん左様なら。

江木 (辭義をして) ては十時頃ですよ。

ト黒木江木手島の三人は廣間を通つて出て行く。同時に下婢ラ
ンプを持つて奥から入り來り卓子の上に置いて元の路へ出て行

千代子 (立上つて不安らしく歩き出し) ね秀子さん、今夜はどんな事になるん

てせうね？

秀子 十時にや江木さんが迎ひに來るのよ。ほんとに目に見るやうだわね、

江木さんが今夜眞赤になつてる元氣な風が。

千代子 若しそんな事になつたら如何しませう！

秀子 ねえ千代子さん江木さんはこれから又昔に逆戻りするてせうよ。身

體も自由になるし、勝手な事が出来るわ。

千代子 マアそんな風に燃が戻つて来たら、それこそ大變ですわ。

秀子 彼の人が今夜真面目で歸つて来るもんですか。(ト立上つて傍に行き

貴女は江木さんを飽くまで信じていらつしやるかも知れないけれど、見てゐて御覽なさい、今にさうなつて歸つて来るから。

千代子 貴女のお話を伺うと、何だか氣味が悪いやうですわ。

秀子 さうでせう！私にはね、千代子さん一生の中に、一度は人間の運命を思ふ

やうに線つて見たいと思ふわ。

千代子 今迄随分自由になすつたんでせう。

秀子 まだ一度も。

千代子 旦那様はさうぢやありませんか。

秀子 彼んな人でもなか／＼骨が折れてよ。ねえちよいと、貴女にや分らないかも知れないけれど、實は私大變貧乏なの。それに貴女はお金を澤山

持つてゐるでせう。(ト激して千代子を抱き夫れを思ふと私ほんとに貴女の髪の毛を引ひしつて遣りたいわ。

千代子 離して下さい！後生ですから！何だか貴女恐いことね！

下婢 (入口にて奥様お茶が這入りました。

秀子 然う。今行くよ。

千代子 イエ／＼お茶は澤山です私これから一人て歸ります。今直にお暇します。

秀子 馬鹿な事仰有いよ！サア彼室へ行つてお茶でも召上れ。一人て歸るなんて分らない人ね、十時半になると、江木さんがグデン／＼になつて迎に來てよ。

ト千代子を引摺るやうにして連れ行く。

第三幕

手島博士の部屋。入口と玻璃窓には靴履も帷が下し、卓子の上のランプには蓋があつて心を細くしてある。ストーヴの戸は開いて、今しも殆ど消た斗りの火が見えてゐる。

海老名千代子は大きなショールに包まり、脇掛椅子を、ストーヴ近く引寄せて深くかけ、踏臺に足をのせて眠り沈み、秀子はソファに横り、上に毛布を被けて寝てゐる。

千代子 (聽て) ムックと起上り何か耳聳て、又疲たらしく椅子に倒れ、口の中
で呟きつゝ、まだ? ほんとに、如何したんだらう、まだ迎ひに來ないわね!
下婢奥から靜かに爪先にて歩いて入來る、一通の手紙を持つて。

(千代子は振向ひて小聲で) 誰れか來たの?
下婢 (同く小聲で) はい、只今アノ小さい娘が此のお手紙を持つて參りました。

千代子 (急いで手を伸ばして) 手紙! どれ。

下婢 否、先生に参つたのでございます。

千代子 さう!

下婢 アノ伯母様のお家の女中が持つて参りました。この卓子の上に置いときますから。

千代子 え、ようござんす。

下婢 ランプは消した方が宜うございませう? 油煙が立ちますから。

千代子 え、消して下さい。直に黎明るてせう。

下婢 (ランプを消して) モウすっかり黎明たんでございますよ。

千代子 さう。すっかり黎明て? (呟く様に) 未江木様は歸つて来ないわね!

下婢 私昨夜からさう思つたんでございますよ。屹度こんな事になるだらうつて。

千代子 如何してさう思つて?

下婢 彼の方の事は前々からいろ／＼お話を承つて居りますし、それに今度東京へお歸りになつて昨夜皆さんと御一緒にお出掛になつたんでございますから、さう思ひましたのです。

千代子 モット静かに。奥様が目を覺ましますよ。

下婢 (秀子の寝姿を見て) ほんとにお可哀相に! ゆつくりお寝み遊ばさなければね。ストーヴの火を少し燃しませうか?

千代子 有難う。私は澤山。

下婢 左様でございますか。(ト出て行く。)

秀子 (戸を閉める音に目覺めて顔を擡げて) 何に?

千代子 女中ですよ。

秀子 (見廻して此處にゐたの? さう／＼今此處にゐてね! (トソファの上に坐つて) 伸びをして目を摩つて) モウ何時?

千代子 (時計を出して見て) 七時過ぎた處です。

秀子 手島は何時頃歸つたんでせう？

千代子 まだお歸りは無いんですよ。

秀子 まだ歸らないんです？

千代子 (立上つて) え、誰れも歸りやしません。

秀子 随分ね、此んな處でまじく朝の四時迄待呆けさして！

千代子 私もどんなに江木さんを待つてたか知れやしませんよ！

秀子 (欠伸をして口に手を當て) こんな無駄な苦勞するよりか、初つから寝て仕舞へば好かつたわ。

千代子 お寝みになることが出来て？

秀子 えい。大變好く寝られたの。貴女は？

千代子 ちよつとも。寝られないんですよ。眠らうと思つても、どうして

秀子 (立上つて千代子の傍に行き) ちよいとく！そんなに心配する事は無

くつてよ。昨夜どんな事になつたか。私にや好く分つてるわ。

千代子 さうですか。貴女何とお想ひになつて？聞かして頂戴な。

秀子 勿論昨夜は黒木さんの家で深更くまで騒いだにや極つてよ。

千代子 えい、そりやさうだと私も思ふんです——けれどもね——

秀子 手島も、夜夜中、鈴を鳴らしたり人騒がせをするんでもないと思つたんでせうよ。(ト笑つて) まだ自分でも餘り御機嫌の體を見られちゃ、極りが

悪いもんだから——

千代子 けれども手島様は何處へお泊りになつたんでせう。

秀子 勿論伯母の家へ行つて泊つたんですよ。自分の昔の部屋がまだ其の

まゝにしてありますからね。

千代子 否、彼家へ行らつしやりやしませんよ。只つた今お手紙が参つたんですもの。其の卓子の上に置いてありますの。

秀子 然う！卓子から手紙を取つて見て、伯母が書いた手紙だわね。チャ、昨

夜は矢張黒木さんの家で徹宵したのよ。屹度江木さんが一杯機嫌で文
明史の原稿を朗讀したんでせう。

千代子 マアいゝ加減な想像ばかり仰有るのね！

秀子 貴女も餘つ程お目出度い方ね！

千代子 え自分でもさうだと思つてますの。

秀子 ちよいと、貴女どうかして？大變疲かれてるわ。

千代子 え、モウ疲かれて死にさう。

秀子 チャ少しお休みなさい私の寢床へ行つて。さうなさいよ言ふ事を聞
いてさ。

千代子 いえ駄目ですよ。迎も眠られないんですから。

秀子 マア可いからさ、寢て御覽なさいよ。

千代子 え、けれども今に旦那様がお歸りになりますから止しませう。私直
にお目にかゝりたいのですから。

秀子 歸ると知らせて上げてよ。

千代子 然うですか。

秀子 夫れ迄安神してお寢みなさい。愚圖々々しないで直に行らつしやい
よ。

千代子 有難う。チャ兎も角も寢んで試ませう。

ト千代子は奥の室を通つて行く。秀子は玻璃戸の傍へ行つて帷
を開けると室内カット明るくなる。秀子はライチングテーブル
の上にある手鏡を取上げて髪を搔き廣間の方へ行つて鈴を押す。
下婢入口に現はれる。

下婢 御用でございますか？

秀子 ストローツに火を焚いてお呉れ。寒くつて凍えさうになつて來た。

下婢 直にお暖かにして上げますよ。(ト餘燼を一緒に寄せて其上に燃料を
載せる御門の鈴でござますね奥様。(ト手を休めて耳を聳てる)

秀子 然うだよ。一寸行つて御覽。ストーヴは私が見るから。

下婢 直に燃え附きます。
ト廣間の方に出て行く。秀子は階臺に膝を突いてストーヴに燃料を入れる。やゝあつて手島讓次は廣間から入り来る疲勞していつに無く真面目な顔附。戸口の方へ爪先にて歩き帷と帷の間を脱けんとする。

秀子(ストーヴを見たまゝ)お早う。

手島(振り返つて秀さんだね!)と傍へ寄つて如何してこんなに早く起きてるの?

秀子 え今日は馬鹿に早く起きたんです。

手島 さう。私やまだ無論床の中でグウ／＼寝てるだらうと思つてたのに。

驚いたぢやないか秀さん。

秀子 そんな大きな聲を。千代ちゃんも寝てるますよ私の寢床に。

手島 海老名奥様は泊つてるの?

秀子 え誰れも迎ひに来手が無いんですもの。

手島 さう、江木は來なかつたらう。

秀子(ストーヴの戸を閉めて立上つて)え。黒木さん處ぢや、昨夜面白かつたんですか?

手島 秀さん心配しやしなかつたか?

秀子 心配なんて夢にもしやしませんよ。それよりか良人に聞いてるぢやありませんか面白かつたんですか、如何がでした?

手島 然う、一時は随分愉快だつたが夫れも初の中だけだつた江木が例の文明史の朗讀をして聞かせたもんだから。實は一時間早く行き過ぎたよ、黒木は準備に忙がしかつたから、其間に江木が朗讀をしたのさ。

秀子 然う!如何なんです、江木さんのは?

手島(ストーヴの傍の土耳格椅子に掛けて)そりや秀さんの想像の及ぶとこ

ろぢやない實に傑したもんだよ、今まで文明史もいろ／＼出たが江木の
今度のは確かに大著述だ、あれが出版されたら屹度世間を驚かすだらう
と思ふ。さうぢやないか？

秀子 だつて私にや分らないわ。

手島 そこで私や秀さんに白状すると其の朗讀を聞いた後で私は何だか厭
アな心持になつて仕舞つた。

秀子 厭な心持で？

手島 その朗讀を聞いてる中に江木にあんな傑い物がどうして書けたかと
思つて妬しいやうな氣が起つて來た。

秀子 あさう！さうでせうとも。

手島 しかし、何だね江木が彼れ程の才學を持つて、相變らず盛にやるだけ
は惜しいもんだと思ふ。

秀子 と仰有るのは江木さんは他の人よりか、凡ての事に勇氣が盛んだとい

ふんですか？

手島 いや、然らぢやない。例の飲む事にかけてや盲目だ始めると殆ど度を
知らないよ。

秀子 どんなに飲んで？

手島 どんなに處ぢやない。私つく／＼さう思つたよ。江木なんぞが所謂
狸々がバツカスの神の申子だらうつて。

秀子 デヤ頭に葡萄蔓を巻いちやゐなかつたの？

手島 葡萄蔓？いやそんな物は何にも見え無かつた。そして長い／＼演舌
を試つたよ。自分が文明史を書くについて或る婦人から非常に鼓吹さ
れたといふ事を、喋々と述べ立てたが、夫れが實は彼自身の大變な吹聴な
んだ。

秀子 其の婦人の名を言つて？

手島 言やしなかつたが海老名夫人といふ事は直に私の胸に浮んで來たさ。

無論アノ夫人の事だらうぢやないか。

秀子 をして江木さんとは何處で別れて？

手島 歸へる途中で。最後まで残つてゐた連中は皆んな一緒に黒木の家を出たんだ。黒木も少し運動しやうつて一緒に出掛けたんだよ。それから皆んなで江木を下宿まで送つて遣らうといふ事になつてね、前後不覺に酔拂つて仕舞つたもんだから。

秀子 そんなに酔つて？

手島 ところが秀さん、これから大變な事になるんだよ。寧ろ悲惨の出來事なんだ。私も此話をするのは、實は江木の爲に、恥入る譯なんだが――

秀子 如何な事なの？

手島 と云ふのはその歸る途中で私一寸用を足したもんだから、少し後れて歩いてゐたんだね。ほんの數歩ばかり。

秀子 ヘエぞして如何したんです？

手島 だから一同に追附かうと思つて急いで歩いてるとね、秀さん路傍に何か遺失ちてるものがあるぢやないか、何だと思ふ？

秀子 何だか私に分かるもんですか。

手島 ねえ、こりや秘密なんだから誰れにも話さないでお呉れ。いゝかい。

江木の爲にどうか喋んでゐて貰ひたい。(トポケットから小さい紙包を取出して秀子に見せ)秀さん此れだよ、遺失ちてゐたのは。

秀子 こりや江木さんのぢやありませんか、昨日此處へ持つて來た？

手島 然うだ。江木に取つちや、金錢に代へ難い彼の貴重な原稿なんだ。夫れを遺失してさ、少しも知らないで歩いてゐるんだらう。え、秀さん實に氣の毒な譯ぢやないか。

秀子 なぜ良人直にお渡しにならなかつたの？

手島 今言つたやうに、私よりはズット先へ歩いてゐたし酔拂つちやゐたし、それでよう渡さずに了つた。

秀子 其の話は誰れかにモウなすつたんですか？

手島 いや、まだ誰れにも。江木の爲に、そんな事話されないうぢやないか。

秀子 チャまだ誰れも知つてるものは無いんですね——江木さんの原稿を良人が持つてる事は。

手島 誰れも。又知つてる筈が無いよ。

秀子 夫れから江木さんと何か話をしたんですか。

手島 何にも話はしなかつた。夫れに街路へ出た時や、江木と他二三人の姿は、モウ見えなかつたから。

秀子 チャ其の人達が江木さんを送つて行つたんですね。

手島 何でも送つて行つたらしい。そして黒木も自分の家へ歸つた。

秀子 そして良人はそれから何處へ行つて騒いだんです？

手島 私かい？それから何だよ、他の連中と咖啡店へ寄つて、其處で少時休んで、江木が一睡して目が覺めた時分に返却しに行つてやらうと思つたん

だ。

秀子 手を伸ばして手島のポケットを抑へて返すのは待つて下さい。今でなくてもいいでせう。先づ私に讀ませて下さい。

手島 そりや不可いよ秀さん、私も流石に讀む事だけは出来なかつたよ。

秀子 出来ないですて？

手島 マア考へて御覽、江木が目が覺めて原稿を遺失した事が分つた時にや、どんなに失望するかと思ふと、開けて見られないぢやないか、ねえ、別に原稿の寫して有りやしないんだから、江木も然う言つたよ。

秀子 (訝かし氣に手島を見て) そんなものは二度と書けないもんですかね？ 全じ物を二度と？

手島 そりや出来ないう。鼓舞されて書いたんだもの——

秀子 そりや勿論然うてせうね——(ト思ひ出したやうに) さうく良人に手紙が來てますよ。

手島 變だね。

秀子 (手紙を取つて手島に渡し今朝早く来てよ。

手島 こりや伯母さんからぢやないか！何だらう！(ト原稿を床几の上に置いて手紙を開いて讀下して喫驚して)秀さんお可哀相に若い伯母さんが御危篤ださうだ！

秀子 どうせ初つから極つてることぢやありませんか。

手島 こりや驅けていも行かなけりや御臨終の間に逢はん。私これから直

に出掛けやう。

秀子 (微笑を抑へて)そんなに慌てなくつても。

手島 秀さん一緒に持つて呉れる譯にや行かないか？えさうしてお呉れ。

秀子 (立上つて疲れたらしく)そんな御相談は御免ですよ。死にかゝつてる病人の處へ縁起でもないわ。そんな厭なものに關係させるのは、斷じて止して下さう。

手島 さうデヤ私獨りで行つて来るからいゝよ。(ト室内を歩き廻つて私の帽子は？外套は？ア廣間だ。どうか間に逢つてくれりやいゝな。え、秀さん。

秀子 急いで行らつしやい。

下婢 出て来り

下婢 黒木さんが入来しやいました。只今お目にかかれませうかつて。

手島 今？私は逢つてゐられない。

秀子 私がお目にかゝります。(ト下婢に)此處へお通し申してお呉れ。

下婢 出て行く。

(慌て、手島に囁き)良人原稿！(ト床几の上に在るのをいきなり取る)

手島 それは私が持つてゐやう。

秀子 不可せんよ。良人が歸へつて来るまで何處かへ隠つときますから。

トライチングテーブルに行つて書篋の中に押込む。手島は慌て

手袋を穿めかねてゐる處へ、黒木判事席間から入り来る。

秀子 (頷いて) 大相お早い事ね!

黒木判事 早過ぎたんですか? (手島に) お外出かね?

手島 これから伯母の家へ如何しても行かなくちやならん。病人が死にかゝてるから。

黒木判事 然う! そりや大變だ。構はないで早く行きたまへ。危急の場合だ。

手島 駈けて行かなけりや間に合はんかも知れん。チャ失敬するよ!

ト慌て、廣間の方へ出て行く。

秀子 (黒木に近寄つて) 黒木さん、昨夜貴君のお家ぢや、御愉快といふよりか大騒ぎでしたつね。

黒木判事 え、まだ衣服も着變へない始末で。

秀子 さう?

黒木判事 御覽の通り! ところで手島君は昨夜の一件を何の位の話したんで

す。

秀子 何だか詰らない事言つてましたよ。歸りに珈琲店へ寄つたとか何と

か。

黒木判事 その珈琲店の話は、私も聞いた。しかし江木は一緒ぢや無かつたて

せう?

秀子 江木さんは、其前に連の人に送られて歸つたんですと。

黒木判事 手島君も送つて行つたのか知ら?

秀子 いんえ、他の人達が二三人で送つて行つたさうです。

黒木判事 (微笑して) ねえ、奥様、手島君は實際無邪氣な好い方だ。

秀子 そりや全く然うね。しかし貴君の仰有ることは何か秘密でもあるんですか?

黒木判事 サア有ると言や有りますがね。

秀子 さう! 如何な事? ちよいとマアゆつくり掛けて聞かして下さい。

ト卓子の左方に掛ける。黒木は秀子の傍に寄る

秀子 ね、如何な事？
黒木判事 昨夜はね、私も一緒に掛けたんです。一同の歸へる時に——それには少し譯があつて——一同と言つても其の中の一部分ですがね。

秀子 其の中に江木さんもゐたんですか？
黒木判事 實は、江木もゐたんですよ。

秀子 厭に氣を揉ませるんですね——
黒木判事 それから江木や他の連中は何處で第二次會を開つたと思召す？

秀子 私に聞かして差支ない事なら話して下さい。
黒木判事 戯談ぢやない無論差支ない事ですとも。それから、なんですよ、不思議に陽氣な處に出掛けたんですよ。

秀子 面白い處？
黒木判事 素敵に面白い處。

秀子 モット聞かして下さい。

黒木判事 ツマリかうなんだ江木が其家からかねて招待を受けてゐたんです。其事は私も前から知つてた。ところが江木は其處へ行くのを謝絶つたんだ。そりや、御承知の通り今ぢや改心して眞人間になつてますからね。

秀子 アノ郡長の家にゐた時や眞人間になつてゐたでせうよ。ツマリ江木さんは其處へ行つたんですね？

黒木判事 お話した通り不幸にして昨夜は奴さん大分酩酊つたものだからね、私の家て——

秀子 何でも大變上機嫌だつたさうですな。

黒木判事 餘り上機嫌を通り過したものだから、流石の改心家も心機忽ち一轉したと思はれるんだ。そりや男なんてえ奴ア平生如何な堅固い事言つ

て、いもいざとなると當にやなりませんから、ねえ奥様。
秀子 ホ、貴君だけは例外ね。そして江木さんは、夫れから如何して？

黒木判事 ツマリ要するに——心機一轉の結果長谷川なるものゝ家へとうと
う一の天國を發見した譯なんだ。

秀子 長谷川つて？

黒木判事 いや其處の女將でさ。それが不斷御最負筋の紳士や婦人連を呼ん
て御馳走をした譯です。

秀子 待合の女將？

黒木判事 先づそんな代物。

秀子 元藝者？

黒木判事 然う。海山千年。今迄何人男を殺したか分らん程の手取者——ツ

マリ江木は其女の全盛時代に可愛がられてゐた旦那の一人でさね。

秀子 それで話は如何なるの？

黒木判事 さうすると歡樂の巷は一變して大亂痴氣！女菩薩の長谷川は阿修
羅の如くなつて擲るやら打つやらの大騒ぎ。

秀子 江木さんを？

黒木判事 え。といふのは江木が自分の持つてた物が見えないといふので女
將や他のお客を捕へて誰れか盗んだと言ひ出したのが原因なんです。

何でも手帳がなくなつたとか言ふんだ——其他にもまだなくなつた物
があるとか言つてましたがね。ツマリ夫れが爲に江木が大亂暴を働い
たんです。

秀子 夫れから如何なつて？

黒木判事 夫れから紳士も婦人もごつちやになつて擲る蹴る上を下への騒ぎ
の處へ巡査が飛込んで來た。

秀子 巡査が！

黒木判事 そこで止せばいゝのに奴さん又馬鹿な事を遣つたんだ。

秀子 どうして？

黒木判事 今度は其の巡査の奴に喰つてかゝつて耳を擲つた上に外套を滅茶

々に引割いて了つたんです。それでとうとう警察へ引かれて行つたやうな始末で。

秀子 貴君どうしてさう好く御存知なの？

黒木判事 巡査から聞いたんですもの。

秀子 (獨語のやうに) マアそんな大騒ぎがあつたんですか！しかし黒木さん 貴君なぜそんな風に江木さんの後をつけて探偵なさるの？

黒木判事 兎に負警察へ拘引られるといふ騒ぎになつたんですから知らん顔しちや居られないぢやありませんか。況や私の家からの歸途の出來事なんだからね。

秀子 そして江木さんは告訴されるんですか？

黒木判事 勿論ですとも。しかしそれはそれとして、江木の昨夜の出來事についてかう精しくお話をするのは、御懇意な間柄の義務だと思ふからですよ。

秀子 義務とは、モット明確言つて下さい。

黒木判事 なぜかといふとです、江木君は、貴女をいゝ道具に使やしないかと思ふんで、夫れを非常に心配してゐるんですよ。

秀子 なぜそんなやうに考へてゐるんです？

黒木判事 私だつて盲目ぢやありませんや。ね々奥様海老名夫人が此市へ愚圖々々してゐるのを、何と思つてお出です？

秀子 二人の間に何か關係でもありや、逢へる處は、私の家でなくても他處に澤山あるぢやありませんか。

黒木判事 ところが、普通の家ぢや一軒だつてありやしなないんです。今後は家らしい家で、江木の身を安ずる處は、恐くないかも知れない。

秀子 テヤ私の家でも、江木さんの出入を止めると仰有るんですか？

黒木判事 然うです。若し彼の男が今後此處へ自由に出入するやうな事になると、それが第一私に取つて危険至極だて、強いて――その

秀子 三角同盟に？

黒木判事 全く。だからさうなると私のやうなものは何處へ燻つていゝか分りませんや。

秀子 三角同盟の主人公にならうていふのが——貴君の目的なのね？

黒木判事 (徐に頷いて小聲で) 然う、それが私の目的なんだ。そりや如何な手段を施しても此の目的だけは達したいと思つて始終之が爲に奮闘してゐる譯なんです。

秀子 (微笑はいつしか消えて) 貴君も随分危険人物ね——いざとなると。

黒木判事 そう見えますか？

秀子 今迄は然うとも思は無かつたんですけど——ほんとに今日迄貴君の手にかゝら無かつたのは、私實に僥倖だと思つてよ。

黒木判事 (怪し氣に打笑みて) へ、エ！成程そりや仰有る通りかも知れん。さういふ場合にや如何な事爲るか分りませんからね。

秀子 ちよいと黒木さん。何だか私は貴君に強迫されてるやうね！

黒木判事 (立上つて) 御戲事ですよ。ねえ、兎に角三角同盟なんて奴ア強ゐられて出来るもんぢやありませんや、お互に意氣が合つて自然に自由意思で出来なくちや虚です。それで堅めて行くのが一番ですよ。

秀子 私の説もさうですわ。

黒木判事 ところで言ひたい事だけは存分に言つて了つたしモウお暇しませう。左様なら奥様！(ト玻璃戸の方へ行く)

秀子 (立上つて) 庭の方からお歸り？

黒木判事 さ其方が近道だから。

秀子 近くつても裏路ぢやありませんか！

黒木判事 裏路結構！兎角裏路の方にや好い事がありますからね。

秀子 ビストルでも持つてる時や尙更ね。

黒木判事 (戸の傍に立つて笑つて) へム！自分の家の蓄鶏を撃つ人はあります

まいからな。

秀子 おまけに一羽しかないものをねえ！

ト双方笑つて、額を挨拶を仕合つて黒木は出て行く。秀子は戸を閉めて、暫時真面目な顔をして戸外の方を見る。やゝあつて奥の室の帷を分けて飛んで行き、それからライチング、テーブルに行つて書篋から江木の原稿を取り出して幾頁か繰つて見る。此時下婢の聲が廣間の方に高く聞える。秀子は振り返つて其の聲を聞き慌て、原稿の包を抽斗の中に仕舞ひ込み鍵を下ろす。此時江木外套を着たまゝ、手に帽子を持つて廣間の戸を引き開ける。面色只ならぬ躰。

秀子 オヤ江木さん！

ト這入つて戸を閉める

秀子 今頃お迎ひに？ マア遅い事ね！

江木 僕は寧ろ早いと思つたが、どうも失禮。

秀子 千代子さんがまだ此處にゐるのを如何して御存知？

江木 宿屋へ行つたら、昨夜から歸らないといふ事ですから。

秀子 宿屋ぢや如何な顔してゐました？

江木 (不審氣に) 如何な顔とは？

秀子 いえね、皆んな變に思つてやしなかつたの？

江木 ハ、ア成程彼の婦人を私が陥付けたといふんでせう！ しかし何にも

そんな様子は。手島君はまだ寝てゐますか？

秀子 え、まだでせう。

江木 昨夜は何時頃歸つたんです？

秀子 え、馬鹿に遅かつてよ。

江木 何か話がありましたか？

秀子 え、黒木さんの家で貴君方が大變御愉快だつたといふ事だけ聞きました

た。

江木 その他に？

秀子 何にも。私大變眠かつたから碌に話も聞かなかつたの。

海老名夫人奥の帷を開けて入り來り

千代子 (江木の方に行つて) マアヤツと今頃？

江木 やつと。ア、モウすつかり駄目になつちまつた――

千代子 (心配氣に江木を見て) 何が駄目なの？

江木 萬事駄目！すつかり駄目になつて了つた――

千代子 何をそんな事言つてるんですよ。

江木 マア今に話をします。

千代子 そんな駄目な話なんか厭ですわ。

秀子 秘密のお話があるなら、私彼室へ御遠慮してよ。

江木 いえ、貴女も此處にゐて聞いて下さい。

千代子 何にも話なんか聞かなくつてもいいんですよ。

江木 イヤ話といふのは、昨夜の珍談などぢやないんです。

千代子 チヤ如何な話です

江木 千代子さん、貴女と僕とは今日ぎり西と東へお別れをしなければなりません。

千代子 別れるんです

秀子 私分つてるわ！

江木 なぜなれば、モウ貴女に用は無くなつたから。

千代子 江木さん！貴君そんな事が好くも私に言はれた義理ですわ？私に

用は無いですか？今迄のやうにお手傳ひしなくつてもいいと仰有る

江木 今日からモウ僕は仕事を爲なくつてもいい。

千代子 チヤ私これから如何したらいいんです？

江木 私と懇意にならない前だと思つて何とか身の振形を附けて下さい。

千代子 だつて、そんな事私にや出来ないなんてすもの。

江木 兎に角如何なりと試つて見て下さい。モ一度田舎へ歸るんです。

千代子 (激して) 歸るなんて、そんな事死んでも。私は貴君のゐらつしやる處にゐるんです。貴君に棄られてあちこち彷徨くのは厭ですから。いつまでも此市にゐます。彼の本の出版が出来るまでは、貴君と一緒にゐます。

秀子 本！ア然うね。

江木 (秀子の顔を見て) 其の本は千代子さん二人で拵へたものです。

千代子 然うですとも。ですから、其の本が出来るとは私は貴君と一緒にゐてもいい権利があると思ひますわ。夫れに貴君の評判や名譽も是非一度は見つて、そして其の喜びも分けて頂きたいのですから。

江木 所が其の本はモウ駄目です——

秀子 マア！

千代子 出来ないんです？

江木 逆も出来つこはない！

千代子 あの原稿は如何して了つたんです？

秀子 原稿どうして？

千代子 何處に如何して了つたんですよ？

江木 其事はモウ何にも聞かないでゐて下さい。

千代子 いえ、聞かして下さい。私にや聞く権利があります。

江木 原稿は———そうです———その原稿は滅茶々に破つて了つた！

千代子 (叫んで) そんな事があるもんですか！

秀子 虚。

江木 虚です？

秀子 貴君が自身に仰有る事だから眞實かも知れませんが———まさか

然うは信じられないぢやありませんか。

江木 いえ全く。

千代子 マア彼れ程丹精して拵へたものを、そりや餘りぢやありませんか！

江木 僕はモウ自分の一生を滅茶々々に破つちまつたから、一生の仕事も自

然滅茶々々になる譯です。

千代子 そりや昨夜破つたんですか？

江木 え昨夜、寸断々々に割いて川の中へ投つてしまつた。スルト夫れが

風に飛び波に漂ふて見る／＼中に段々沈んでしまつたんです。丁度僕

の今の境遇のやうに。

千代子 ねえ江木さん其の本は如何して出来たのか、よもや忘れはなさらな

いてせうね——あの本には私の精神が注ぎ込んでありますよ。私の精

神の凝結が。夫れを破つて捨てられたのは、私にや自分の子を殺された

のと同じですよ！

江木 そりやさうでせう。尤です。私は確かに子殺しの罪を犯したのと同
じだ。

千代子 そして貴君は如何なさる積りです？其の子供は貴君一人のぢやあ

りますまい。

秀子 (微かな聲で)ア、子供——

千代子 (息を吐いて)ア、私もこれでおしまひです。奥様私モウ御暇します。

秀子 何處へ行くんです？又田舎へですか？

千代子 如何したらいいか、私にや分らなくなりました！何んだか前途が真

闇になつて了ひましたの！左様なら！

ト廣間の戸を開けて悄然として出て行く。

秀子 (少時黙然と佇立して)江木さん、千代子さんを送つて行かないんですか

江木 僕が？彼の女と町中を一緒に？——私はいゝが、彼の女に耻をかゝせ

るのが氣の毒だ。

秀子 昨夜どんな事があったか私よく知らないけれど千代子さんとは今迄通り、一緒になつてゐる事は出来ないの？

江木 え、そりや昨夜の事ばかりが原因ぢやない。私にや分つてゐるツマリ今迄のやうな生活を續けて行かうといふ勇氣が亡くなつてしまつたんだ。ツマリ彼の婦人は生活の快樂や勇氣や奮闘力を皆んな僕から奪ひ去つてしまつたんです。

秀子 (獨語して) あんな女にでも男一匹の運命を自由にする事が出来るか知ら！(ト江木の顔を見て) しかし江木さん貴君も随分無情ね！如何して急にさうなつたの？

江木 無情だなんて言はれちや困るよ。

秀子 だつて然うぢやありませんか。長い／＼間千代子さんが精神込めて、貴君の手傳ひをして、やつと出来上つたあの原稿を破つて捨てた了ふなん

江木 デヤ秀さんにだけ事實を打明けやう。

秀子 事實つて？

江木 先づ私に誓つて下さい——これからお話する事は千代子の耳に入れないといふ約束をして下さい。

秀子 え、決して話しません。

江木 デヤ言ひますがね實は今の話は皆んな虚です。

秀子 原稿の事？

江木 え。破りもしなけりや川にも捨てはしない。

秀子 へエ！デヤ何處に在るんです？

江木 尤も亡くした事は亡くしたんだ。ツマリは破つて捨てたのも同じ事になるんだ。

秀子 分らないわ。

江木 ねえ、私が原稿を破つて捨てたのは、千代子さんが自分の子供を殺され
たのと同じだつて、今言つただらう。

秀子 え、さう言つてよ。

江木 しかし、子供を殺すといふ事は父親としちや強ち大罪惡ぢやあるまい
と思ふんだ。

秀子 ヘエ！大罪惡ぢやないんです。

江木 只其母たる千代子に、内證にしやうと思つて有の儘を語らなかつたの
が一番罪です。

秀子 スルト貴君の大罪惡を犯したといふ話は？

江木 マア、譬話をすると此處に一人の男があるんだ。此の男が昨夜飲むや
ら騒ぐやら大亂痴氣を遣つて朝になつて、茫然家へ歸つて細君に向つて、
己りや昨夜子供を遺失つたといふのは、それからそれと、方々飲歩いてる
中に前後不覺に酔拂つてたもんで連れてた子供を何處に如何したのか、

何時の間にか失なつてとう／＼發見からない。何處の誰れが勾引した
のか拾つて行つたのか、さつぱり譯が分らんとかういふでせう。

秀子 ツマリ貴君の話は、自分の原稿を失くしたといふに過ぎないでせう？

江木 え、そりや原稿にや違ひないが、千代子の精神が籠つて出來たもんなん
だから。

秀子 分りましたよ。

江木 だから、其の本即千代子の精神を無くして、了へば千代子と僕との將來
の關係は、自から絶えて了ふ事になるだらう。

秀子 それで貴君はこれから如何しやうといふの？

江木 別に仕様はない。只私が如何に自分の身の始末を附けるか、夫れを見
てゐて下さい。附けるのは早ひ程私にや好い。

秀子 (一歩進んで) ねえ、江木さん始末を附けるなら立派に附けて下さい。ね
え！

江木 立派に？ハ、ア好く秀さんが言つたやうに葡萄蔓でも頭に巻いて？
秀子 いんえ葡萄蔓なんて——私モウそんな事考へてやしません。ツマリ立派にです！たつた一度！チャ左様なら。分つたらモウお歸んなさい。

モウ二度と此處へ来ちや不可なくつてよ。

江木 左様なら！手島君によろしく。(ト出て行かんとする)

秀子 一寸待つて下さい！私の紀念品を上げますから、これを持つて行つて下さい。

トライチング、テーブルの押斗からピストルを取出し來り、江木に渡す。

江木 (秀子の顔を見て)これが——これが貴女の紀念品？

秀子 (静に頷いて)記憶へてゐるでせう？いつか貴君を撃とうとした。

江木 其時これを貴女が用ふべきであつたんですね。

秀子 今度はこれを貴君が用ふるんですよ。

江木 有難う。(トのポケットに入れる)

秀子 左様なら、鐮木秀子さん！

江木 左様なら、鐮木秀子さん！

ト江木は廣間の方に出で行く。秀子は少時戸の傍に立つて耳を聳てゐるが、やがて、ライチング、テーブルに行つて紙包の原稿を取出し、中を覗いて一二枚原稿を引出して一寸見て、ストロウの脇掛椅子に行つてかけ紙包を膝の上のせて、暫時考へた後、ストロウの戸を開いて紙包を開ける。

秀子 (原稿の一枚を火中に投じて)千代子さん、私今貴女の子を焼殺してよ！綺麗な髪の毛の千代子さん！(ト幾枚も火中に投じて)貴女と江木さんの間に出來た子よ！(ト残部を悉く投入して)ア、いゝ氣味！く！ (幕)

第 四 幕

前幕と同じく手島博士の部屋。時は夕暮。室内は暗くなつてゐる。奥の室には卓子の上に釣ランプが點いて、ガラス戸の窓帷は下ろしてある。

秀子は黒色の服を着けて暗い室内を彼處此處と歩いてゐる。やがて奥の方へ行つて左方へ折れると、ピアノの音が起る。ピアノが止むと再び此方へ入り来る。

下婢ランプを持つて奥の室の右手から出て來り床牀の前の卓子のの上に置く。目は泣腫してゐる。やがて靜かに元の路に出て行く。

秀子は戸の方に行つて窓帷を少し一方へ寄せて戸外の闇を眺める。

此處へ博士の伯母悄然として廣間から入り來り秀子と握手をして、うるみたる聲にて、

伯母 秀さん可愛相に妹がね、とう／＼いけませんでしたよ。

秀子 さうでございますつてね。手島から端書が参りました。

伯母 さうですか。何でも御通知すると言つてましたよ。他の事とは違ふんですから、此處にや自分て御報知しなければと思つて、夫れて態々上つたんですよ。

秀子 そりやどうも御親切様。

伯母 ほんとに、妹も今死んで呉れなくともね！新婚旅行の歸りたてなのに、こんな不幸があつちや、秀さんが迷惑ですよ。

秀子 (話頭を轉じて) 御臨終は、お樂だつたさうですね？

伯母 えッえ、まるで眠るやうに静かて、ほんとに大往生でした。讓次が驅附けて來た時は、そりやモウ何とも言へない嬉しさうな顔をしましてね、左

様ならつて暇乞だけは、立派に出來たんですよ。まだ歸りませんか、讓次は？

秀子 いんえ、直にや歸れないと言つて参りました。マアお掛け遊ばせ。

伯母 有難う。ゆつくりしたいけれど、今日は然うしてゐられないんですよ、忙しいので。これから入棺をさせたりお化粧や何かして遣らなくちやなりませんから。せい／＼出來るだけ奇麗にして、彼の世へ遣りませんとね。

秀子 何かお手傳ひする事がございますなら。

伯母 頼でも無い。花嫁御は此んな事にや手を引込めてるもんですよ！マア、他處事だと思つて、餘計な心配をしないで下さい。ことに新世帯の持立に縁喜でも無い。

秀子 だつてさう一概にも参りませんからね。

伯母 マア私の家ではこれから、妹に着せて遣る經帷子を縫は無くちやなら

ないが此處でも今に新しく縫ふ物が出来て来ますよ。しかし新しく縫ふのは全ても、こちらの縫ふものが遠くから——有難い事ですよ。

此處へ手島讓次、廣間から入り来る。

秀子 お歸んなさい。丁度好い處でした。

手島 伯母さんは此處でしたね。今迄秀子と？ マア然うですか！

伯母 私今歸らうとしてゐた處だよ。さつき言つといた事は悉り整としと

いてお呉れだつたらうね？

手島 ところが伯母さん濟みませんでしたでしたが實は忘れてしまつて、仰有つた

半分も出来なかつたんです。明日早速出直して上りませう。今日は頭

腦が變に混亂して了つて、何にも考が纏りませんから。

伯母 マアそんなにお前、神經を痛めると毒ですよ。

手島 何をですか？

伯母 いえね、此んな時や、少し吞氣にしてお出でなさい。私のやうにさ。出

来た事は仕方が無いやね。

手島 ア亡くなつた伯母さんの事を仰有るのですか。そりや然うですとも。

秀子 貴女、これからお獨りて、お淋しいでせうね。

伯母 ナアニ、當分の中ですよ。永い事はありません。亡妹の部屋も亦いつ

までも空け置く譯にや行きませんから。

秀子 ヘエ！誰方が彼室へ入来しやるんですか？

伯母 え、世話して遣らうと思や、いくらでも來手はありますよ。親戚の無

い不具者や何か、氣の毒な人達が。

秀子 またそんなお荷物！お大體ぢやありませんね！

伯母 マアお荷物なんて！私見たいな世話好にや少しも苦にやなりません

よ。

秀子 けれども丸きり御存知ない方が來らつしつちや——

伯母 いえ、病人ですと、直に朋達になりませすよ。マア執にしても、誰れか來て

貰ふ事になけりや私一人でも困りますから。此家にしても又これから何かとちよい／＼ね、いろんな用が出来て、私見たいなものでも時々お世話に上るやうなことになるますから。

秀子 いえ、私共の家の事なんか、別に御心配下さら無くつても。

手島 ねえ、秀さん、これから伯母さんと三人で——え、何したらね、如何なに愉快だらう。

秀子 何したら何です？

手島 (一寸困つて) マアいゝよ。今に萬事獨り手に都合好くなつて来るから。

又然うなるやうにしたいぢやないか。

伯母 そりや然うだとも。その事はお前秀さんと相談をするがいゝよ。(ト

打笑みて) 又秀さんからも話があるだらうから。サアモウお暇しませう。

(ト戸の方を見て) ねえ、讓次や、お前の阿父さんも伯母さんも、矢張私の家で亡くなつた事を思ふと、何だか不思議なやうな氣がするよ。

手島 ほんとに然うですな!

ト伯母は廣間の方へ出て行く。

秀子 (手島の後姿を冷やかにじろ／＼と見ながら) ついて行き、肝腎な伯母さんより、良人の方が餘程元氣がなくなつてね。

手島 そりや伯母さんのお死去になつた事、斗りぢや無いよ。江木の事を考へると、どうも心配でならん。

秀子 (早口に) 江木さんの事について何か聞込んだ事があつて？

手島 私午後から一走り江木の處へ行つて、アノ原稿の事を話して遣らう私の手許に無事に預つてあるから安神せいつて。

秀子 さうですな! あれからまだ江木さんに逢はないんですか?

手島 逢は無い、下宿に居なかつた。其後、海老名奥様に逢つたら、江木が今朝早く此處へ遣つて来たやうなことを言つてゐたが、然うかね?

秀子 え、良人がお出掛になると直。

手島 そして原稿は滅茶々に破つて了つたと、言つたさうぢや無いか？

秀子 然う言つてよ。

手島 スルト、江木は全く氣が違つて來たんだな可哀相に。秀さんも其時原稿は、よう渡さ無かつたんだらう。

秀子 え、渡しませんでした。

手島 しかし預かつてる事だけは、無論話したんだらうね？

秀子 否。良人は海老名さんに話したんですか？

手島 私もよう話さ無かつた。しかし秀さんは話して呉れりや好かつたのに。江木が絶望の餘り自殺でもしたら、實に氣の毒な譯だからね。秀さん原稿を出してお呉れ。私これから直返却しに行つて來やう。原稿は

何處に在るの？

秀子 椅子に掛けたまゝ、身動きもせず冷やかに「モウ持つてゐません！

手島 持つてゐ無い！如何した？

秀子 焚いちぢまひました——皆んな。

手島 (飛上つて驚き叫び) 焚いちぢまつた！江木の原稿を？

秀子 (制して) そんな大きな聲をなさるな。女中に聞えるぢやありませんか。

手島 焚いて了ふなんて！如何したんだね秀さん！そんな馬鹿な事の出

出来る譯のものぢやないぢやないか！

秀子 ですけど、焚いちぢまつたものは仕方がないわ。

手島 考へて御覽！假令拾つたものにした處が、そんな事するのは法律の罪

人だよ。黒木にでも聞きや、直に分かる話ぢや無いか。

秀子 黒木さんにも誰れにでも、此話はしないのが一番いゝんですよ。

手島 しかし、秀さん如何してそんな大變な事をして、了つた？そんな氣に如

何してなつた？何と思つて爲たの？え、秀さん？

秀子 (微かに冷かな笑を漏して) 良人の爲を思つたからですよ！

手島 私、私の爲を？

秀子 今朝良人が家へ歸つて来て江木様が原稿の朗讀をした話をなすつた時に――

手島 フム！其時に？

秀子 其時良人は江木さんが嫉妬しくなつたつて言つたでせう！

手島 そりや本心から言つた譯でも無かつたよ。

秀子 孰にしても他人の爲に良人が遜色を取るのかと思ふと私厭ですもの。

手島 (半信半疑の躰にて喜び叫び) 秀さん、そりや眞實かね？ 實際さういふ心

で爲て呉れたのかね？ (ト一寸考へて) しかし秀さん、それ程私に親切心が

あつたならなぜ今迄一度でも夫れを見せて呉れ無かつた？ え、秀さん！

秀子 え夫を良人に見せる時が初めて來たから。――(ト堪え切れなくなつて)

マアそんな事は私よりか伯母さんに聞いて下さい、すると好く分ります。

手島 ア、私大概見當がついたよ秀さん！ (ト手を組んで) しかし果してさう

かしら――え？

秀子 靜かに仰有いよ。女中に聞えるぢやありませんか。

手島 (喜餘つた笑ひ聲で) 女中！ 秀さん變なこといふね！ 女中つて――お花

より外に居やしない！ 私行つてお花に話して來よう。

秀子 (絶望の色を表はし揉手をしながら) ア、私モウほんとに遣り切れない

わ！

手島 何秀さん――え？

秀子 (冷やかに落着いて) 馬鹿々々しいにも程がありますよ。

手島 馬鹿々々しい？ 私がこんなに喜ばしく思つてるのが。併しお花には

まだ話さない方が好からう。

秀子 いゝえ話したつて構ひませんよ。

手島 イヤモ少し話さないで置かう。しかし伯母さんにだけは是非お話し

なけりやならん。そりやモウ如何なにお喜びになるか分りやしない。

秀子 良人の爲を思つて江木さんの原稿を私が焼いたといふ事をお聞きに

なるとですか？

手島 否——イヤ夫れも然うだが。勿論此原稿の事は伯母さんの外にや誰れにも漏す可き事ぢやない。兎に角秀さんが私の爲を思つてして呉れた事なんだから伯母さんは當然其の喜びの分配をなさらずにちやならない！しかしねえ、秀さん世間の若い細君達にや、こんなやうな事は普通出来ることか如何だらう？私に夫を知りたい。

秀子 それも伯母さんに聞いて御覽遊ばせな。

手島 折があつたら聞いて見やう。(ト再び不安の色を表はして)しかし秀さん彼の原稿だね！江木の心中を思ふと私は戦慄として何だか恐怖しくなつて来る。

海老名夫人、奥廣間の戸を開けて入り来る。

千代子 (慌しく挨拶して)不安らしく奥様又御邪魔に伺ひました。どうか怒らないで頂戴な。

秀子 如何かして？

手島 何か江木君に變つた事でもあるんですか？

千代子 え、何でも江木さんに大變な事が起りやしないかと思ふんです。それにて私心配でなりませんの。

秀子 (千代子の腕を握つて)ア！然うなの？

手島 まさかそんな事は！しかし奥様如何してそんな事仰有るのです？

千代子 今朝歸りますとね、宿の者が頻りと江木さんの噂をしてるんですよ。何でも今日は方々で江木さんの事について大變悪い評判が立つてるさうですけれども私進も信じられませぬの。

手島 イヤその噂は私も一寸聞きましたよ。しかし江木君は昨夜真直に歸つて下宿に寝たに違ひ無いんですがね。

秀子 下宿の人達は何と言つてました？

千代子 精しい話はまだ聞きませぬの。下宿の者も別に確かな事を知つて

る譯でもないやうですが、夫れとも如何ですか——私の顔を見ると直に

話を止めて了ひました。私も強いてよう聞かなかつたんです。

手島 (不安らしく歩き出して) そりや奥様何か貴女のお間違ひぢやありませんか、屹度さうですよ。

千代子 いゝえ。噂をしてるのを聞いた事は確かに聞いたんでございます。

何でも病院とか何處とかで、江木さんが如何かしてゐるやうな事言つてゐ

ました。

手島 病院?

秀子 病院なんて、そんな事のありやうはないわ。

千代子 いえ、然う言つてゐましたの。それで私も吃驚しまして、夫れから直

に江木さんの下宿を訪ねて見たんですよ。

秀子 態々訪問に?

千代子 え、心配で——宿に静としてゐられ無かつたもんですから。

手島 しかし下宿にや居なかつたんでせう。

千代子 え、居ませんでした。何處へ行つたのか、下宿でも様子を知つてゐるも

のは誰れも無いんです。何でも昨日午後出掛けたり、歸つて来ないそ

うです。

手島 昨日! そりやをかしいですな。

千代子 てすから何か江木さんの身の上の間違ひが起つたとしか思はれま

せん。

手島 如何だらう、秀さん、私今から心當りを探しに行つて見やうか?

秀子 否々、良人は自分から關係しないていらつしやい。

此時下婢奥から廣間の戸を開けると黒木入り来る。戸は直に閉

まる。黒木は手に帽子を持つて、いつに無く眞面目に、無言のまま、

辭義をする。

手島 ヤア黒木君か!

黒木判事 今夜は是非逢はなくちやならん事があつて遣つて来たよ。

手島 伯母の處から使者が行つたらう。

黒木判事 ア来たよ。

手島 君の来たのは悪い話ぢやないだらうね？

黒木判事 サア。そりや解釋次第だがね。

手島 (訝かし氣に黒木を見て) 何か他に事件でも起りやしないか？

黒木判事 起つた。

秀子 (熱心に) 何か心配な事ですか？

黒木判事 それも取る人の心一つですがね奥様。

千代子 江木さんの事ぢやありませんか？

黒木判事 (一寸千代子の顔を見て) 如何してそうお考へになつた？モウ何か御

承知ですな？

千代子 (當惑の體にて) いゝえ別に承知してるといふ譯でも――

手島 戲談ぢやないよ兎に角話して呉れたまへ、如何な事か。

黒木判事 可哀相に江木君は病院に送られたよ。モウ死にかゝつてる。

千代子 矢張病院ですか！ マア私如何しませう！

手島 病院へ？そして死にかゝつてるて？

秀子 (思はず口へ出して) マアそんなに急に！

千代子 ねえ奥様江木さんとは先刻怒つて別れた切りですわね！

秀子 (小聲で) けれどもねえ千代子さん――

千代子 (耳にもかけず私今から病院へ行つて來ませう。命のある中に一目

逢つて來ますわ。

黒木判事 モウ駄目ですよ。行つたつて逢へませんから。

千代子 一體如何してそんな事になつたんでせう？其譯を早く聞かして下

手島 江木君が自分で遣つた譯でもないだらう。

秀子 勿論自分で遣つたんですとも。

手島 秀さんは又如何して知つてる？

黒木判事 (秀子の顔を見詰めて) 奥様好く御承知だ。全く然うですよ。

千代子 マア！何て恐ろしい！

手島 自分で遣つたとは！變ぢやないか？

秀子 ビストルで遣つたんですか？

黒木判事 御推察の通り。

千代子 (態と心を鎮めて) そりや黒木さん何時の事でございますか？

黒木判事 今日の午後——三時と四時の間です。

手島 しかし何處で遣つた？

黒木判事 (少し慌て) 何處？そりや無論何だね、自分の下宿で遣つたんだらうぢやないか。

千代子 いえ下宿ぢやありません。六時過ぎに私参つたんですもの。

黒木判事 チヤ何處か他處でせう。私も確かにや知らないが只やつた事だけは、知つてます。胸部を射抜いたんです。

千代子 マア！如何したんでせう！夫れて助から無いですかね。

秀子 (黒木に) 胸を撃つたんでして？

黒木判事 然うです。

秀子 チヤ頭部では無いんですね。

黒木判事 え、胸です。

秀子 さう——胸も急所ですからね。

黒木判事 え？何ですて？

秀子 イエ何でも無いの。

手島 そして傷は重いんだつて？

黒木判事 迎も見込は無い。今頃はモウ緯切れてるかも知れない。

千代子 ねえ奥様昨日江木さんは自分でもモウ死んだやうな事言つてたの

が矢張前兆でしたわね。モウすつかり駄目になつて了つた！ねえ奥様

手島 しかし君は何處で此事を聞いて来た？

黒木判事 (簡短に) 巡査から。先刻逢ふと其の話さ。

秀子 (少し聲を揚げて) とら／＼立派に男らしく！

手島 (恐れをなして) 何を言つてるんだね秀さん。戯事ぢやないよ！

秀子 だつて何だか立派ですわ。

黒木判事 え、奥様——

手島 立派！戯事ぢやないよ。

千代子 マア奥様の！こんな事が如何して貴女に立派に見えますの？

秀子 だつてチャント自分で覺悟して爲す可き事をしたんですもの。

其の勇氣は實に立派だと思ひますわ。

千代子 いえ覺悟して撃つたとは如何しても思はれません。精神が狂つて

爲たことに違ひないのです。

手島 絶望して撃つたんですよ。

秀子 いえ絶望ぢやありません。私は確かに覺悟だと信じてゐます。

千代子 彼の原稿を滅茶々に破つたんでも精神が狂つてた事は分るぢや

ありませんか。

黒木判事 (驚いて) 原稿ですて？滅茶々に破つたんですて彼の文明史の原稿を？

千代子 え昨夜破つて了ひましたの。

手島 (秀子に耳打して) モウ逆も遁がれられないよ。

黒木判事 ヘエ！そりや驚きましたね。

手島 (室内を横切つて) ア、そんな死に方をしたかと思ふと、江木君は實に氣の毒だ！ねえ黒木君彼の文明史が出版されたら、江木君は不朽の名譽を得る筈であつたのに、其名譽を後にして非業の死を遂げるなんて——

千代子 ねえ手島さん原稿がモ一度集められたら、如何にか成りませうか？

手島 集める事が出来たらそりや私はどんな事しても何です——

千代子 いえ出来るかも知れません。

手島 如何して？

千代子 (ポケットを探がして) 彼の人が筆記させた時用つた草稿を私秘と取

置きましたの、

秀子 (一歩千代子に近づいて) え！

手島 貴女が持つてるのですか

千代子 え、此處に持つて居ります。田舎から来る時持つて来ましたの。ポ

ケットに仕舞つたまし。

手島 一寸見せて下さい。

千代子 (草稿の包を手島に渡して) けれども消したり書入れたたり、亂暴に書いてありますから。

手島 成程こりや二人の智恵を集めて整理して見たら、ツマリ何か作り出す事が出来ますよ！

千代子 然うですか、ヂャ兎に角二人で遣つて見ませう。

手島 屹度出来ませう。出来ない事はありません。私は一生をこれに貢献

しますよ。

秀子 良人！一生ですて？

手島 然う、ツマリ萬障を排して。私の集めた材料の整理などは當分延期す

るのさ。ねえ秀さん、こりや江木君に對して遣らなくちや濟まない記念

物だよ。

秀子 然うかも知れません。

手島 千代子さん、これから直に従事りませう。出来た事は、いくら悔んでも

仕様が無いから、我々は死んだ江木君の爲に、此際精神を落付けて熱心に

仕事にかゝらうぢやありませんか。

千代子 さうでございますとも。私も出来るだけ懸命に御手傳ひをしますわ。

手島 チャ海老名さんいらつしやい。直に草稿を調べませう。何處で遣りませうか？此處にしますか？イヤ奥がいでせう。黒木君失敬するよ。サア千代子さんお出なさい！

千代子 マアほんとにこれが出来上つたら！

ト手島と千代子は奥の室へゆき、釣ランプの下の卓子に席を占めて、熱心に草稿の整理にかゝる。秀子はストーブの傍に行き、脇掛椅子にかける。稍あつて黒木は秀子の傍に行く。

秀子 低い調子でねえ黒木さん、とうとう思ふやうになつたわ！

黒木判事 え奥様！なんだつて？

秀子 いえね、ある仕事美しく完成つたといふのよ。ツマリね私が自分獨りて思つた通りの事が此の世界に實現されることの出来るといふ事を

知つたのは私に取つて何といふ幸福でせう！私夫れを思ふと何だか巧まな自然の美が、其の上に輝いてるやうに思つてよ。

黒木判事 (微笑して)ヘム——だが、ねえ奥様——

秀子 モウ仰有らなくても分つてますよ。貴君も矢張學問屋さんのが、仲間ですから——ねえ！

黒木判事 (屹と秀子を見て)兎に角黒木君なるものは、貴女が自身で表面許してたよりは、恐く、モット深い關係のあつた人でせう。夫れとも僕の目鏡が間違つてますか？

秀子 そんな御質問にはお答へはしません。私は只これだけ存じてゐます——黒木さんは自分の思つたやうに此の世の中を渡つて行つた男らしい人だつたといふ事を。そしてとうとう彼の——見事な最期でせう！何となく美しい感じが起るぢやありませんか——浮世の快樂を惜氣もなく、アノ若い盛りに思切つて了つた所にや、彼人の意思の力が充分に見

えてると思ひますわ。

黒木判事 イヤ奥様お氣の毒だが貴女が折角書いてるその幻影を私は打壊さなけりやならないて。

秀子 幻影？

黒木判事 どつちにしても今に貴女自身で壊して了ふよ。

秀子 如何して？

黒木判事 といふのは、江木は覺悟して遣つたんぢやないんだから。

秀子 覺悟したんぢやないんですて？

黒木判事 然うです。果して今お話した通りに死んだのか、實は夫れさへ好くは分らん位ゐです。

秀子 激したやうにまだ何か秘してたんですね！そりやどうしてとす？

黒木判事 實は先刻は江木君の爲に氣の毒だから態と言葉を濁らしといたんてすよ。

秀子 如何いふ譯て？

黒木判事 何はともあれ江木はモウ疾くに死んで了つてゐるんです。

秀子 病院て？

黒木判事 え。昏睡したまんま葬切れて了つた。

秀子 まだ何か秘密があるんですね？

黒木判事 イヤその事件も自分の下宿で起つたんぢやないんだ。

秀子 そりや何處だつて構ひませんわ。

黒木判事 その處が大いに關係があるんです。ね、江木の死躰の發見されたのは實は、アノ長谷川の女將の家ですよ。

秀子 驚の餘り飛上つて又椅子に沈みそんな事はないわ黒木さん！今日二度も其處へ行くなんて。

黒木判事 いえ午後に又行つたんですよ。盗まれたとかいふ物を取りに出掛けたんだ。何でも自分の大切な子供を失くしたとか言つて怒鳴りこん

ださうだ。

秀子 ヘエ!

黒木判事 その子供といふのは、ツマリ原稿の事だらうと私は思つたんだが、そりや自分で破つて了つたとかいふんだから手帳の事に違ひない。

秀子 え、それに違ひないわ。そして其處に——死んでゐたんです?

黒木判事 え、其の家で。胸のポケットに這入つてたピストルの引金が放れたまんまで。彈丸は急所に中つてました。

秀子 胸でしたね。

黒木判事 イヤ——臍の邊りを打つてゐた。

秀子 ヘエ! ねえ、黒木さん、如何してこんな厭な事になるんでせう。何でも私がちよいと觸つた事が。

黒木判事 ところで、奥様モ一つ厭な事が夫れに連關してゐるよ。

秀子 如何な事?

黒木判事 江木君が持つてゐた彼のピストルね——

秀子 (息を切つて) え、それが——

黒木判事 ありや盗んだものに違ひないで。

秀子 (立上つて) 盗んだんです? そりや嘘です。盗みやしませんよ。

黒木判事 けれども、他に盗まないといふ證據がないから。シツ!

手島 (手島と千代子の兩人は奥の卓子から立つて、此方へ入り来る。

手島 (兩手に澤山の紙を持つて) 秀さん、彼室のランプちや原稿が好く見えな

いがねえ。

秀子 然うですか。

手島 秀さんの卓子を少し借りてもいいだらうね。

秀子 え、どうぞ。(ト早口に否一寸待つて下さい。形附けて上げますから。

手島 ナニ構はんよ。廣いから。

秀子 マア形附けて上げますからさ。皆んな彼方へ持つて行てビヤノ臺の

上へ載せといて下さい。え、其處に！

ト秀子は卓子の上にある物を形附けて奥の室の左方に持行く。
手島は澤山の原稿を持ち来り卓子の上に置き又他の卓子からラ
ンブを持ち来り海老名千代子と二人で仕事を續ける。秀子は奥の室
から歸り来る。

秀子(千代子の後に立ちて静かに髪を搔き上げて千代ちゃん、江木さんの記
念碑はうまく行つて？)

千代子(秀子の顔をぼんやり見て出来上るまでは大變ですの。)

手島(是非仕途げなくちやならん。當分他の仕事は止めだ。人の書いた物
を整理したり何かするのは私に一番適當した仕事だ。)

秀子はストロウの傍へ行つて床几に掛ける。黒木は脇掛椅子に
凭つて秀子の傍に立つ。

秀子(小聲で)ちよいと。ピストルが如何したんですて？

黒木判事(静かに盗んだに違ひないといふんです。)

秀子(だつて盗む譯が無いぢやありませんか。)

黒木判事(盗まないとはいふ證據が無いからさ。)

秀子(然うですかね——)

黒木判事(秀子の顔をじろりと見て)江木君は今朝此家へ来たんだな。然うて
せう？)

秀子(え。)

黒木判事(貴女とたつた二人切り？)

秀子(え、ほんのちよいと。)

黒木判事(江木がゐた時貴女室内を立つたかね？)

秀子(いしえ。)

黒木判事(考へて御覽。ちよいと位の出たらう？)

秀子(ちよいと位の出たかも知れないわ——廣間の方へ。)

黒木判事 其時例のピストルは何處に在つたんです？

秀子 そりや彼の――

黒木判事 何處に？

秀子 彼處の卓子の上にあります。

黒木判事 そして其のピストルは二つとも其處に在つたか如何か、江木君が歸つてから好く御覽になつたかね？

秀子 いゝえ。

黒木判事 道理で！其のピストルだ、江木君が持つてゐたのは。私も昨日見たから、直にそれだと氣が附いた。

秀子 ピストルは貴君の手に在つて？

黒木判事 いえ、警官の手に。

秀子 警官がそれを如何するの？

黒木判事 今持主を探してゐる處です。

秀子 持主が分かるか知ら？

黒木判事 (秀子の顔の上に頷いて小聲で) 私が口を嚙んでる中ちや大丈夫だよ。奥様。

秀子 (恐ろし氣に黒木の顔を見て) 貴君が口を嚙まなかつたら如何なるんです？

黒木判事 (肩を聳かして) 盜まれたといふ理由は依然としてあるでせう。

秀子 (キツとなつて) 寧ろ死んだ方が好いわ。

黒木判事 ハ、ハ、死ぬ、といふ人に死んだ例がありませんや。

秀子 ねえ、黒木さん、ピストルは盜まれたのは無くて、そしてその持主が分つたら一體何んな事になるんです？

黒木判事 それこそ世間の問題になるでせう。

秀子 問題とは？

黒木判事 そのピストルの爲にそらいふ人死が出来たんだから、勿論貴女は法

延に召ばれるよ。彼の女將と一緒に。先づ女將が事件の全體について、取調を受ける事になるんです。ツマリ彼のピストルは偶然破裂して中つたものか、それとも江木が自分で撃つたのか。或は江木が女將を撃たうと思つて、ピストルを取出さうとした時に、不意に引金が外れて、自分に中つたのか、又は女將が其のピストルを振取つて、反對に江木を撃つて、そして何喰はぬ顔で元の通りポケットに入れ置いたのか、女將もなか／＼力のある女だから。兎に角いろ／＼取調を受けるに違いない。

秀子 けれどもそりや、何も私に關係した事ぢやないぢやありませんか。

黒木判事 貴女にや關係は無いが、彼のピストルは、貴女が江木に與つたのか、それとも盗まれたのかといふ尋問について、答をしなくらやならない。そこで貴女が愈々江木にピストルを與つたといふ事に成つた目になると、世間ぢや何と思ふでせう？

秀子 (頭垂れて) 然うね、私其處まで考やしなかつたわ。

黒木判事 しかし、奥様私が黙つてる間は、何にも心配する程の事にやらんよ。

秀子 (黒木の顔を見て) スルト私の身體は、今日からモウ貴君の權内にあるんですね。一生手も足も貴君に縛られてるやうなものね！

黒木判事 (小聲で) 私は自分の地位を濫用するやうな、そんな惡黨ぢやないから、御安神下さい。

秀子 孰にしても、私の身體は全然貴君の手の中にあるやうなものだから、何でも貴君の言ふ儘に成らなきやならないわね。スルト私はツマリ奴隷——奴隷ね、貴君の！(トスツクと立上つて) そんな卑屈な考を抱つて生きている事は、私にや、迎も出来ないわ。

黒木判事 (半ば嘲けるやうに) 秀子を見て) ナアニ案ずるより産むが安いよ。

秀子 (黒木を見返へして) そりやさうかも——(ト手島と千代子の處へ行つて) 巧く行つて？

手島 四五月はたつぶり費るよ。

秀子 ねえ、ちよいと！(ト千代子の頭髪を撫で、)何だか變だわね、貴女が手島と並んで仕事をしてるのを見ると、丁度江木さんとしてるやうね。

千代子 然うですか、マア江木さんを鼓吹したやうに出来りや結構ですけれど。

秀子 出来ませうとも。
手島 ねえ、秀さんにも見えるだらう、段々千代子さんに鼓舞されて行くやうな私の心持が。秀さんはマアいゝから黒木君の處へ行つて、相手をしとつてお呉れ。

秀子 私に出来る事があるなら、御手傳ひしませうよ。
手島 いや、秀さんに手傳つて貰ふやうな事は何にも無い。(ト頭を轉じて)黒木君今夜は秀子を大切に守つて呉れたまへ。頼むよ。

黒木判事(秀子をじろりと見て)そりや有難い。大慶至極。
秀子 有難う。しかし私今夜は大變疲れてますから、ソファへ行つて少し休

みます。

手島 さう。チャ少しお休み。

(ト秀子は奥へ行つて入口の窓帷を下ろす。やゝあつて俄かに激しき舞踏樂が起る。)

千代子 (椅子から立上つて)オヤ如何なすつたんでせう？

手島 (入口まで驅けて行き)秀さん後生だから、今夜舞踏は止してお呉れ。伯母さんがお死去になつた斗りぢやないか。江木君の事も考へて御覽。秀子(窓帷の間から頭を出して)伯母さんの事も江木さんの事も、貴君方の事も皆んな考へてますよ。モウ止めますよ。(ト引込む)

手島 (元の席に返つて)此んな面倒な事をしてるから、厭がつてるんですよ。

ねえ、今夜から貴女伯母の處へ行つて下さい。スルト私は每晚其處へ行きますから。兎に角伯母の處で遣る事にしませう。

千代子 それがようございませぬ。

秀子 (奥で) 良人私每晚こんな處へ一人で残つてるのは厭ですよ。

手島 (原稿を繰りつゝ) 黒木君が附いてるから大丈夫だよ。

黒木判事 (脇掛椅子にかけながら) 元氣らしく奥様私が每晚お相手に上るよ。

二人で愉快い話でもしやうじやありませんか。

秀子 (キツとはつきりした聲で) そして貴君一人て巧い事を爲やうつていふの？

ト此時奥にピストルの音がする。三人はびつくりする

手島 又ピストルを弄つたな。

ト手島はカーテンを一方へ寄せて奥に這入る千代子も手島につづく。秀子はソファの上に絆切れて横つてゐる。皆々慌て騒ぐ。

下婢右手から入り来る。

手島 (黒木の方を見て驚き叫び) 秀子が自殺をした！ピストルで頭を撃つてゐる！え、黒木君！

黒木判事 (脇掛椅子にかけたまゝ、半は失神の體にて) しかし世間の女はこんな事アしやしない！實に氣の毒だ！

(幕)

史劇源義朝三幕

第一齣

(一) 政家諫言

六條堀川義朝館の正殿正面襖上下共に杉戸此處に義朝の家臣甲

甲 スリヤ大殿様にも乙若君にもいよ／＼御助命の義は叶はぬとな。

乙 されば今日亥の刻までにお二方の首撃つて渡せとある勅命。萬一にも御違背あらばたちまち討手を向けらるべしとか。

甲 シテそれにつき御主君には如何御覺悟遊ばされしか。

乙 委細はいまだ存ぜねども容易ならざる御決心。

甲 そは如何なる仔細でござるぞ。

延景 方々御主君には是れより直に東三條へ御出仕あれば片時も早く馬物

齣と場

第一齣

(一) 政家諫言
(二) 乙若最期
(三) 奥書院の密談

第二齣

(一) 信頼沈酔
(二) 待賢門の亂戰
(三) 三條河原の伏兵

第三齣

(一) 忠致父子の陰謀
(二) 義朝主従の最期

登場人物

左馬頭 源義朝
右衛門督 藤原信賴
右衛門兵衛 政家
鎌田次郎 延景
秦野莊司 忠致
長田先司 景致
全生 金王
新藤左衛門 家泰
與三右衛門 景安
與右馬允 景政
義朝奥方 若葉
義朝一子 乙若丸
其他官人、宮女、白拍子、奏者、女中、家臣、郎黨等

具の準備せられよ。

甲 何と仰せらるゝ。スリヤ御主君には、兵具を帯して
乙 彌々是より御出仕とな。

延景 いかにも。理不盡なる勅説とて、我が君烈火の御怒り斯なる上は安否
を一舉に決せん御覺悟。何にいたせ動かぬ嚴命——御不興の折柄なれ
ば諫め奉らんにも力及ばず。まづ兎も角も仰のまゝに、御乗馬其の他の
御準備を

二人 さらば申しつくるでござろう。

ト 甲乙急ぎ下手に這入る。

延景 愈々以て御館の一大事と相成つたり。かく相成らんと存せしゆ最

前急使を走らせしに今以て鎌田政家——エ、何をしてゐらるゝやら——

何はともあれ譜代の諸士へ——

ト 思入あつて上手へ行かうとする、此時一間の裡にて、

義朝 ヤア誰れかあるく。

延景 ヤ、彼のお聲は——正しく御主君。

ト 立ちどまる、此のトタン、義朝憤怒の形相にて正面の襖を開け出
て来る、奥方若葉の前追うて出る。

若葉 ア、申し——マアくおまち下さりませ。

義朝 汝は延景いひつけし事いかになせしぞ。寸の間も心が急ぐ。準備よ
くば是れより直に。

若葉 喃延景とめてたも——マ、下に居て下さりませ。

義朝 くだい、其處退き召され。

若葉 サ、御憤りはお道理ながら、繪言は汗の如しとやら、おしかへしてのお
願ひさへ上への恐れと思ひしもの、私しの御怒りに前後の思慮なき御振
舞は、とりも直さず違勅の大罪。

義朝 黙り召され。さばかりのこと御身に聞うや。

若葉 サ、勅説とあるからは、一天の君が御親裁たとへ無理でも非道でも御違背あらば朝敵同然眼前證據は清盛はじめ武士に仰せて御討手をさし向けられんず勅使の口上。

義朝 其の討手は覺悟の上怨み重なる播磨守が寄せ來るこそ幸なれ、政家歸らば斯くと傳へ門々嚴しく固められよ。

若葉 スリヤどうあつても我夫には。

延景 いや、御出馬遊ばしまするか。

義朝 くだい。誰れかある物具々々。

ト二人の近習具足を運び出づる。義朝烏帽子水干を脱し、鎧を着用する。此時向ふより鎌田次郎政家しばらくとかけ出て、よき所に手をつかへ。

政家 鎌田次郎政家、只今歸參仕つてござりまする。

義朝 汝は政家——理不盡なる勅説、委細は既に聞きつらん。

政家 さん候ふ、只今下向の途中に於て、御使に邂逅なし、勅説の趣ほゞ領承取るものも取りあへず、急ぎ立歸つてござりまする。

義朝 ム、申し付くる仔細あり——近う。

政家 ハ。

ト政家こなたへ來り、義朝が鎧打装を見て

政家 スリヤ御主君にはいよく御使ひの言葉に違はず、

義朝 オ、サ既に決心せしぞ。汝等は館に残り、討手來らば防禦の準備、かんなへてぬかるまじいぞ。

政家 承つて驚き入る、さりとは御短慮千萬、篤と御心を静めさせられ、再應の御賢慮あつたる上にて、かゝる御大事の御評議は

義朝 ム、さては我れを諫めん所存な。諫言は聞耳持たぬぞ。

政家 マ、暫く、その御決心はさることには候へども、容易ならぬ一大事、政家が愚存の程、一通りあき下され。

ト政家よろしく坐を進め、
政家 兵は機を見るを第一とす、時機未だ至らざるに粗忽に事を擧げさせられなば是れまで御鬱憤を忍ばせられ、時の至るを俟たせられし其の御苦心も皆うたかた。般鑑遠からず此度の御戦を御覽候へ、利鈍成敗さながら鏡に見るが如し。源氏の御運も早これまでに候ぞ。

義朝 何と申す。

政家 任重うして道遠しとは、今御主君の御身の上右と左の御肩には、御一門の浮沈かゝる。譬へば深山の一人旅、左手も右手も虎狼虚をねらはるゝ危き場合に退いて安全を計るは思慮あるものゝ爲す所、只管血氣の勇に逸り事を好んで自ら進まば勇者いかに勇なりとも忽ち彼等の牙にかり、死して悔なき犬死同然、此處の道理を御賢慮あつて御出仕お止り下さりますやう。

義朝 ヤアくだくし、次郎政家さばかりのことを存ぜざらんや。只一門の

利害を思ひ御壽今夕に逼つたる廷尉の御上を忘れたるか。

政家 イヤ決して忘却は仕らず。申すに忍びす候へども大義には親を滅す、既に勅説下りし上は。

義朝 何と。

政家 恐れながら御親子の私しを以て大義に換へさせ給はんずらんは、御不道理かと存じまする。

義朝 ヤア奇怪なるその一言大義親を滅すとは、唐土の石錯とやらんが不忠の子を殺せし故事、子は親の手足も同然、不忠の子を殺すは命危き病ひの爲に我れと手足を殺ぐに等し、何者か批判すべき。親に對する故事ならんや。勅説如何に重しとも罪過如何に重しとも、子として親を殺す道理あるや語れ聞かう。返答によつて坐はたせぬぞ。

政家 ハ、恐れながら五刑の屬三千不幸に越ゆる罪なしとは、古聖人も説かれたれば佛も五逆罪の一ツに數へ、之れを大惡事とは申すなれども事に

は大小公私の別あり申上ぐるまでも無く、一天の君は公にして頭に頂く日月に同じ親兄弟は私にて其の光に育つ草木日月無ければ草木無く君無ければ國民無し其の君に仇なす怨敵君に代つて誅するに親ならば助け兄弟ならば遁がすといふ御政道の候ふや。

義朝ム、。

政家 孔子の教佛の示は賊子を誡め給ひし金言恐多くも大殿様は一天の君の怨敵におはし候ふ御親と申せども御親ならぬ謀叛の張本謀叛人を撃せらるゝ御主君は御子と申せど御子にあらぬ朝家の忠臣。例は同じ其のむかし周の武王は臣として紂を討じて民を安んず。天下の爲お家の御爲末長からぬ御高齢只今御命捨させられなば仇爲す餓虎に肉の一片。

義朝ム、。

政家 其の歡心を買ひ置かせやがてを捕ふる徐々の計略まッた御幼弟乙若君の御身の上も御いたはしうは候へども源家の御大事に換へがたけれ

ば。

若葉 スリヤ罪咎も無い乙若どのまで舅君と諸共に——
政家 アモシ篤と御賢慮遊ばされよ。

トビツと思入あッていふ。此の以前より義朝だんだんと心變はる思入あり此の時無言にてさしうつむきト、堪へ兼ねて兩手にて目を掩ひ愁のこなし。やがて顔をあげ

義朝 如何なれば斯くまでに天道我れを憎み給ふか。心無き小鳥さへ命窮ッて獵人の懐に飛入るときは之を殺すに忍びずとか——況してやこれは山海の生みの恩ある我が父をば——さりとして汝が申す如く源家の浮沈にかゝはる大事。

若葉 御餘命さへ幾何もはや七十路のお髪の霜老いさせたまひし御頭なさけなや剃こぼち六具に替ふる墨染の法の衣に年來の罪も消えさせ給はんに正入幡大菩薩も祈願を御受納あそばさぬか。斯くなることゝは夢

にだに乙若どのも知り給はじ今にも此の事云々と聞き知り給はじ如何ばかり。

義朝 右と左に親兄弟其の痛はしき有様を今日の前に見るやうて五臟六腑を裂かるゝ心地。

ト義朝も悲歎のこなし若葉の前こらへ兼ねて泣伏す皆々愁のこなし義朝思ひかへしたる躰にて、

義朝 ア、さりながら是非に及ばぬ。汝等兩人は我れに代り勿躰なけれど、たばかりまゐらせ、

政家 然らば我々、

二人 兩人に、
義朝 いかにも。父上の御介錯は
ト政家を見て

義朝 政家汝へ——まツた乙若が首うつ役は

ト氣味あひ延景へ思入れ

二人 ハ、ハ、
義朝 申しつけたぞよ
二人 ハ、ア。

ト二人は宜しく會釋して下手へ這入る跡を見送りて義朝じつと思入泣伏居たる若葉の前此時ようく顔をあげ

若葉 所詮遁がれぬ命なりや父上様の御事は是非なきことと諦めても諦められぬは乙若どのの身の上如何に朝敵の子なればとて年端も行かぬ幼兒に何罪咎のあらうぞや。夜の風さへ厭ふ世に咲きもいてざる蕾の花を親身の嵐に散らすとは如何なる過世の因果ぞいのら。

義朝 其の悲みは我れとても同じ事百度千度死かはり苛責の鞭に打たるゝとも我が罪業の消えばこそ只此の上は徒らに千部萬部の經讀むよりも、やがて武運の挽回し無念を晴すが此上なき回向。只何事も因縁約束是

非なきことと諦められよ。

ト此時上手より秦野次郎延景乙若(十二歳)を伴ひいづる義朝夫婦
愁をかくすことよろしくある

延景 ハ、申上げ奉る今日ツた幸ひの上天氣嚙に承り候へば北山あたりに
祭禮の候うて老若男女群集なし興ある催しども候ふ由乙若君の御伴な
し、これよりまかり向ひ候ふ心得乙若君にも御懇望何卒御許容下された
し。

ト義朝夫婦へ思入あつていふ

義朝 オ、それは嘸見物ならん。苦しうないく——心徐かにイヤサゆッ
くり見物して参るがよいぞ。

ト愁をかくしていふ若葉の前堪へかねて顔をそむける

乙若 さやうならば兄上さま——姉上さまわたくしはもう参ります。ど
うぞいつまでもおかはりなうお暮しなされて下さりませ

義朝、若葉 エ、。

延景 これはしたり乙若さま、こりや何をおッしやりまする北山はツイ鼻の
先、そのお挨拶には及びませぬ。

乙若 イ、ヤ武士といふものは、何時死ぬも知れぬゆゑ外へ出る其の時は、い
つても暇乞ひする氣てゐよ。それが武士の心得ぢやと、父様が不斷から
のいひつけ。

若葉 オ、。

義朝 オ、さすがは弟よう申した。げに人生は朝露夕電——さらば歸りを
待つてをるぞよ。

乙若 あさらばでムりまする。

義朝 こりや延景途中の介抱頼みしぞよ。

延景 ハ、ア。さやうならば乙若さま、時過ぎぬ間に祭りの場へ。
乙若 そんなら往つてまゐりまする。

若葉 オ、

ト義朝夫婦愁をかくす延景乙若を伴ひたちあがる若葉の前こらへ兼ねて

若葉 そんならこれが今生の――

トいはんとするを義朝おさへて

義朝 ア、コレ――日暮れぬうちに歸つて來やれよ。

乙若 ハ――イ

ト延景は乙若を促し立ちいづる乙若ふりかへりく向ふへはいる若葉の前立ちあがり乙若のはいるを見てト其處に泣倒れる義朝よろしくこなし此時義朝の近習澁谷金丸十八歳下手の扉を開けて出來り

金丸 ハッ申上ます只今右衛門督信賴卿何か火急の御密談候ふとて御馬にて御入來にムりまする。

義朝 ナニ右衛門督殿が――心得がたき火急の入來何事ならん。

金丸 恐れながらほのかに承る所によれば信賴の卿には彼の入道信西に對し何か御不快の事おはして此頃うちより在所に籠居――俄の訪問は不審千萬。

義朝 彼れ右衛門督信賴は藝能の取るべき無けれど――まッた朝恩の厚きに誇つて上意を惑はす佞人なりと世にさみなすものも多けれど我が見る所未だしからず右も左も仇なる中に我が片腕とも頼むべきは日ごろ親しき輩のうち彼の人に勝るはなし殊には入道と隙ある彼の人――若しや火急の密談とは――

若葉、金丸 エ

義朝 イヤサ密談とあるからは何は兎もあれ對面なさん西の殿へ案内いたせ。

金丸 ハ、ア。

(二) 乙若最期

正面北山に續きたる岡中央一段高き處に芝生の平地、上手杉に立樹、下手だら／＼下り、同じく立樹、此處に下手より平家の侍與右馬允に具足附太刀郎黨甲乙を隨へ立出て

右馬允 如何に者共承れ、今日ツた清盛公の内意を受け、判官父子が最期の實否を見届けんと、先へ回つて來りしが、此の北山にて首刎ぬるとは、偽り父子諸共東國へ落しやらんも計り難し。

甲さん候、彼れ政家事は源家の策士と承れば、

乙中々御油断は出來ませぬ。

右馬允 萬一隙を窺うて遁失せん時は、我れ一人の落度のみかゆしき朝家の大事なれば、必ず共にぬかるまいぞ。

甲乙 心得ました。

右馬允 樹蔭へ忍んで事の様子を窺ひ見ん、

ト此のトタン上手樹蔭の中より長田莊司忠致五十以上烏帽子直衣老けたる装束にて出來り

忠致 アイヤ右馬允殿暫く。

右馬允 誰れかと思へば長田莊司忠致どの。御内意の一儀につき、斯く郎黨の引率しが、合點行かぬは、鎌田が心中。

忠致 サ、其のお氣遣ひは御尤、御舅の間なる拙者すら彼れが心底疑はしく存ぜしゆゑ、最前彼れに面會なして、それとなく眞意を探りし處、毛頭違勅の所存無き旨、我への誓言。

右馬允 スリヤ政家には絶えて異心はござらぬとな。

忠致 いかにも其の儀はお氣遣ひ召さるゝな。尙念のため拙者後にのこり竊かに様子を探り申さん仔細後にて言上すれば、心置なく御歸參あつて然るべし。

右馬允 然らば是より歸參致し、其の旨直に清盛公へ言上致すてござりませ

う。
ト思入あつて右馬允は甲乙を従へ下手に這入る、忠致は跡を見送り思入あつて

忠致 數ある源家の諸士の中に、頭殿の股肱の臣と頼ませらるゝは、我輩の次郎政家。彼れ思慮深く智謀備り、利害を見るに敏ければ、判官父子の生死を以て源家の浮沈に見替ふる如き、淺慮の計らひ無しとは思へど、測り難きは人の心萬一にも異心あらば、一は源家の安危の爲に、一は我が身の利害の爲に、竊かに清盛に心を通ぜし、我が魂膽も水の泡然ある時には、我れとても官加階の望は思か繋がる縁に卷ぞへ、如何なる憂目にあはんも知れず。只今右馬允に、あのやうに申せしもの、我れとても半信半疑しかと證據を見るまでは、たとへ親身の間なりとも滅多に肌は許されぬわ。

ト思入あつて下手に這入る。向ふより前の場の延景、乙若丸の手を引き出て來る、乙若は稍と歩みに疲れたる軀にて立止り延景を見返り

乙若 延景北山はまだかいのう。

延景 オ、さぞお草臥でござりませう、もう其處でムります。彼の岡を越えますると、み祠もツイ目の前、今少しの間の御辛抱——サ、今少しぢや、お拾ひなされ、お拾ひなされ。

ト乙若を慰め、賺し手を引いて行くとすれど、乙若尙もぢくして居る

延景 ハテどうなされたものでござりまする、左様ならばかやういたしませう。延景があんぶいたして参りませう。サ、あんぶあんぶ。

乙若 イ、ヤそれには及ばぬ。

延景 それなれば、今少しぢや、チャッと歩きなされませ。

ト乙若は再び歩き出して芝生に來り、又立ちどまる。

延景 これはいたり乙若様何と遊ばしました。もうツイ其處でござりまするに。

乙若 コレ延景武士といふものは最期の一念が大事ぢやによつて、どんなに憎い敵でも欺し討にはせぬものぢやと、聞いて居るが其方は如何思うて居るぞ。

延景 エ、何とおツしやる。

乙若 ヤイ祭があるとは詐り、此處まで連れて來たのは此の乙を殺すのであらうがな。

延景 エ、スリヤアノ既に其の儀をば――

乙若 知らいてならうか。朝敵の子ぢやによつて、父様も此の乙も首撃たねばならぬと言うて、兄さまや姉上さまが泣いてお話しなされてあつたを、わしや聞いて居たわいのう。

延景 スリヤ何事も御存知なりしかスリヤ最前のお暇乞も、其のお心にてなされましたか。

乙若 オイナウ。

延景 ハ、恐入つてムりまする。何御存じも無きことと、祭にことよせ誘ひ申し、今まで包みかくしせしこと此の延景奴が重々のあやまり、お赦しなされて下さりませ、今は何をか包み申さん御兄上頭殿の御歎願も叶はゞこそ、お痛はしくは候へども、撃まゐらせすば朝家へ不忠取りも直さず源家の大事と是非なく、御決心御父上の御介錯は、次郎政家またあなた様は、此の延景と仰を受けし其の時臆腑を熱鐵に貫く思ひ、こなたへ參る途々も所詮通れぬ御命委細打明け申上げんと、幾度も存じながら御驚きを思ひやり蹴躑せしは拙者の不覺。思ふにまざる天晴御覺悟恐れ入つてござりまする。

乙若 コレ延景歎くには及ばぬわいのう。臆甲斐ない此の身なれど家の爲

兄上のお爲になるなら命が惜しいとは思はぬわいのう。

延景 ホ、梅檀は二葉より香ばしとか。流石は大殿様のお子ほどある、エ、健氣なる其のお言葉、恐れながら御遺言も候は、何なりと遠慮なう、おつしやつて下さりませ。

乙若 外に何も望みは無い。只父様に只一目、いまはの際に逢ひたいわいのう。

延景 オ、お道理でござりまする、さりながら大殿様のごさる所は六條朱雀野、お連れ申すに路は遠し、今日亥の刻までに御首を實檢に入れ奉らねば、忽ち上の御咎め、最早時刻も相迫まれば、残り多くは思し召さめど、是非無きこと、おぼしめされよ。

乙若 スリヤ逢ふことは叶はぬとや。此の上は覺悟した、早う首撃つてたもいのう。

ト乙若は後に向き直り、首さしのべて合掌する

延景 オ、天晴なる其のお覺悟、此の上は何をか躊躇いたすべき。御不憫ながら御介錯を。

ト延景は太刀をぬき、右に廻り、左に廻り、幾度か太刀を振上げ斬らうとして斬りかぬる

延景 見れば見る程いぢらしい此のお姿、何處に刃が當てられう。十年あまりの長の月日、一日片時もお傍を離れず、我が子のやうに育てまゐらせ、御成人遊ばすを、只明暮の願ひにして、かしづき奉りし延景が、今十惡の刃を握り、死期を急がせ参らすとは、如何なる宿世の逆縁なるか。責めて太刀取る間なりとも、惡魔の魂ひ我れに魅入つて有情の心を奪ひくれなば、斯の苦患を知らずして撃つ可き心も出てやうもの。

ト延景は持つたる太刀をカラリと投げ捨て、乙若の傍に泣臥す、乙若は此の有様を見て

乙若 ヤイ延景末練ぢやぞや。この乙は幼うても清和の嫡流、六條判官爲義

の子ぢや死ぬるに人手はまたぬわいやい。

ト乙若は腰の差添を抜くより早く左手の脇腹に突き立てる延景は此の軀を見てびっくりこなし投げ捨てたる太刀をおつ取つて立上り

延景 オ、あッばれ——長う御苦痛させまいため——

ト太刀振上げてすぐ乙若の首を撃落す此のトタン上手樹影の中より鎌田政家爲義の首桶を抱きパタ／＼にて出来り延景と顔見合せ互ひに思入

延景 ヤ、政家どのか——貴殿もすでに大殿様を——

政家 御身も

延景 我れも

政家 延景へ、ッ。

ト二人は其の場にどうとなり政家は首桶を延景は乙若の首を抱

き互に悲歎にくる、此のうち長田忠致下手樹蔭の中より出て来る。

政家 勇殿か。

延景 忠致殿か。

忠致 オ、最早御首を擧げられしか責めて他所ながら暇乞の仕つらんと、お後を慕うてまゐつたるに——早御最期の間に逢はざりしか。今一足早かりせば大殿様は叶はずとも、乙若様のお命だけは此の忠致が如何なりと外に仕様もあつたるもの、老木と共に若木迄むざ／＼とうち取りし、此の御有様は何事ぞ。痛はしのお姿や。

ト忠致も悲歎に暮るゝこなしよろしくあつて、

忠致 さりながら恩愛の親を撃ち相傳の主を撃つも畢竟は上の爲に忠義を勵む臣子の本分と存ずれば敢て深く歎くにも及ばず。只此の上は片時も早く實檢に入れ奉り忠誠無二なる御主君の御真心を表はして、上の叡

慮を安んずべし。然あるときには、源平二家の隔心も解けて和らぐ天が下。

ト二人よろしく氣味合ひ。

政治家 實に舅殿の仰の如く、大義の前には主も無く、また親も無し、如何なる貴人高位なりとも通れ難きは不忠の大罪、只私しの情に牽かれて、不覺の歎きに沈まんは、却つて臣子の道に非ず。

延景 とはいへ、勅詔主命ながら刃を取りし上からは、八逆罪のその一ツ、未來は愚か此の世にて、何時應報の廻り來て、斯かる愛目を見るやらむ。思へば主従親子とて頼みにならぬ今の世は、八ツの柱は傾きて、五ツの道は廢れたり。

忠致 饑多たる鷹は爪を磨ぎ、猛き虎は牙を怒らし。

政治家 迭みに争ふ親身の肉。

延景 淺間しき。

三人 世の中ぢや。

(三) 奥書院の密談

義朝館奥殿、正面襖右の方別室へつゞき、奥の方前裁、凡て奥庭の心、信賴義朝相對して好き處に住ひ密談半ばの躰なり。

信賴 されば、その戦功に申し替へての助命の願ひ、孝子の至情さもさふず、聞届け遣はすべしと、一旦御沙汰は下つたりしが、

義朝 ナニ一たびは父判官を助命の御沙汰、下りしとか。

信賴 サ、一旦は下つたりしが、明月照らさんと欲するときは、浮雲之れを掩ふの習ひ、にづくさは、入道信西、代々儒胤を看板に、小智を銜ふ、便佞利口、御乳母たる紀井二位は、知らるゝ通り、彼れが老妻、其の縁により、上意を惑はし、見るに堪へざる出頭顔。此の度の一條にも、彼れ先づ御前にしやく、り出て、理を非に曲ぐる毒舌の、其の相槌は平清盛。

義朝 フムすりや此度の勅定は彼等二人がなす業なりしか。

信頼 如何にも。憎む可きは入道信西清盛が平馬助が首撃つたるを口實として、御父判官どのを助命あらんず勅詔を、遮り申して奏するやう、叔父甥は親子も同然私の情を申さば、誰れかは近親に情なからむ、されども清盛忠義を存じ勅を待たて首刎ねしは、天晴の大忠節然るに未だ清盛に御感賞の御沙汰もなく功に驕りて増長なし、君臣の分を忘れ、ほしいまゝなる助命を乞ふ慮外無禮の左馬頭に、格外の御憐憫朝敵の張本爲義が御助命あらせられんは、恐れながら御賞罰の矩なきが如し、政道平かならざるはじめと叡慮を聞ます邪智辯口。

義朝 日比よりあの清盛目の上の瘤と我れをそねみ、彼の入道に入魂なすと、兼て噂にさゝたりしが、かばかりとは存ぜざりし、扱は叔父を撃つたりしも忠義とは面にて、此の義朝をおとしいれん策なりしか。

信頼 いかにも。萬一御助命あらんとせば、彼の儀を以て遮り申し、源氏の幹を倒さんたくみ。

義朝 ム、ト義朝無念のこなし、信頼あたりへ思入あつて膝を進め、

信頼 これしかしながらあはよくば、此の難題を課しつけて御邊を朝敵におとさん底意源氏の根葉を刈盡して世を悉く平家の世となし、天下を二人が握らむ大望。この事焦眉の急なるゆゑ、取るものも取あへず、かくはかけつけまゐりしなり。

義朝 驚き入つたる彼等が奸策かゝる毒ある土蜘蛛の玉躰間近く圍を張るとは、思はざりし。やみくも蠅蟲等に罹りし事の愚かさよ。

信頼 いやいや未だ悔むに及ばず、此の上は日ごろのよし、不肖なれど此の信頼、一臂の御助力つかまつらん。先んずれば人を制す、寧ろ直に事を擧げて――

義朝 何にもせよ躊躇すべき處にあらず。誰れかある。――

ト義朝あわたしく人を呼ぶと澁谷金丸急ぎ次の間より出て来る。

金丸 ハッ、お召にござりまするか。

義朝 波多野、鎌田の後おっかけとく最前の命をとめよ、時刻既に移つたれど、よも未だ御首は、かくいふうちも心元なし、とく早馬にて北山へ。

信頼 ヤヤ、すりや巳に判官殿をば。

義朝 かくいふ間も心元なし——とくまぬれ。

金丸 ハ、ア。

ト金丸キツと身づくろひして起たんとする、一間の中にて

政家 アイヤ、其のお使者

延景 はや御無用で

二人 ござりまする。

義朝 ヤ、何と。

ト三人よろしく思ひ入れ、前の場の政家、延景、判官父子の首桶を各々小脇に抱き、下手の襖を開け、悄然として出来り、好き處に平伏する、義朝これを見てギツクリこなし

義朝 ヤ、巳に御しるしを——ム、。

信頼 エ、早まつた事をいたされしよなア——何はともあれとく——これへ。

二人 ハ、ア。

ト二人は首桶を差出し平伏する、義朝思入よろしくあつて

義朝 よくも武運の盡き。正八幡大菩薩も源家を見放し給ひたるか。

信頼 御心中察し入りて候ふぞや。今一足早くんば、此の悔恨をさせまじもの。

ト信頼遺憾の思入よろしくある

延景 只今お次に委細の次第承つて、残念至極、今更と相成つては、何事も後

この祭り、いづれ通がれぬ大逆罪、大殿様乙若様へは、あの世で詫言ひ、お主君への申譯——さうぢや。

ト延景指添に手をかける、この時まで無言にてうつむきゐたる政家は、これをとめて

政家 ヤレ待て次郎延景、一時の悔恨に心亂れ、今日前にさしかゝるお家の大事を忘れたるか。

延景 忘れたるには非ざれども、君かりそめの御恥辱を受けさせられても、死するが臣下の習ひなるに、たとへ君命とは申せども、御主君の首撃つて、剩へかへりて御歎きの種となる今更生きて居らるべきや。分けて御不便なは乙若様、死出三途の御介抱誰れ仕る人もあらばこそ、闇より闇に只一人さまよひたまふにつけても、先づ延景をこそ尋ねたまはめ、夫を思へば、身の内の骨も砕くる心地にて、生きても死んでも居られぬわい。離せ、政家。

政家 いはるゝ所一理あれど、死して詫言ひが出来らば強ひて御諫言申上げ御首あげし政家こそ、幾個あつても足らぬ命、さるをおめ／＼存へて、斯く御主君に對しまつるは、大殿様への情義を忘れ、一命を惜むにあらず、死生兩つながら献ぐる我我、死するも生くるもお家の爲を思へばこそ。事の大小公私によつて、死或は生よりも重く、生或は死よりも重し、其の輕重を鑑みなば、犬死すべき時にあらず、何處までも生存へ、お家の爲に斃れてやむまでは、奉公のいたすこそ、今我我の覺悟ならずや。

延景 さりとて此のまゝ。
政家 ハテ何事も君の命に。

信賴 政家のいはるゝところげに尤も。主従の情義をいはば、延景の心中さもこそと察すれども、そも此度の一條は悪人輩の計略とは、神ならぬ身の誰れかは知らん。過の元は、勅諭主命、然るを強ち自身に負ふは道理頗る誤れり。況してや夫にもかへがたき主家の大事、今眼の前に迫れるをや。

義朝 卿のおほせ理を盡せり必ず共に逸まるまいぞ。

延景 ハ、ツ

ト延景ひかへる義朝あらためて

義朝 兩人とも近うまわれ。

二人 ハ、。

義朝 さるにても父上并びに乙若が北山にての最期の模様は如何なりしぞ。委細包まず物語れよ。先づ父上の御模様は。

政家 ハ、痛はしとも御不便とも申上るも涙の種仰の如く東國下向の由申上げ御輿にて北山へ御供はいたせしかど聞々と撃ち奉らんも臣下の情忍び難く且つは臨終の御正念まッた御遺言も候はんと是までの一伍一仕有の儘告げ奉しに御無念の御涙に俄に曇る御顔色。縦令論言重くして助命の願ひ叶はずともなど今までも包みしぞや。爲義ほどの者を騙からずとも撃たせよかしと歎きに暮れさせ給ひしが稍々あつての給ふ

やう斯くなるも宿世の業因誰を怨み誰を咎めん雜人どもの來らぬうちとく／＼斬れと御覺悟西に向ひて手を合せ願諸同法者臨終正念佛見彌陀來迎往生安樂國と唱へ給ひし御念佛の了らせらるゝと諸共に御首をあげましてござりまする。

ト義朝よろしく愁のこなし

義朝 シテ乙若が最期の次第は——未練の振舞どもは無かりしか。

延景 中々以て左様の儀には——誠に健氣なる最期の御模様流石は大殿様の御若君とこの延景も驚入つてござりまする。

義朝 ナニ彼の乙が健氣な最期をいたせしとや。

延景 蛇は一寸にして昇天の氣ありとはげに今日若君の御振舞とこそ存じ候へ。彼の北山に達するまでも首尾よくたばかりまゐらせたりと淺果敢にも推量なし種々御心を慰めしは皆仇事にて候ひし。若君延景に向はせ給ひ武士が一期の終りには只徒らにだまし撃などせぬものぞと人

の身の上のことよせ給ひて、胸に釘打つ御尋ね。

義朝 スリヤ最前の言葉のはしばし合點ゆかずと思ひしが、其の折推量せし如く、何事も聞き知りなかりしか。

延景 仰の如く、御二方のお話をば何時の間にか漏れ聞き給ひ、疾より御覺悟遊ばせしと自らの御物語。此の君一入撃ち奉ればとて、朝家の休戚平族の利害にも關はるまじきに、如何なれば無情の輩かくまで、に慘毒を恣にいたすかと、天を怨み地に哭して、持つたる太刀の落つるも覺えず、歎きに暮れて候ひしに、いまはの際に至るまで、神色自若と御若君、此の躰を御覽じ給ひ、延景未練と御叱責。幼くとも我れは武士、死ぬるに人手をかるべきと、まだお言葉の了らぬうち、御腰なる指添は、早左手の御脇腹見るより、腸ちぎるゝばかり、所詮撃たては叶はぬこと、是非なくもその場においで。

義朝 ホ、切腹とは健氣なことをいたしなア。

信頼 幼なしとは申せども、流石は貴殿の御弟、大人も及ばぬ天晴振舞、そゝろに落涙仕る、

ト一同、爲義、乙若の首に眼を注ぎ、默然として愁のこなし、稍あつて

義朝 御首是れへ。

二人 ハ、

ト政家、延景は命によりて、各々首桶を義朝の前近く持行き、蓋を取りて、傍に置き、元の座に立歸つて畏る、義朝は先づ爲義の首に眼をつけ、一寸信頼と顔見合せて互ひに氣味合ひ、義朝は稍々下手に座を退り、両手をついて禮拜し、悲憤の涙を拂ひながら、ジツと爲義の首を見詰めて、

義朝 御耳は既に聞えず、御目は既に見え給はず、魂魄この土にましまさねば、申すもかへらぬことながら、抑こたびの一條は彼の入道信西と、播摩守清

盛とが互ひに梟惡の心を合せ源家の根葉を枯らさんと陰かに巧みし計略なりとは不肖義朝夢聊かも存せねばこそやみやみ彼れ等の罫に罹り只勅説と思ひあやまり勿體なくも御首に非道の刃を加へまつりし世にも不孝の大逆罪たとへ神明の怒りに觸れ千々に此の身を割かるゝとも佛陀の罰を蒙つて阿鼻焦熱の責苦に逢ふともいかで償ひ申さんや。信賴卿の御話を承つて驚き入り急使を馳せて御介錯を止めんとせしも間に合はず此の淺間しきお姿にまみえんとは——此の期に及んで千恨萬悔身の不覺を責むれども過にしことの返らばこそ御首に對し奉り只管無念に存ずるのみ。

ト爲義の首に對して悔恨の體よろしくあつて乙若の首に對ひ、義朝 オ、罪咎もなき汝までも此の姿になしたるかや。今父上の尊靈に告げ奉りし如く何事も此の兄が不覺より起りしこと。ゆるしてくれコレ乙若。年いまだ幼なけれども世に頼もしき器量發明行末源家の根繼に

もと年ごろ日ごろ慈しみ育てたる甲斐もなく花も咲かねば實も結らぬ、二葉の中に心なき雪霜に枯らせしことなんぼううたてく覺ゆるぞや。

ト義朝よろしく悲歎のこなし信賴は之れを慰めて、

信賴 御心中信賴もさこそと察し申すかゝる殘虐に至らしめしも畢竟は信西清盛等が爲せる業にて決して貴殿の罪にあらず只憎む可きは彼等の暴慢所詮は國家を亂るの逆賊蝮蛇一たび手を螫せば毒は忽ち五體に入つて遂に一命を奪ふに至らん。

義朝 されば其の毒の未だ深からざるに先ちて之れを除くは朝家の御爲加之源家に取りても獅子心中の虫にして不俱戴天の怨敵たり今源氏平家を討たずんば平家必ず源氏を討たん。先んずれば人を制す明日とも言はず疾風迅雷彼等の不意に撃つて出でなば文弱の信西卑怯の清盛撃ち亡すに何の手間ひま。

信賴 ホ、ウ頼しき貴殿の心底信賴もかねてより聊か存ずる旨あつて萬一

に備へん爲め頼みある諸卿諸士を竊かに語らひ置たれば、いざと言はん
曉には聊か一臂の頼りとならんか。

義朝 貴卿も斯くと覺悟したまふ上は、義朝何をか躊躇いたさん、我れ一呼す
れば關八州の草木は皆兵、義を金鐵に固めたる部下の將士は、綺羅星、貴卿
と某と力を合さば、天下の事は見易きのみ。いてや是より手筈を定めて、
短兵急に攻寄せん。

ト政家、延景に向ひ、

汝等兩人は在京の諸士に急使を馳せ、此旨竊かに通達なし、今夜館に呼集
へ出陣の準備ぬかるまいぞ。

政家 今更と相成つて、其の御決心を止め申すには非ざれど、是れ併しなが
ら容易ならざる御企、其の成ると成らざるとは、時運天命には候へども、あ
家の浮沈も一舉に決する一大事、されば豫め成否を鑑み、萬全の策を講じ
給ひ、然る上にて確乎たる御決心、これ無きときは、毛を吹き疵を求むるた

とへ、巧みなる獵夫が猛き獸を捕ふるには、先づ之に餌を與へて、徐ろに馴
れ近づけ、不意に乗じて繩打つとかや。若し必勝を期し給はゞ、一先づ彼
等のいふがまゝに御首を實驗に入れ奉り、何處までも他意なき體に、御心
を装ひ給はゞ、源家に對する彼等の隔心猜疑の念も自づと晴れて、肌をゆ
るすに至らんは、また自然の勢ひなり。其の間に御菩提の御孝養をもす
まさせ給ひ、信賴卿とも御談合、兵陣の配置、攻守の謀略、定め給ひし其の上
にて、靜かに機會を待たせられなば、兼て噂に聞き及ぶ清盛が熊野參詣も、
早近々に候へば、後に残るは入道一人、二兎を一時に追はんより、先づ彼れ
に矢を下さば、功を收むるの容易なる物を袋に探ぐるも同然。此の得難
き機會を捨て、未だ兎角の御思慮も無きうち、無謀の師を起し給はゞ、井
を掘る九仞の深きに及んで、功を一簣に欠くの譬へ事の緩急利害の點を
ば、篤と御賢慮、願はしう存じまする。

ト此間義朝は始終無言にて、政家の献策をさき居たりしが、聞了て

義朝 げに汝が言ふ如く、今俄かに師を起さんば、或は無謀の謗を免れがたし。勝つべき軍事も事機を得ざれば、敗れを取る。いかに信頼卿、其の熊野參詣こそ、天の我等に與ふる機會なれば、其の虚に乗じて、清盛が羽翼と頼む信西より、撃亡すはこよなき良策に候はずや。

信頼 流石は源家に智勇の士と、名を知られたる政家が、思慮深き計謀、さらば熊野下向を期して、撃つて出ん其の手筈は、

義朝 政家、汝に成算ありや。

政家 さん候、某存ずる所によれば、清盛の一行、熊野に着きしと思ふ頃、夜半ばかりに準備の手勢を、三手に分ち、一手は三條烏丸なる院の御所に、一手は西洞院なる信西館に、いづれも同じ時刻を計り、短兵急に押寄せ、一時に火を懸け、残る一手も時を移さず、東三條に指向けて、固く禁裡を警衛なし、其の間、心利きたる公卿に命じ、主上并びに上皇をば、黒戸一本の兩御所に移し奉り、無二無三に戦ひなば、彼れ入道は申すに及ばず、うからやから

一味の輩、盡く撃亡して未だ夜の明けざるうちに、勝負は決し候はん。

義朝 オ、面白し、此の勢に乗じて、直に關官除目を行ひ、貴卿は望みの大臣大將。

信頼 御邊は清盛が所領を没して、其の儘直に播摩守。

延景 たとへ清盛變を聞いて、直ちに都に引返すも、最早喪家の犬も同然生かすも殺すも御手の内。

政家 其の中、ひく宗徒の兵まつた信西清盛等に、怨を抱く諸國の武士、都を指して馳上り、御味方仕らば、たか々平家の殘黨ばら何千人候ふとも、皆盡く馬前の塵灰。

延景 日ならず洛中平定なし、昇る朝ともる共に再び輝く源氏の御旗。

政家 誇る平家も朝霧とやがてぞ消えん榮花の夢。

義朝 ト此時義朝は爲義の首に對し、愁の思入れあつて、御志成らずして、九泉に齋らし給ふ、父上の御無念は、不肖なれども此の

義朝誓つて晴らし奉り、やがて菩提の御前には、香華に代ふる彼等の生首。神靈一たび笑み給はく、某が鬱憤もここに晴れて不孝の罪の萬分一聊か償ふはしともならん。

延景 まつた若君の御仇は、延景が一念力鬼となり蛇となつても、やはか遁がし候ふべき。今に大事の成らん日を草葉の蔭にて御待ち候へ。

信頼 斯くの如く主従將士、忠孝の一念に心を固めて、一家の難に當りなば、天何ぞ助けざらんや、必勝固より期す可きなり。

政家 見よや今に信西、清盛、

延景 源家に仇なす奸邪の徒、

政家 只一戦に、撃ち亡ぼし、

義朝 修羅の妄執、

ト一同顔を見合はせキツとなり、

四人 晴らしてくれん。

第二 齣

(二) 信頼沈酔

内裏なる朝餉の間、左右附屋臺三方襖、向ふ廊下、酒宴半の躰にて、白拍子二人、水干袴打扮にて、今様を舞うて居る。中央好き所に、右衛門督信頼、赤き小袖に大口冠に、巾子紙を入れ、沈酔の躰にて、脇側に凭りかゝり、舞を見て居る。左右には近侍の宮人、甲乙丙丁烏帽子直衣にて、いづれもほろ酔の躰、稍々下手後の方には、宮女三四人居並ぶ、舞納つて一同手を拍ち褒める。

甲 いかにかに方々、修羅の巷の矢咩びも、洋々たる管絃の調とかはる、今宵の御酒宴、昨日までは大鵬の空に羽を伸す信西が、不義の榮花も一時の夢、彼れ早くも天文を察して、我が身に異變のあるを悟り、密かに館を脱け出て、穴を掘つて身を埋め、遁るゝ限りを盡せしかど、遂に敢なく首を撃る。

乙しかのみならず彼れが老妻紀井二位を始めとして一門剩す所なく、或は捕はれ、或は撃たれて、一夜の中に亡びしも畢竟彼れが暴慢を、神人共に憎みしゆゑ、

丙其の積罰深怨の、一時に報い來りしものか、哀れとも見苦しとも、言はうやうなき最期の有様、

丁これ畢竟は天道に親みなし邪を憎みて正を助くる冥の照覽あればこそ、天命自ら卿に歸して、其の威徳の及ぶ所百草盡く風に靡く。

信頼 げに人の盛衰禍福は、豫め計り難し。百方我を失はんと肝膽を碎きし入道、今我が爲に亡されて、春日の山の露よりも、脆き最期を遂げたりしは、たとへば人を陥さんと掘つたる陥井に我れと陥り命を失ふに等しからずや。我れ既に彼れを撃つて、多年の宿望爰に達し、今日より兼ねる大臣大將、かてゝ加へて、主上も上皇も、我が股肱たる經宗、惟方の二人に命じ、一本黒戸の兩御所に、首尾よく移し奉りたれば、名は九重の宮居なれど、我居

間も同じこと。誰れ憚ることあらむや、方々には、心置なく過されよ。

甲斯ることゝは、寢耳に水の清盛一行變を聞いて上浴いたすも、家子僅か五十餘人。

乙況して弓矢物具の備とてもあらざれば、直に都に攻入らんは、中々以て覺束なし。

丙又斯くの如く内裏をば本陣と乗取つて、右と左に主上々皇

丁控へ奉る其の上は、卿に對ひ弓引く輩は、取りも直さず朝家の叛賊。

信頼 邪は竟に正に勝たず、寡は以て衆に敵せず、百の清盛來るとも我が掌中に成算あり、鳶飛んで天に至り、魚躍つて淵に在り、今や天下の大小事心のゆくに任せんのみ。

ト信頼は沈酔の餘り、呂律も亂れて、今はほと／＼坐に堪へず、其の儘脇側に俯向き、前後不覺の體となる。

甲イヤナニ方々、卿には最早御沈酔の御模様なれば、

乙 我々どもは之れにて退出り、
丙 後刻御意得、
一同申さん。

ト一同起ち上り下手へ這入る、此中白拍子二人杯盤を持ちて續いて下手へ這入る、信頼は四人の宮女に介抱されて、ト其座に横になり腰を揉ませ足を摩らせなどして居る、奏者一人下手の襖を開けて入來り、

奏者 ハッ申上ます、只今左馬頭殿参内いたされてござりまする。

ト信頼は夢現の體にて、奏者の方には見向もせず、

信頼 ナニ左馬。左馬が参らうと、右馬が参らうと、斯様酩酊いたし居れば所
勞と申せ。

奏者 他人には候はず、左馬頭源義朝殿が参内いたされてござりまする。

信頼 ナニ義朝が参内いたした。イヤモ關東育ちの張魂ひ性得の頑固者と

かく酒と女の坐には、大禁物後刻逢はうと申せ。

奏者 仰には候へども、何か火急の御模様候へば、

信頼 エ、存じて居るわえ。

ト此の時向より義朝胄下腸帯にてツカ／＼と出て來り、信頼沈酔の體を屹と見て、よろしく思入れ、直に信頼の傍に來る、宮女等は此の體を見て、一同狼狽して、信頼の傍を退く、義朝は目ませにて一同を退出せしめ、信頼の傍にムンズと座を占む。信頼はその氣勢に心付きて、

信頼 誰れぢや／＼。

ト酔眼朦朧と半身を擡げ、義朝と顔見合せてびっくりし、

信頼 誰れかと思へば、左馬頭殿ゆるし召され／＼。

トうつ／＼なげなる體、義朝は氣を焦ち、

義朝 これはしたり、信頼卿には、酒に性根を奪はれておはすよな。

信頼 イヤ、聊か酒氣は帯びたれど、酩酊はいたし居らぬ。御用とあらば承らう。

ト起直り膝すりよせ、義朝の打扮に始めて心付き、

信頼 ヤア見れば貴殿は、鏡下に身を固めてしかも夜中に何ぞ火急のことか

義朝 卿には目前の一大事を、よもや忘れはし召さるまい。

信頼 ナニ一大事ハ、ハ、信西亡び清盛走つて此の宮居にゐるからは天

下は早二人が手の物急いては事を損ふ。マ、緩ろぎ召され、

義朝 これはしたり右衛門督殿——イヤサ信頼卿。

ト義朝は嚴然と威儀を正しキツとなり、

義朝 そもそも此度の一條は、かねて君側の兇惡たる、信西清盛を撃亡し、世の汚濁

を掃つてを清明に返さんと、共に誓ひし義は、鐵石剩へ貴卿には、此の一

大事の發頭にて、大將軍の重任さへ帯ばせ給ふ御身ならずや。軍氣の振

ふと振はざるとは、將軍の敬意如何にあつて、成否の運命も此處に繋がる。

信西既に亡びたるも、是只前門の虎を撃ちしに過ぎず。恐るべきは後門に爪を磨く狼の機を伺ふと御存じ知らずや。此の焦眉の急場に臨み、兵の配置、戦さの準備は申すに及ばず、御自身甲の緒をしめて、今やと御待ち有るべき筈を、世は既に太平と思してか、衣冠を着飾り宮女を相手に現なげなる有様は、義朝其の意を得申さず。今にもあれ六波羅より攻寄せ來らん時は、何として召さるる御所存なるか。イヤサ、寐て居て軍さが出來ると思すか。

信頼 ム、

義朝 加之、經宗惟方、去る日公卿詮議の折柄、光頼卿に説破せられて、稍々變心の模様ありと、最前密かに鎌田の注進。

信頼 ナニ、經宗惟方が變心とは、

義朝 たとひ變心いたせばとて、物數ならぬ彼等兩人、味方にいたさうと、敵にならうと、聊か恐るゝに足らざれど、恐るべきは主上上皇、一本黒戸の兩御

所には彼等の外に近侍し奉るものもなければ、萬一六波羅と内通して、彼方に誘ひまづらんとときは、ゆゑしき大事となりぬべし。

信頼 ヤ

義朝 さあるときは天下の形勢、忽ち爰に一變して、君國の爲に兇賊を撃つ我々は、翻つて朝家の敵と視做されん。飼犬に手を嚙まるゝのたとへ、只今竊かに彼等を召寄せ、篤と實否を御糺明返答の品に依つては、義朝聊か所存もござれば――

ト此の間信頼段々酔醒めて眞面目になる

信頼 マ、暫く、左様貴殿は仰せあれど、畢竟こたびの一大事を思立ち候ふも、一つは彼等兩人を、我が股肱と頼みしゆゑ、主上々皇の御事は堅く申合め置きたれば、今更と相成つて、變心いたすなどは、此の信頼は信じ申さぬ。

義朝 イヤ、然に非ず、己の禍福利害に依つて、翻覆常なきは世の人心、人を

信ずるの厚さに失へば、兎角大事の破るゝ基、片時も早く此の場に呼びよせ、御糺明然るべくと存じ申す。

ト信頼尙默然として居る。

義朝 是れ程申しても、卿には、まだ彼等を信じて、某が言を用ひなきよな。

此トタン向ふより、秦野次郎延景、甲冑に身を固め、士卒若干を率ゐ來り、延景は一同と好き所に跪き、

延景 ハッ申上ます

義朝 汝は延景、士卒を帶して、俄かの注進、何事なるぞ――近う。

延景 ハ、ア。

ト延景は一禮して、信頼、義朝の傍近く進み寄り

延景 餘の儀には候はず、一本并びに黒戸の御所には、主上も上皇も渡らせ給はず、いつの間、にやら御他幸相成つてござりまする。

信頼 ヤ、ハ、ハ、ハ、ハ、

義朝 シテ、經宗惟方は如何がなせしぞ——必定彼等の計略ならん。

延景 さん候ふ仔細は未だ存せねども、主上は別當の供奉にて、女房の飾を召し、上東門より六波羅指して行幸あり。まッた上皇には、新大納言の御供にて殿上人の姿に窺させ給ひ、仁和寺に御幸あり、加之大殿關白太政大臣、左右大臣以下公卿殿上人此の由を傳へ聞き、我れ先にとお跡を慕ひ、一人も残らず六波羅指して、馳せまゐらられてござります。

ト此の間信頼無念の思入よろしく

信頼 あれ程堅く申含め置きたるに、扱は貴殿の言葉に違はず、全く彼等變心なし、やみ／＼信頼を出しぬきをツたか。

ト信頼は俄かに狼狽驚愕して爲す所を知らざる體。

信頼 それにつけても、さ／＼左馬頭殿——如何がいたしたものであらうか——かへす／＼も憎さ兩人此の信頼をたばかるなど、は——何といたしたものであらう。

義朝 コハ物にや狂はせ給ふか、マ、静まり召され／＼。

信頼 ム——さるにても、何とかして——

義朝 其の御悔恨既に遅し。今が今まで某が口を極めて申せし所は、ここ候ふ／＼。此の期に及んで、如何に陸梁し給ふとも、逃げたる鳥の後を狙ひ、矢を放つも同じ事——これと申すも畢竟は其の沈醉、其の油斷から起りしこと斯る不覺仁とは夢にも知らず、共に大事を計りしは、エ、我れながら愚かなりき。

ト義朝よろしく無念のこなし

義朝 さりながら一旦かうと誓ひし上は、源氏の習ひ心變り候ふべき、戦さの手筈は防戦なれば、豫て謀し合せし通り、貴卿は是より待賢門へ出陣の御準備し召され。

ト彼方此方に立迷ひ地たゝらを踏んで陸梁す。義朝は傍より見て、

延景 籠る勢は宗徒の兵二百餘人従ふ軍兵二千餘騎、要所々々の手配りは、大方整ひ候へば、

義朝 片時も早く御準備々々々。

ト舍人三人下手奥より甲冑を運び來る、信賴これに着かへると、バタ／＼になり、向ふより金王丸、小具足打扮にて駆け來り、

金王丸 御注進／＼。

義朝 何事なるぞ。

金王丸 六波羅勢は都合三千餘騎、佐衛門佐重盛を大將軍となし、既に内裏を打ち出て、賀茂河を馳せ渡し、一先西の河原に扣へたる模様候。

義朝 さもあらん。防戦の手筈は、かねて示せし通り、昭明建禮の臨小門の外は、盡く鎖し固めて、源太が手勢を始めとなし、要所々々の固めに、聊か手落はあるまいな。

金王丸 さん候ふ。彼の二門の外は、陽明待賢、郁芳の三門も固く鎖して、大庭

には馬共多く引立て、梅壺桐壺、東光殿の脇の壺まで源氏の軍勢雲霞の如く充満し、二十餘旛の大旗小旗、勇ましく打ち立て、防戦の準備をささ手落も候はねば、いつ何時攻寄せ候とも、一定大事候はず。

ト此の時大宮表の方に當りて、人馬騷然たる音聞え、やがてドツと鯢波起つて、大内も揺ぐばかりに響き渡る、一同キツとなる、

義朝 敵は最早大宮表まで攻寄せ來つるぞ。

ト義朝、延景、金王丸及び士卒一同は、各々身構へして起んとする、信賴は鯢波に驚きて、顔色俄かに土の如くふる／＼と振へながらと、まどひ居る、義朝はこれを見て一喝し、

義朝 ム、信賴の卿には、國の聲に應し給ひしよな、かばかりの事に、狼狽して、度を失ひ給ふやうにて、千軍萬馬の中に在つては、何となさるゝ。大將ともあるべき貴卿の御耻辱に候ぞや。ヤア誰れかある、信賴卿の馬引け。

ト此時下手より舍人三人馬を曳きて、階下に来る、信賴は足も腰も

わな／＼とふるひながら、やうやうに階を下り、馬に乗らうとする。馬は逸り切つたる逸物にてつと出でん、つと出でんとする。信頼は狼狽愕せる上に肥満せる身軀に大鎧を着したれば、身軀自由ならずして頓には乗得ず。義朝は傍より此軀を見てもどかしく思ひ、

義朝 大將軍は馬にも得乗り給はぬよな、エ、言語道斷。ソレ延景先を打て。

信頼 ト義朝は信頼を打捨て、先に行かうとする

義朝 さ、左馬頭殿、ア、お待ちなされ。

信頼 ト鎧の袖に縋る。此時騒然たる鐘鼓の聲、関の聲起る、

義朝 エ、不覺仁に構うて居る暇はござらぬ。

ト信頼の手を拂ふ。信頼僅となる。義朝主従は一同急ぎ向ふへ這入る後に、舍人等は疾く／＼召され候へ」とよつてかゝつて信頼を押上げたるに、餘り左手の方に押やられて、伏し様に礎と落つ、再び

やう／＼かきのせられ、ともかくも待賢門の方を指して上手に這入る。此間いろいろをかしみよろしく。

(二) 待賢門の亂戰

内裏の大庭、向ふ待賢門、ズツト上手によせて紫宸殿及び其の他殿舎の遠見、大庭よき處に大椋の立樹、正面殿舎につゞく築地、庭内は源氏の白旗、庭外は平家の赤旗と兩々相映じてひるがへりを、防戦最中の躰なり、躰て下手に當り、貝鐘大鼓の音、亂調に響きて、鯨波起り、門及び堀などの碎くる音、激しく聞える、向ふより平家の侍、三右衛門景安、士卒大勢を率ゐて攻入り、好き處に陥止まり、紫宸殿の方をキツと見て、

景安 郁芳門の弓手に當り、赤地の錦の直衣に、黒絲威の鎧を着し、黒羽の矢負ひたるは源氏の大將左馬頭義朝と覺ゆるぞ、ソレ打取つて高名せよ。

ト景安は士卒を指揮して大掠の邊りまで進む、下手より信頼が部下の兵大勢追ッ駈け来る、景安キツと見て

景安 ヤア物數ならぬ葉武者ども、ソレ討取れ。

ト直に亂戦となる、ト、味方の勢叶はずして下手へ引く、景安一同と追うて這入る、上手より秦野次耶延景出來り待賢門の方を見て、

延景 待賢門の固め心元なし、駈付け見よと御主君の命を帯びて來りしが、早斯くまでに破られつるか。

ト行かんとする、下手より一人取ッて返し延景を見て、

景安 秦野次郎延景殿候な。

延景 然云ふ御邊は、寄手の大將重盛卿の旗下に屬する與三右衛門景安殿よな。

景安 いて見參仕らん。

ト双方撃つてかゝる激しき立廻り、ト、延景痛手を負ひタヂク

となる、景安は透さず組んでかゝり組みしいて延景の首を搔く、此のトタン、エイと矢聲して矢一ツ飛來り景安の急所を射抜く、景安アツと云ッて斃れると、上手より、義朝騎馬政家、金王丸つぎ從ひ出て來り延景の死骸を見て、

義朝 あたら勇士を撃たせたるか。

政家 今少し早かりせば、此の最期は見せまじもの、

金王丸 残念至極にござりまする。

ト主從愁の思入れ

義朝 さるにても、大臆病人の信頼は、何をいたしをるよな。防ぐ兵に耻ある

大將が居らねばこそ、斯くは門を破らせつれ。義朝が一驅けにて見事彼等を追ひ出し見せん。

ト主從馬の轡を并べて行かんとする、折柄向ふより信頼はふくの體にて鞍坪に縋りながら、落來る、義朝此の體を見て信頼を馬上

ながら突返し、

義朝 信頼の卿にはおはさずや。

信頼 左馬頭殿か——敵は思ひの外に手強く、必死となりて防ぎたれど、無念

にも破られて候ふぞや。

義朝 ヤア卑怯なり不覺なり、大將軍は敵の真先に進みて討死こそいたせ、一

軍だにせずして、後ろを見することやある日本一の不覺仁めが。

ト一喝して持つたる采配にて、信頼の頬の邊りをしたゝかに打つ。

鎌田と金王丸は氣の毒といふ思入にて、信頼の傍により、

政家 ともかくも待賢門へ御引かへしあつて然るべし

金王丸 サ、早く〜、

義朝 其の儘に打捨て置け。彼體の臆病者、何の役にか立つべき、却つて軍さ

が出来ぬぞ。打捨て置け〜。

鯨波再び起り、向ふより平家の侍新藤左衛門家泰、真先に立ち大勢

と攻入り来る。

新藤 其處に渡らせ給ふは源氏の、大將軍と見奉る。

義朝 然云ふ汝は何物なるぞ。

新藤 待賢門の寄手の侍新藤左衛門家泰にて候。

義朝 いしくも名乗つたり、我れこそは左馬頭源義朝なるぞ

政家 鎌田兵衛政家、

金王丸 澁谷金王丸。

新藤 いで見参々々

ト主従三人敵勢の中に割つて入る、激しき立廻り、家泰は士卒を指揮し、始終義朝に目をかくる、政家と金王丸は義朝を撃たせじと必死となつて切まくる、此間平軍數人切倒される、ト、家泰叶はずして下手に引く、義朝主従追うて這入る。

(三) 三條河原の伏兵

三條河原の堤まばらに柳の立樹及び切株などすべて霜枯れの景色、正面上手に寄せて内裏并びに其の附近の遠見時は十二月下旬某夜、月はあると雲間に隠れて四邊なほほのぐらし爰に下手より以前の源義朝、左衛門家泰、士卒大勢を随へ出來り、

新藤 いかにかに者共、猛き源氏の兵も待賢門の一戦にて散々に敗北なし、右衛門督は云ふに及ばず、鬼神の勇ある左馬頭も終に無念の旗を巻きて、主従僅か三騎となり、河原を指して落ち行きしを遺憾にも撃ち漏らせしが、まだ此處までは来るまじ、今にもあれ出逢ひなば、必共に不覺を取るな。

一同 心得ました。

新藤 ム、こなたに近づくあの足音は——彼れこそ正しく、義朝主従。忍べ、忍べ。

ト新藤は手勢を指揮し、左右に分れて忍ぶと向ふより鎌田政家大重になつて處々手傷を負ひ、血刀の儘を提げ始終あたりを心くばり出て来る、好き處に止まり、刀を杖に突き、四邊へ思入れあつて政家 今朝よりの合戦に馬も泥み、人も疲れ、源氏は過半撃れたれば、御主君の日比の御氣質、一途に撃死と逸り給ふを、政家達てお諫め申し、金王丸と主従三騎漸く是れ迄落ち延びしか、心にかゝる行手の伏兵、御主君の御身の所に不慮の御難、これ無きやうと、只一人お先きを打ち探りを入れて來りしが、忍ぶ兵も居らざる様子、一先づ彼方の堤の上に休息なしてお出を待たん。

ト政家は尙邊りへ眼をくばりながら土堤の上に来る、此の時月雲間を出て、明るなる、新藤左衛門主従は左右よりパタ／＼と立現はれて、政家を取巻き、
新藤 義朝の先導なして、伏兵探ぐる落人は、鎌田兵衛と見しは、僻目か。

政家 我れこそ兵衛政家なるは。然云ふ汝は何者なるぞ名乗れ聞かう。
新藤 最前待賢門の戦に汝等主従撃漏らせし平家の侍新藤左衛門家泰なる
は——者共ソレ。

政家 何を、
ト双方斬つてかゝる、激しき立廻り、鎌田數人を切倒す、此の時月ま
た暗くなり、だんまり模様、ト、政家が斬込む一刀に左衛門は右手
の肩より乳下にかけて斬付られる、左衛門痛手を負ひアツと云つ
て倒れる、月又雲間を出る、右衛門ひるまず起上つて斬つてかゝる、
此時向ふより義朝金王丸を先に立て出來り、此の躰を透し見て、
義朝 今の物音、心元なく思ひしに、正しく伏兵、ソレ鎌田を討すな。
金王丸 心得ました。

ト金王丸は奔り寄つて後より左手の肩に斬つくる、左衛門二ヶ所に
深手を負ひ再び喘と立る處を金王乗つかゝつて仕止める、政家は

金王丸を見て初めて氣付き、

政家 金王丸殿か——シテ御主君には、御別條はあらざるか。

義朝 氣遣ひいたすな、別條無いぞ。

政家 早それに渡らせられしか——案に違はず敵の伏兵、五人を相手に血戦

なし、雑兵二人は遁がしつれど、金王丸が助太刀にて、

金王丸 首尾よく撃取り候へば、

政家 御心安く思召されよ。

義朝 二人が命に別條なきは、何よりの喜びなるぞ。

政家 ともかくも御主君には敵勢再び來らぬ中、

金王丸 片時も早く此場を御落去、

二人 然るべう存じまする。

ト義朝は心せく躰もなく、上手に廻り柳の切株に腰打掛ける、政家
と金王丸好き處に住ふ

義朝 イヤナニ兩人一旦汝等が諫に從ひ此の河原までは落ち延びたれど此の伏兵の様子にては行手はいよ／＼覺束なし。名も無き葉武者の手にかゝりて見苦しき最期を遂げなば耻辱に耻辱を重ねる道理寧ろ此處にて潔よく生害なして相果つれば後事は汝等に頼むぞよ。

ト差添を抜き弓手の脇腹に突立んとする政家金王は忙て、左右より推止め

政家 イヤ／＼未だ御生害の時節には候はず。大將軍の御身を以て斯く落人とならせ給ふ心の中の御無念御推察は候へども其處を何卒忍ばせられて、

金王丸 一先此の場をとまかくも。

義朝 たとひ此の場は落ち延びんも東へ行かば逢阪山不破の關西海に赴かば須磨明石を越えらるべきや。弓矢取る身は死すべき時に死せざれば家の面目子孫の耻辱なるぞ。

政家 仰には候へどもそは一旦の御耻辱まことお家御子孫の萬代の謀を思召さば今輕々しき御生害は恐れながら御淺慮の御振舞かと存じまする。義朝 何と申す。

ト義朝差添を持直しキツとなる政家一二歩後にしさつて手を突かへ、

政家 越の勾踐は會稽の憂目を忍びて一旦吳王の臣となり漢の高祖は滎陽の難に逢ひて萬死の境をのがれ出て終に謀を回らして敵を滅し候ひぬ。大事を抱き候ふ人は皆生死の巷に迷ひ浮沈の波に漂ひて千百の屈辱も甘んじて身に忍び死すべき一命を全うするは漢家本朝古より良將の習ひとこそ存じ候へ。されば何處の里になりとも暫く御身を隠し給ひ越王漢祖の耻を忍び平家を滅す御計略。幸ひ尾張内海にはかねて忠義を存じ候ふ某が舅長田莊司忠致罷在候へば一先かしこへ御落去ありて時機を窺ひ東國へ御供仕らば諸國の源氏は聲に響再舉を計るも瞬く中。

金王丸 某存じ候ふにも、只今御生害これあらば、敵は愈々勝に乗り、残る源氏の兵も力を落して忽ちに平家に靡き候はんもし、行手の杜影などに再び伏兵これあるか、まッた山門の法師輩平家の内命承り、御手向ひ仕らば、某等兩人にて、必死に戦ひ血路を開き、やすく落しまゐらすべし。

政家 衆寡いよく敵せずして、萬一叶はせられぬときは、其所にて御腹召されんも、未だ遅くは候はじ、たとひ御自害候とも深く秘しまゐらせて、東國の味方頼みあるやう巧みに計らひ候はゞ、死せる孔明生ける仲達を走らすの故事も敵を欺く一ツの計略。死を一途に定むるは、近くして易けれども謀を萬代に残さんことは遠くして難しとの古人の金言も、斯様の時に御賢慮あつて、御生害お止まり下されませうやう。

金王丸 政家 偏に願ひ奉る。

義朝 切なる汝等が諫なれば、一先此の場は落去すべし。さりながら、思へば只一朝に大事空しく破れたるは、かへすくも無念なり。彼れ右衛門信

頼をかばかり臆病柔弱なりとは、淺はかにも見るの明なく偏に彼れを股肱と頼みて、何事も計りしゆゑ常に樞機を過ちて、勝つべき軍さに不覺を取れり。翻つて往時を思へば、父上助命の願ひ以來此の義朝がすること爲すこと、皆盡く畫餅に歸す。たとへば磯邊に蟹の子等が、眞砂の城を築くに等し、百計萬慮を廻らせども、其の甲斐更にあら浪の打ち來る時は、忽ちに其の泡沫と消え去り了んぬ。御父上の御首に契ひしことも今は早仇となつたる此の憂耻、これといふも畢竟は親を撃つたる大罪の、今こそ我れに報い來て、自ら招く因果應報誰れを怨み誰れをか咎めん。

政家 誠に必勝を期したりし、御企圖の斯くまでに、鵠の嘴と喰ひ違ひ、御落去とまで相成らんとはいかて察知し候はんや。弓矢取つては昔より源氏の武夫は、梅檀の林に餘木なく、鞭さしまても武勇すぐれて、皆人猛しと申し候に、思はぬ不覺を取つたるは、強きもの必ず勝たず、又弱きもの必ず負けず、成敗常に時運に歸する軍さの習ひに候へば、ゆめく此度の一敗に、

御心挫かせ給ふ可からず。

金王丸 御運再び廻り来て世に出で給ふそれまでは、御短慮の御振舞は幾重にも御謹慎某が愚存の程も只これに外ならず。

義朝 今に始めぬ汝等が常に主家と死生を共にし、忠義を勵む鐵石心義朝過分に思ふぞよ。斯かる義烈の臣ある上は我れたとひ死するとも、皇天后土源家をばいかで助け給はざらんや。然らば夜の明けぬ中、

政家 河原を上りに

二人 落ちさせ給へ。

ト主従は河原を上りに出立んとするトタン、最前打漏されし平家の雑兵二人上手よりうかゞひより突然義朝に斬ッてかゝるを、政家と金王丸手もなく仕止めて血刀を收め

二人 いざ、おん供仕らん。

第三 齣

(二) 忠致父子の陰謀

長田屋敷の一間、上手床の間正面襖、下手杉戸、其の他飾附よろしく、爰に上手に忠致の悴先生景致直垂袴にて坐り居る、少し離れて下手に政家の妻十六夜、兄景致に對ひ手を突いて居る、問答の轉。

景致 シテ此の兄に密々の話といやるは。

十六夜 サア其の話と申しまするは、外では無けれど、此程から、おかくまひ申します、我が君義朝公の御身の上に心配なことが起りましたわいな。

景致 とは又如何なる仔細なるか。

十六夜 御存じの通り我君様は御武運拙くまし／＼て、お情なや都よりは、追手のかゝる御身の上。恐れ多くも御首を揚げたる人には、我君の御知行分と釣替の勸賞を賜はるといふ世間の噂。

景致 さればく、斯る噂のあればこそ、油断ならずと心を配り、かくまひ奉る

奥の別室は、牢舎に似たる厳しき構へ、加之お傍には我々父子、まつた腹心の家來の外は、いッかな近づけ申さねば、氣遣ひなこと會てなし。

十六夜 とは申せども、出入繁き館の内、いつどうして御様子、誰れ知るまいものでも無い。羅にかゝつた鳥を見ては、仁者の心も頼まれぬ、若し二心の者あつて、平家方の由縁の者に此の由を通じなば――

景致 其の心配は無用々々、我々父子が身にかへて、斯様に守護しまつる上は、長田の館は、金鐵の檻も同然。

十六夜 イエ、千丈の堤とても蟻の穴、萬一左様の者あらば、其の時こそは御運の末、父上様や兄上様の御身の上も如何なること、案じられて、今日此頃は、一ト夜さもまんじりと眠られぬ、其の矢先に昨夜計らず我が家中に、表裏不忠の曲者を見附けうとは――

景致 エ。とはまた如何なる――

十六夜 兄上、おとぼけなされますな、其の曲者は、貴兄のお胸に能うお覺えがござりませうが。

景致 何といやる。

十六夜は膝をすゝめて、

十六夜 此頃中から父上様とお二人の御様子、合點ゆかぬと思ひ居りしに、昨夜も丁度子の刻過ぎまで奥の離室で御密談。心にかゝつて寐られぬまゝ、そつと臥戸を忍び出て、物影に立寄つて、聞取りし兄上の言葉のほし。

景致 ハ、ハ、そりやあことは何をいやる。成程昨夜々深まで、彼の離室で

父上と他聞を憚ることにつきお話はしたなれど、左様なこと毛頭此の身に、

十六夜 イエ、く覺えが無いとおつしやつても、耳に入りしが何より證據。景致 さうおことはお言ひやれど、物には兎角僻目僻耳、只言葉の端を聞取り、

其の仔細も糺さいて、父上や、此の兄が、何か悪事でも巧む様に、間捨にならぬ其の一言。

十六夜 エ、そのいひわけ聞きませぬ。喃兄上様昔より不義非道を企て、君を弑し、主を撃つたる人々の榮えた例がござりまするか。一時の榮花は得られても、上には佛神の御照覽御憎しみの冥罰は、忽ち其の身に報い來て、妻子は愚か、家國まで失ふ例は物知らぬ妾が申し上げずとも、よう御存じあるべき筈、一時の慾にお目か闇み、よしなき大事を企て給はゞ、お二人の御身の上に主殺しの惡名は、金鐵の碑に彫刻たも同じ事、此の世ばかりか後々までも、世間の人のつまはじき長田の家の名折となつて子孫の恥辱となりますぞや。これ程お諫め申しても、推黙つてござるのは、まだお隠しなされますか。お聞入がござりませぬか——此の上は我君様、夫兵衛政家殿へ同腹でない申譯、且は父上兄上へ、最後の御意見——そうぢや。

ト十六夜はイキナリ短刀を抜持つて自害しやうとする、景致は驚いて其手を抑へ、

景致 コリヤ待て妹、早まるまいぞよ。

十六夜 イエ、放して。

景致 マ、あぶない、あぶない。

ト景致は短刀をもぎとる、十六夜は其儘泣伏す。

景致 コレ妹、主君を思ふ其の心底見届けし上からは、今までつゝみし父上との密談の一條物語つて此の兄が逆謀ならぬ本心を、逐一おことに明かすべし。

十六夜 エ、そんなら妾が諫をば、

景致 オ、聞入るゝとも入れぬとも、子細を語らば自から疑ひ晴れんおことが胸マ、一通り聞いて給れ。
四方へこなしあつて

景致 其の密談の一條げに、おことが推せし如く、御主君の御身の上に係はつたる一大事なれども、固より極密女の與り知ることならねど、今は何をか包むべき。おことも豫て知る通り、頭の殿には、都の詮議日々に厳しく、殊に此頃平家方の廻し者、此の内海に入込みて、内々館を窺ふ様子と、昨夜竊かに、父上まで、彌七兵衛が火急の注進。

十六夜 エ、

景致 此の事殿に告げ奉らば、日比の御氣質、且は是まで、途中にて、幾度か御生害あらんとせしを、兎も斯もと政家殿が、様々に賺しまつり、やうく此館まで御落去ありて、いまだ御心も、静まり給はぬに、斯様のこと申上げ驚かし奉らば、又もや御運の極みかと、御生害の御決心遊されんは、必定なり。さある時には、政家殿は、愚かなこと、父上も此の兄も如何であめく存ふべきか。此の館を枕にして、只討死の外あらず。

十六夜 スリヤ父上にも、兄上にも、まこと斯くまでの御決心を遊ばしまして

ござりませるか。

景致 問ふも愚かや、其の決心は、疾くより爲せり。さりながら、其は最後の覺悟にて、爲すに最と易けれど、虎口の難より救ひ進らせ、お家御子孫の御爲に、後々までの謀略を定めんこと、頗る難し。如何にせば、やと父上と膝を割つての談合に、たとへ今御姿を變へて、東國へ落しまゐらせても、心細きは、御道筋、犬打つ童に至るまでも、容易く心ゆるし難し。さりとして、いつまでも此の館に、べんくとかくまひ奉らば、忽ち都の御討手。此上は是非に及ばず、裏の裏ゆく謀略、彼の彌七兵衛が、骨格違ましく、髭生ひて、聊か殿の御面影に似たるを、幸ひ御身代りに立て奉り、館には、兵士を集へて、中夜俄かに騒擾なし、政家殿や、金丸、まッた青墓より、御供いたせし、玄光等は、圍を切抜け、行方知れぬ、躰にもてなし、長田父子は、二心を抱きて、主君を撃つたりと、披露なさは、世の人心も、鎮りて、詮議も、自と緩む道理。其の隙を窺ひて、やすやす落しまゐらするか、さなくば、其の間に、計策を廻らし、諸國

の源氏を驅催して再び事を擧げさせらるゝか、兎にも角にも所存の程を夫となく申上げて御決心を伺はんと、様々評議を凝らせしなり。さるを僅かに言葉の端を聞僻めて事の實否をも確めず、父兄妹の其間に不義非道の二心とは、余りといへば粗忽千萬、何と合點がまゐりしよな。

ト是にて十六夜は疑心漸く晴れて面目なきこなし

十六夜

兄上様おゆるしなさりて下さりませ、事を分けたる其のお話然う委細を承れば、御密談の一條は、全く妾の聞僻め、其の邪推と廻氣は、矢張女の淺果敢な心から斯まで深き御了見のあるとも知らず、勿體なくも父上や兄上をお怨み申し、面目次第もござりませぬ。

景致

ナンノ、他人ならぬ父兄妹、其の疑さへ解けたなら、此兄も何より重疊謝罪には及ばぬわいの。是れといふも畢竟は、君を思ひ、夫を思ひ、父兄妹を思ふことが忠孝義節から出てたる真心却つて嬉しう思ふぞよ。

十六夜

有難う存じます。左様ならば兄上様妾は奥へまゐりまして直に

夕餉のお仕度を、

景致 オ、我は是より御居間に行きお機嫌を伺はん。

ト十六夜は坐を起つて下手に行かとうするを、景致は呼止め、

景致 ア、コレ待ちや、今の話の一伍一什は、政家殿にもまだ内密にして

給はれよ。

十六夜 此上は何の他言いたしませうや。御心安く思召しませ。

ト十六夜は下手の襖を開けて這入るを、景致は見送り思入あつて坐を立とうとするトタン正面の襖を開けて、忠致直衣一刀ざし老けたる装へにて出来る。景致は見るより、

景致 父上、心懸りな事が出来いたしてござる。

忠致 オ、十六夜の一條ならん、委細は一間にて聞取つたり。昨夜の密談ど

うやら娘が氣取りし様子。

景致 仰の如く談話の急所を取つて押へ退引させぬ詰開き、途方に暮れて候

ひしが、やう／＼思付たるまゝ、當坐の辨疏言葉を盡して申せしかば、流石女の心脆く、漸く合點するりし様子なれども、心慧敏き彼の十六夜再び如何なる疑念を醸し、有りし次第を政家に、打明さんも計り難し。

忠致 我とても其の懸念徒らに機會を待ち評議に時を移しなば、兎角は破綻の基。

景致 此上は何の躊躇かいたさるべき明日とも言はず今日今宵。

忠致 アコレ。

ト此問答の中忠致は上手好き處に坐を占め、膝を進めて聲を低め、手筈は昨夜定めし通り湯殿に準備の力士を伏せ置き、御主君にはお湯をまゐらせ、

景致 政家には酒を強めて不覺となつたる頃を計り、

忠致 先づ御主君を撃ち奉り、時を移さず政家をば、

景致 其の間父上には、家ノ子郎黨を指揮し給ひ、剛力無双の玄光法師、まツた

手利の金王丸等を御仕留め下さるべし、

忠致 彼等如何に勇力ありとも、多勢に無勢、何條事かあらんや。何は然れ、油断は大敵、我は是より御居間にゆきて御酒のお相手、おことは直に彼處へ参り、お湯殿始め何かと手筈を、

景致 心得てござります。然らば父上、

忠致 オ、仕損じなば一家の浮沈諸事くれ／＼も手拔りなさやう、能く心を付け召され。

景致 畏つてござります。

ト景致は坐を起ち急ぎ下手の襖を開けて這入る。忠致は四邊へ思入あつて

忠致 大事目前に迫り來つて、一家の浮沈も今宵を瀬戸さばれ、相傳の御主人を――ア、人盛なれば天に勝つ、澆季に及ぶ今の世は君臣相害ひ、骨肉相

せめぐも、不義非道は只一旦刃を汚せし血鮮と共に拭ひ去れば、罪業も消

えて痕なき元の清淨。

トにつたり打笑む。

(二) 義朝政家の最期

尾州内海長田莊司忠致館の奥座敷正面上手寄りに床の間をこれに次ぎて襖上手他の奥の間に通ふ杉戸ありて附家臺下手湯殿に通ずる廊下義朝は政家金王丸等と酒宴半の躰なり。

政家 三條河原を御落去以來野に臥し山に寝ね給ふさまくの御艱難。あまつさへ伏兵處々に出没して如法御運のおん極みと危み奉りしことも幾度か――

金王丸 ある時は薄氷の上を踏み又ある時は深淵の縁に臨み交々いたる萬死の境を出てさせられて首尾好く此の内海まで御安着あらせられしは

政家 これ偏に源氏の弓矢神正八幡大菩薩の御身を守護らせたまひしゆゑかと――

兩人 恐れながら存じまする。

義朝 あるひは神明の應護によりて、かゝる危難を通れ武運を保ち得たらんもかねて我が股肱と頼む汝等兩人まつた彼の青墓より随ひ参りし玄光等がつねに萬夫の勇を揮ひ我を死地に救はざれば此處まで一命を全うせんこと恐くは難かりし。イヤナニ兩人夫につけても何より安堵いたせしは忠致父子が我に對して聊かの隔意なく世にも懇なるその待遇過越方の憂かりし事も今は夢かと打忘れて只管満足に思ふぞよ。

政家 ありがたき御懇の御言葉斯く舅父子の者に御心をゆるさせ給ふは政家の身に取りても大慶至極に存じまする。

此處に政家の妻十六夜瓶子を持つて出て來り政家の後へ好き處に坐を占め瓶子を下に置き手を突えて恭しく義朝の方に一禮し

政家 こりや十六夜殿へ御酌を。
十六夜 ハイ。

ト瓶子を持ち立ち上り義朝の方へ進み一禮し瓶子を控へて待つ。
義朝グツと飲干し杯を出す十六夜酌をする。義朝一口飲んで下に置き

義朝 長さ間の滞在に御身達が日夜の心盡しいかばかり満足に思ひゐるぞよ。

十六夜 有難うござりまする。不自由なる田舎のことゆゑ殿様のお口になひまする物としては——誠におはづかしうござりまする。

義朝 そちは幾歳とか申せしな。

十六夜 ハイ十七にござりまする。

義朝 政家へ。

ト義朝杯を政家へさす。政家座を進みて恭しく受ける十六夜退がつて酌をする。此時忠致奥の襖を開けて出て来り下手に座を占めて手を突へ、
忠致 最前より罷出て御相手仕らんと存じながら春の準備に取紛れて思はぬ失禮仕つてござりまする。

義朝 オ、今日は最早師走大晦日何かと多用ならん。イヤ何忠致そち達父子が何くれと手厚き介抱身に泌みて嬉しく思ふぞ。

忠致 勿躰なき其の仰日比御高恩の萬分一にも應へ奉り候はゞ有難き仕合に存じまする。附きましては東國御發足の儀も父子が願ひを容れさせられ御延引下されしは冥加に餘る思召此の上とも御身の上は我々共が命にかへて如何やうにも御かくまひ奉れば都の詮議厳しく候とも聊か御心に懸けさせられず東國へ御下向これ有りしと御同様に願ひ奉りまする。

忠致 コリヤ娘殿のお酌を。
十六夜 ハイ。

政家 義朝に杯を返す。十六夜酌ぐ。義朝 飲干して
忠致 忠致そちへ。

忠致 頂戴いたすでござりませう。
忠致 進んで杯を頂き直に飲干して義朝に返す。十六夜他の瓶子
を持つて席を退く。義朝は忠致の顔をじつと見て、

義朝 忠致、そちの顔色たゞならず相見ゆるは——如何が致した。

忠致 左様にござりまるか——
政家 如何さま承つて心附けば舅殿のお顔色いつになく蒼白めて——
金王丸 目の邊りの肉も落ちて相見ゆるは——

忠致 イヤ一兩日聊か風氣に候上何かと所用に心を使かひ候へば、或はその

所爲てがなと存じませう。

義朝 老體なれば大切にしやれ。

忠致 有難う存じます。

義朝 して景政は何と致した。

政家 最前奥にてチラと姿は見かけしも——

忠致 悴は取急ぐ事出来いたし最前他出致したれど最早歸宅の時刻程なう
御機嫌の伺ますでござりませう。サ、政家殿、金王丸殿、お過しなされ。

ト忠致は自身瓶子を取つて兩人に酒を勧める。此時忠致が腹心
の家臣一人下手廊下より出て來り、

家臣 申上ます。最早お湯のお加減が——

忠致 好いと申すか。

家臣 左様にござりませう。

忠致 シテお湯殿の御準備は、

家臣 諸事整へ置きましてござりまする。

ト忠致頷く。

忠致 御湯加減が宜しい申す事てござりまするが――

義朝 何寄の馳走なるぞ。

忠致 然らばこれより――

義朝 直に参るであらう。

忠致 家臣を顧みて

忠致 お湯殿へ御案内。

家臣 畏りました。

義朝 義朝起上がり。

金王丸 金王丸。

義朝 ハッ。

義朝 腰の物を。

金王丸 畏つてござりまする。

ト家臣先に起つて廊下の戸を開け義朝を案内して行く。金王丸は其後より佩刀を持つて従ひ行く。忠致と政家とは坐を離れて見送り懸て元に直つて、

忠致 御前にては何かと窮屈。御入湯の間なりとも緩ぎ召され。サア今一献。

ト酌をしやうとする。

政家 最前より殿のお相手にて見らるゝ通りの酌酎なれば――

忠致 他處ほかならぬ身の家にて何の遠慮イヤその小杯では――大杯が好うござるぞ。

ト忠致三寶の上に在る大杯を取つて政家にさす政家いとも迷惑の體にて、

政家 然らば、

忠致 ア、今宵は充分に過し召され。

ト忠致は大杯になみくと酌をする。政家は少し飲んで下に置く。此時上手杉戸の内より以前の景致他處より今歸つたといふ體にて出て來り、

景致 これは、政家殿火急の用事出來せしたため思はぬ失禮。

政家 只今歸宅召されしか。

景致 左様でござる。シテ御主君には。

忠致 只今御入湯ぢや。

景致 左様でござりますか。シテお準備は――

忠致 お湯殿か――イヤ汚いものはすべて取形附け――

ト父子顔見合せ氣味合ひ。此間政家思はずふらりと眠氣を催す。

忠致 コリヤ景致政家殿へお合を致せ。

ト政家ハツと思ふ氣味。

景致 サ、政家殿是より新入替り此の景致がお合致さん。

政家 イヤもう此の上は。貴殿に献さう。

ト小さき方の杯を飲みて献す。景致は之を拒み、

景致 さりとは御単怯千萬。大杯にて頂戴致さん。

政家 夫れは迷惑千萬。此の通り未だ飲残し居る始末ゆる。

景致 ア、左様仰らるゝな。

忠致 日頃の手腕にも似合はぬ――

景致 サ、ぐつと干しておさし下され。

トこれにて政家は詮方なく大杯の残りの酒を飲干し。景致にさす、

景致 受取つて政家になみくと酌がせ見事に飲干して返杯する。

政家 益々迷惑の躰にて、

政家 ゆるし召され、もう此の上は――

景致 これはしたり今宵に限つて何を御辭退。

忠致 十二分に過し召され。

ト父子は交るゝ政家に酒を強ふる。政家は酒の酔次第に廻りて段々と苦しみ出し、漸く居ずまひも崩れて沈酔の模様よろしく、ト其の場に倒れて前後不覺となる。父子はしばし無言のまゝ、此躰を見てゐるや、あつて景政は態と聲高に呼かけ、

景致 政家殿何と召された、政家殿。

ト手をかけて揺り起さうとする。政家は尙も不覺の躰。景政はキツとなり、

景致 父上。

忠致 コレ。

ト制し景致に耳打をする。景致頷く。二人は静かに坐を起ち、忠致は奥へ景致は上手へ急いで這入る。此トタン下手廊下口より十六夜走り入り、政家が沈酔の躰を見てビックくりし、直に其傍に駈

十六夜 我夫、お目をお覺しなされませ、一大事でござります、喃政家殿

寄つて、
政家 驚いて我にかへり、屹と坐に直り、

政家 誰かと思へば御身は十六夜——何事なるぞ。

十六夜 御主君の一大事でござりますぞへ。

政家 政家びつくりして、膝すりよせ、

政家 何とお言やる。

十六夜はあづと四邊を見廻はし、せきこみて、小聲で、

十六夜 父上と兄上とが謀し合せて我君をばお湯殿にて討ち奉る不義の計

略——

政家 ヤ、何と。

十六夜 かういふ中も心が迫く——片時も早うお湯殿へ。

ト湯殿の方を指し政家の手を取り連れて行かうとする。政家立上りよろ／＼となる。此の途端奥の方に魂消しき物音についで激しき格闘の音聞える。政家も十六夜も愕然とする。傍なる佩刀をおつ取り立上り。

政家 や、彼の物音は。

十六夜 正しくお湯殿。サ、片時も早く。

政家 エ、しなしたり。

ト政家は刀の鞘を拂ひ、鞘は其處に打棄て白刃を提げて下手廊下口を指し一散に馳せ行く。十六夜は懐劍を抜き放ち身繕ひして政家に續き走り行かんとする途端上手に激しき物音して杉戸をがらりと引開け兄景致禱を十字に綾取り股立取つて血汐したゝる白刃を提げて突と躍出づ。十六夜見て、

十六夜 あなたは兄上。

景致 政家は如何がいたした。

ト十六夜には目もくれず廊下を指して走り行かんとするを十六夜遮り、

十六夜 コレ兄上。お待なされ。

景致 え、危い。其處退き召され。

ト押退けて行かんとするを又も遮り、
十六夜 いえ退かぬ退きませぬ。ようも／＼此の妹を口の先にて欺しすかし、自害を思ひ止らせて代々の御主君をば——いかに利欲に迷へばとて、
テモあんまりな不義非道——

景致 都方の仰なれば主従骨肉も是非に及ばぬ。サ、危い／＼、其處通せ。

十六夜 かくなる上は生存へて何かせん。主君の爲、良人の爲、長田の家の名譽の爲、兄上尋常に覺悟召され。
ト懐劍にて斬つてかゝる。引放し行かんとするを十六夜は後

より又斬りかゝる利腕を取つて突遣り、磔となつて又起上り斬つてかゝらうとするを足蹴にかける、十六夜急所を蹴られてウンと氣絶するを見返りもせず走り行かんとする處に、廊下より政家白刃を提げ髪も童に振り亂して這入つて來る、双方身構へキツとなる。

政家 汝は景致狂氣せしか。

景致 御主君落命ある上は、我々父子の志既に達せり。

政家 何と。

景致 御身は長田の姻戚なれば、此期に及びて何かせん、利害を見るに敏ければ、心を曲げて一味となるか、達つて刃向ひ爲し給はゞ、景致も相手仕り尋常に勝負を決せん。

政家 心を曲げて一味となれとは、聞く耳も汚はし、子孫未代まで清め難き我家の不名譽と知らず、一時の恩賞に眼くらみて、窮鳥の御主君をば欺討に

なすなど、は言はうやう無き極悪無道。剩へ父子して交るゝ酒を強ぬ、我を沈酔せしめたる油斷に乗じて卑劣の振舞ひ、かへすゝも無念なるわ。サア來い。

ト斬つてかゝる。双方必死と戦ふ中、政家は酒の酔の爲め時々足もとひよろめき腰ふらつき、て身體の働き自由を失ひ、次第に力弱り目眩きて、大刀先亂れる、ト受損じて、景致に急所を一大刀浴びせられ、磔と倒れしが直に起上つて又戦ふ、又第二の大刀を受損じて倒れる、此時奥にて格闘の物音又々激しく聞えて、下手廊下に忠致金王丸と戦ひ受大刀になつて退き、又追ふて這入る。景致第二の大刀に政家の倒れし時、此の體を見て、

景致 ヤ、父上の御身の上心元なし――

ト政家が倒れて苦しむ體をキツと見て、ム、既に急所を突きたる上は――

ト廊下口へ走り出て去る。此時十六夜ふと正氣づき政家の倒れ
ゐるを見て吃驚して傍に駆寄り抱起して、

十六夜 オ、我が夫——政家様——

ト聲を限りに叫ぶ。政家も少し心付き十六夜の顔を見て、

政家 オ、十六夜か——

十六夜 お氣を確かになされませいな。

政家 苦しき息を吐き、

政家 無念——殘念——シテ御主君には——最前お湯殿まで駆附けしも、

御姿見えず——果して御落命遊ばされしか——

十六夜 オ、妾も能くは存じませぬが昨夜よりの手筈といひ最前の物音父

と兄とが非道の刃にやみくくと御最期遊ばされたに違ひはない。

政家 ム、——

ト政家齒を喰ひ嚙つて無念の思入れ。

十六夜 喃政家殿此上は生存へて何の甲斐——不義の父非道の兄と同腹で
ない妾の證據心の潔白死んだ後まで良人の妻と二世を契る縁し
のしるしは——そうぢや

トいきなり政家の指添を抜いて咽喉を突いて斃れる。政家驚き
重傷に苦しみながら介抱せんとする時廊下口より金王丸處々痛
手を負ひ二三の家の子と戦ひながら出來り見る間に二人を仕留
め後は追散らして這入り來りホツと息を吐いて政家の體を見て、

金王丸 ヤ、御邊も既に——ムム。

ト駆寄り介抱しつゝ十六夜に目を着け、

十六夜 殿まで——無慚の最期。

政家 夫れと氣附いて、

政家 金王丸か——最早御主君には御落命あつたるか。

金王丸 湯殿に潜む力士の爲にやみくくと御最期——

政家 ナニ力士の爲に——ムウ。

ト金王丸に絶つてキツとなる。

金王丸 思ひ設けぬ陰謀ゆる某お傍に在りながら、不覺を取りし無念さ、口惜しさ。

政家 其の無念は我とても全じ事。かゝる企圖のあらんとは夢にだに思はばこそ——

金王丸 御最期の御際に、政家は居らぬか——と御二言を此世のお名残——

政家 オ、某も此の痛手所詮存命覺束なければ御邊は何卒我にかはり御主君のおん仇を——

金王丸 その儀は心得たり。奥の方には玄光法師を始めとし父子を相手に必死の戦ひ。

政家 此處構はずと片時も早く。

金王丸 政家殿さらばてござる。

政家 さらば。

ト互ひに顔見合せ一寸愁の模様あつて金王丸はキツと身繕ひして奥を指して出行かんとする、彼方より大勢撃入んとするを追ふて奥へ入る。此時政家は金王丸に力を合せんと幾度か刀を杖に立上がらんとして幾度か倒れ今はこれ迄と觀念し、自刃せんとして差添の見當らぬこなし、やがて十六夜の死骸にキツと目をつけ
政家 オ、さすがは我が妻——我が差添にてゆゝしくも健氣な最期を遂げけるよな——

ト十六夜の手より差添を取りて、

我もおことが後を追ひ、もろ共に御主君の死出三途の御介抱——
ト戦慄く手にて我と我が咽喉に刃を突立て、自殺する。此時除夜の鐘聞える。木なしにて幕靜かに下りる。

ヴェニス
の商人

法廷の場

法廷の場

公爵 アントニオはまゐつて居るか。

アントニオ 此處にさし控へて居ります。

公爵 慈悲憐愍などいふ考は兎の毛程も有たぬ情なき木石人非人の惡魔シヤイロツクのやうな者を敵手に今日當法廷へまゐつたのは予も氣の毒に思ふ。

アントニオ 恐れながらあなた様にも彼が殘酷なる請求に對して、百方御説諭下されましたやうに承りまするが夫れにも係らず尙頑としてかやうな非道を申張るにおさましては、いかなる法律の力を以てしても、最早害心を通るゝ手段は無いと存じまするに依つて、此上は觀念して、殘忍の犠牲と相成りまする。

公爵 誰れか彼方へ行いて猶太人を連れて參れ。

登場人物

公爵 貴商 猶裁 書友 同
公爵 太子 判
公爵 子人 人官 記人

デウク、オヴ、ヴニス
バツ、サニ、オ
ア、ン、ト、ニ、オ
シ、ヤ、イ、ロ、ツ、ク
ボ、ー、リ、ツ、ヤ
ネ、リ、ツ、ヤ
グ、ラ、リ、ノ
サ、ラ、リ、ノ

サラリノ 彼處へ參つて居ります——最早參りました。

シヤイロツク出て来る。

公爵 そこ通してずつと予が面前へ。シヤイロツク。其方がこん度の訴訟
 については、世間でもまた、かくいふ予も同様の考を抱て居るのであるが、
 アントニオに對して、飽までも害心を遂げんと申張るのは、ほんの表面ば
 かりのことで、察するところ、底意は、裁判執行の間際に到て、今迄の殘忍と
 は打つて變り、必ずや、憐愍の心をあらはし、此の慙なる商人から、肉一斤を
 切取るといふ證文は、取消して仕舞ふであらう——のみならず、人間の至
 情に動かされて、あの元金の大半をも帳消にするであらうと、かう考へら
 れてゐるのぢや。此頃アントニオの身には、災害交々至り、ヴェニス切つ
 ての豪商も夫れが爲に絶退絶命實にあはれな窮境に沈んでゐる様子を
 一目でも見たならば、心は、岩石胸は、黒鐵、恩愛の念などは露程も有たぬと
 いふ鬼畜同然の土耳其鞞靴人でも、尙且不慙の念を起させるではないか。

あとなしい返事を聞かせてくれ。

シヤイロツク

わしの所存は、最前申上げた通りです。わしや神様に誓つたの

だ——證文に在る料金は、當然の權利としてきつと受取りますと。それ
 を不可んと仰有るなら、ヴェニスの法律も夫れまでだ。我々が貰つた特
 權や、市民の自由は、危険千萬なものではございませんか。するとあなた
 様は、三千兩といふ金の代りに、何の益に立てば、人間の肉を取るのだと、か
 うお聞きなされるかも知らんが、それにやあ答へはしません。言つて見り
 や只だ、さうして見たいのだ。早え話が、毎晩家を騒がしやがる惡戯鼠そ
 れを打殺した奴に一萬兩遣らうと此方の勝手だ、さうぢやございません
 か。世間にや豚の口を見るのを厭がり、猫を見ると氣狂ひになるといふ
 ものもある。夫れも人の性分だ、一體好きとか嫌ひとかいふ奴は、此の性
 分が勝手に人間の情を仕向けるのです。豚の口がなぜ嫌ひだ、猫がなん
 て厭だと聞かれても、理窟ぢやいえねえ、まつその如くて、わしがアントニ

オにこんな訴訟を起したのも、わしの氣に喰はぬからだ、のみならず積りに積る深い怨恨が私にある、夫れが晴らしたいばつかりて、何の理由も無い。これがわしの申上げる御返事でございます。

バツサニオ そのやうなことは極悪非道な訴訟の御返事にはならんぞ情を知らぬ奴だなア。

シヤイロツク わしやお前様の氣に向くやうな返事をする義務はない。

バツサニオ デヤ自分の嫌ひなものは誰れでも殺すといふのか。

シヤイロツク 殺したくない者を憎いと思ふものがあるかね。

バツサニオ 氣に喰はぬといふのは始めから憎みではない。

シヤイロツク え、お前様は蝮蛇に二度噛ませるか。

アントニオ バツサニオさん何を言つても相手が人でなしの猶太人です。大海の水をかへ干すことは出来ても又小羊を盗んだ狼に、なぜ母羊を泣かせる道徳を言ふ事は出来ても、残忍無情な猶太人の心を和る事は出来

ません。これが出来る位なら、恐く世の中に難事といふ事はありますまい。私は只片時も早く刑の執行を受けて、彼が思ふ存分にならうと決心をして居るのでございます。

バツサニオ サア三千兩の元金を六千兩にして返すから持つて行け。

シヤイロツク 元金の二倍だらうが三倍だらうが論より證文の肉一斤、されさ

い取りや事は済む。
公爵 そちのやうに他人に一點の憐愍をかけずして他人より憐愍を望む事かどうして出来ると思ふ。

シヤイロツク 曲つた事をした覚えがないから、何にも怖い事ア無い。閣下様の家にや大勢の奴隷を買つて、牛や馬のやうに使つてお出なさる、その奴隷をお嬢様のお聲様になされませ、なぜ残酷たらしうお使ひなさる、閣下様と同じやうに美味い喰物、柔らかい寢所をあてがつてお遣なすつたらどうでございますと申上げたなら、金を出して買ったものだから如何し

やうと己れの勝手だと言はつしやるだらう。私もそれと同じで、アントニオの肉一斤は、その奴隷のやうに、三千兩といふ金を出して買つたんだから私の物だ私の物を私が取るに何も不思議はない。それを達てならぬと言はつしやるなら、ヴェニス法律はあつても無益です。早く裁判して貰ひませう。

公爵 いや今日の裁判は、ベラリオ博士が出廷の上言渡しある筈で、先刻使者を差立て置いた。萬一博士の出廷が無い時は、予は勝手に今日の法廷を閉づるの權威を有つてゐる。

使者 只今博士から使者の者が手紙を持参いたしました。

公爵 其の手紙を。使者をこれへ。

ベッサニオ アントニオ君決して氣を落したまふな。君が猶太人の爲に一滴の血汐を落す前に、私の血も肉も骨も、四肢五體の凡てを、君に代つて猶太人の奴に屠らせて遣ります。決して心を痛めたまふな。

アントニオ 私はもう群の中の病羊で死ぬには一番適當してゐるのです。熟した菓實は最も早く地に落ちる私の運命もあなじ事。どうか死んだ後で墓の銘でも書いて下されば、夫れが何寄の御厚情だと思ふて居ります。

公爵 グラシヤノの妻ネリツサ書記に扮して入來る。
足下がベラリオ博士からのお使ひか。

ネリツサ 左様でございます。博士よりも宜しく申されました。

ト手紙を渡す此間シヤイロツクは熱心にナイフを研いてゐる。
何てさう熱心に研いてゐる。

シヤイロツク 身代限奴から肉を切り取る爲めだ。

クラシヤノ オイ靴の底で研ぐよりか貴様の心の底で研げ、残忍といふ砥石がある筈だ。いかな金鐵でも、首斬臺の斧でも、貴様の害心に比べると、半分の鋭さもありやしない。あゝどんな祈禱の力でも、貴様の胸に通じさせることは出來ないのか。

シヤイロツク お前の淺はかな智恵で祈つたつて、何で己れに通じるものか。
 クラシヤン え、貴様の様な奴が、來世で地獄に墮ちる煩惱の犬だ。こんな人
 畜生が世の中にゐるかと思ふと、天道様の心を怨みたくなる。畜生の魂
 が人間に宿るといふヒタゴラスの説までが眞理かと思はれる。貴様の
 魂も前世は狼だ、人間を咬殺した科で首を絞められる矢先に、早くも其の
 悪魂が飛出して、貴様の母の体内に飛込んで、そして貴様の魂となつたの
 だ、その残忍酷薄貪慾無慈悲な處は、狼の申し子といふより外に無い。
 シヤイロツク いくら吠えても、此の證文からアントニオの捺した印形を除く
 ことア出来まい。餘り無駄吠して肺の臓でも痛めぬ用心をするがい。
 私や裁判をして貰ひに來てるのだ。
 公爵 此の手紙によると、ペラリオ博士は病氣の爲め代理として博學なる一
 青年を推薦すると書いてあるが、最早此處へ參つて居るか。
 テリツサ 只今彼室に差控へて御返事をお待申して居ります。

公爵 歡んでお受けを致す。誰か三四人彼室へ參つて叮嚀に御案内を。其
 間に博士より參つた書狀を讀聞かす。
 書記書狀を讀上げる。
 貴翰拜受致候さて小生圖らず病氣に惱み出廷致兼居候處恰も好し御
 使者の來着と同時にバルサミアと申す羅馬の年若き法律博士訪れ參
 候故シヤイロツク、アントニオ兩人の間に起れる訴訟事件逐一物語り
 種々の書類を取調候故小生の意見は彼が熟知致候のみならず其の該
 博なる學殖と識見とは一層小生の愚見を改め致候へば今日の裁判に
 は小生の代理として是非とも御推薦致度何卒一切の事は本人に御一
 任被下候様懇願致候兎に角彼が如く年少にして老熟なる智識を有し
 居る者を未だ曾て見出不申一度び其の技倆を御試被下候はゞ一層閣
 下の御賞賛を博すべき人物と信じ罷在候不宣
 公爵 ペラリオ博士からの書狀の趣は、今讀聞かせた通り。ムあれへ見えな

のが代理の博士と察せらるゝ。

ボーシヤ判官に扮して登場。

ベラリオ博士のもとより参られたか。どうぞこれへ。

ボーシヤ 左様でございます。

公爵 よくこそお出下された。あれへ御着座を。して訴訟の相違のかどは、

逐一御承知あるか。

ボーシヤ 逐一承つて参りました。孰がアントニオで孰が猶太人でございますか。

すか。

公爵 アントニオ、シャイロック、兩人とも前へ出い。

ボーシヤ シャイロックと申すのは其方か。

シャイロック 私がシャイロックでございます。

ボーシヤ 何と不思議千萬な訴訟を起したものでないか。しかし、ヴェニス

の國法は、其方の要求を不當として敢て退けることは出来ぬ。これアン

トニオ 其方は彼が害心より遁るべき道はないと申すか。

アントニオ いかにも左様でございます。

ボーシヤ して證文は毫も相違ないと認めるか。

アントニオ 左様でございます。

ボーシヤ さすれば猶太人は憐愍をかけねばなるまい。

シャイロック ねばならぬ——そりや又何いふ理由で、其の理由を聞きませう。

ボーシヤ いや憐愍は強むずして人の至情より出づるものぢや。たとへばみ

空の雨降りて静かに下界に注ぐと同じこと、行ふものと受くるものと、兩

つながら幸せらるゝのである。さて憐愍の心は至高至大なる天地の徳

であつて、そは王冠の上に輝き、帝笏の頂に位し、すべての尊嚴威力を支配

する無上の君徳であるのぢや。ゆゑに帝王が其の權威を行ふに當つて、

正義法度に加ふるに、一點憐愍の心を以てする時は、仁義兼行はれて、君徳

愈高く愈尊く、浩然として神明に等しきものと成る、コリヤ猶太人其方の

要求はたとへ正義に合し法度に叶ふてゐても、この道理を考へて見よ。若し偏へに正義法度のみを楯に取つて理非を争ふたなら、我々は一生神の福恵に救はるゝことは出来ぬぞよ。我々が常に神に向つて福恵を垂れ給へと祈るのは、人にも垂れ給へと祈るのぢや。予は強ゐて辨を好むのではない、只其方の要求を和げん爲めに申すのぢや。それにて尚頑として正義を申張るに於ては、是非に及ばぬ不愍ながらも法廷はアントニオに對して裁判の執行をせねばならぬ。

シヤイロック 私のいふことが正しくなけりや、どうしても罰を受けませう。證文通り科料さい貫や言分は無い。

ボーシヤ してアントニオは現金の支拂ひは出来ぬと申すか。
パッサニオ 出来る段ではございません。現に私より元金の三千兩を二倍にして六千兩拂はうと申して居るのでございます。二倍でも厭ならば、私の手でも足ても首でも抵當にして元金の十倍を拂ふ約束をしても好いと

まで申出て居るのでございます。それでも尙飽足らぬと申しますなら、此の世の中の眞理といふ眞理は、害悪の爲に亡されて仕舞つたものと諦める外はございません。何卒閣下の權威をもちまして、今回だけ特に法律を枉げて、此の悪魔シヤイロック奴を御成敗下さる譯には参りますまいか。此れは小なる曲事を以て大なる人道を行はるゝものかと存じまする。

ボーシヤ 夫れは成らぬ。何物の權威といへども國法を枉ぐる事は相叶はぬ。もしかゝる悪例が永くヴェニスに記録に残るときは、錯誤交々起つて政道を紊すの基となる。そは斷じて相成らぬぞ。

シヤイロック ダニエル様の裁判今ダニエル様だ、年はお若うても發明な裁判官様だ、やも恐入つたお裁判でございます。

ボーシヤ 其方の證文を見せてくれ。
シヤイロック 此處にございます。何卒御覽下さい。

ト 證文を差出す、ポーシヤ受取つて見て、
ポーシヤ シャイロツク、これには元金を三倍にして返すと申出であるてはな
いか。

シヤイロツク ぶう誓文々々。神様に誓文したからにや、私の精神に虚は吐か
れぬ。三倍は愚か、此のヴェニスと釣替にしてもいやだ。

ポーシヤ 此の證文は返済の期限が切れてゐる——法律は胸の肉一斤を切取
る可き權理を與へてゐる——(ト獨語して)コレ猶太人憐愍をかけて遣れ、
柔順しく三倍の金を受取つて、此證文は己に引裂せてくれ。

シヤイロツク 引裂かうと如何せうと證文に書いてある物さへ拂つて下さり
や、それから後は貴下様の御勝手だ。見れば偉らい裁判官様らしい、法律
も好く御存じなさる、仰有る事も確て、あつばれ護法の御柱と考へます
るによつて、早く裁判して下さるのを、私や法律で以て命令を致します。
精神に誓つたからにや、もう人間の舌に、私を動かす力はないのだ。早く

裁判をして下さい。

アントニオ 私も早く裁判の御執行をお願ひ申します。

ポーシヤ かくなる上は、アントニオ愈觀念して胸を露し刃を受くる準備をい
たせ。

シヤイロツク さすがに偉い裁判官様だ、お若い偉いお方だ。

ポーシヤ 法律の文面及び其の精神は證文の科料に義務を果さす可く相成つ
てをる。

シヤイロツク 仰有る通りだ。實に公平な裁判官様だ。お見かけよりや老練
なお方様だ。

ポーシヤ 是非に及ばぬ胸をあらす準備いたせ。

シヤイロツク さう、胸トポーシヤの方を見て下さいましたな。證文に
は心臓のあたりと確かに書いてございませしたな。
ポーシヤ 左様。肉を量る秤器は有つて来たか。

シヤイロック 有つて居ります。

ポーシヤ シヤイロック 予は其方に自費を以て外科醫者を呼ぶこと命令るぞ。出血のために絶命せぬとも限らぬから切つた後の傷口を療治させたら可からう。

シヤイロック それそんな事が證文に書いてございますか。

ポーシヤ 書いてはないが、それ位ゐの憐愍はかけてもよいではないか。

シヤイロック いや、そんな事アない筈だ、證文に書いてない。

ポーシヤ アントニオ、何か言置きたいことがあるか。

アントニオ 格別申残すこともござりませぬ——最早覺悟を極めて居ります

上は。バツサニオ様、どうか息災でゐて下さい。貴君のためにかういふ災難に逢つたと言つて、夫れをば決して悲んで下さいませぬ。富に放れ財を失ひ、眼は凹み額には皺が寄つて見る影もなく老いはてれば、死んだが寧優と思ふても、長命をして苦痛を見るのが、意地悪な運命の習はして

す、そんな憂目を見ずに今死ねば運命から親切に救はれると同じ事私に取つては寧ろ僥倖だと思ひます。令聞にもどうか宜敷く仰有つて下さい、此の私が最期の次第や、貴君への日比の友誼、死んだ後でよいやうに物語を願ひ、アントニオは果して貴君の信友であつたか否やの御判断をして下さい。又貴君も信友を失つたことを悲んでも、負債を拂ふ爲に死んだなどは夢にも悔んで下さいませぬ。私は今彼の猶太人に此の胸を貫かるゝと同時に満足して貴君の負債を拂ふこと出来るのですから、バツサニオ アントニオ君、私は生命よりも可愛い妻を持つたが、若し君の生命を救ふ事さへ出来れば、生命その物も、最愛の妻も、世界のあらゆるものを、此の悪魔の犠牲にしても厭はぬ。

グラシヤノ 私にも可愛い妻があるんだが、若しか天國へでも行つてたら、此の猶太人の奴の残忍な心を齎すやうに神様の功力をお願ひさせる事が出来たんだがな。

シヤイロツク 基督信者といふ奴ア皆んなこんなもの斗りだ。己れにも一人の娘があるが、基督信者を舞にするよりや、泥棒か乞食にでも呉れた方が餘程いゝ。(ト獨語して)かうして居ちや時間潰しだ。どうか御宣告を願ひます。

ポーシヤ この商人の肉一斤は、其方の物と相極つた。當法廷も之を許し國法も之れを與へる。

シヤイロツク 最も公平な裁判官様だ。

ポーシヤ では彼れが胸より肉を切取れ。國法も之を許し法廷も之れを認め

シヤイロツク 天晴博學な裁判官様。宣告だ。サア來い。

ポーシヤ 少し待て。今一言申聞かすことがある。此の證文には、肉一斤の外は一雫の血たりとも、汝に與へるとは書いてないぞ。ぢやによつて、證文通り、肉一斤を取れ。但し肉を切取るときに、基督信者の血汐の一滴たり

とも失ふに於ては、其方の地面家財はヴェニスの國法に照らして、ヴェニス政府に沒收いたすぞ。

クラシヤノ どうだい猶太人實に公平な裁判官様實に博學な裁判官様だらう。

シヤイロツク それが國法でございませうか。
ポーシヤ 自身で條文を調べて見い。其方は證文を楯に正義の裁判を仰いでゐるによつて、予は其方が欲するよりもまだ澤山の正義を得させるのである。

クラシヤノ どうだい猶太人實に博學な裁判官様だ、實に博學な裁判官様だらう。

シヤイロツク ぢや彼奴の申出に任せて、元金の三倍を拂はせて彼の基督信者奴を勘辨して遣りませう。

バツサニオ 其の金なら此處に在る。

ポーシヤ まで。此の猶太人には、ありたけの正義を持せて遣る。急かすとも

よい待つて居れ。彼は科料の外には、何物をも取ること相成らぬ。
クラシヤノ オイ猶太人。實に公平な裁判官様だらう！實に博學な裁判官様
だらう。

ポーシヤ さあ肉を切取る準備をせい。一滴の血汐は愚か、肉一斤より多から
ず、又少からず、其の多少はたとへ一分一厘たりとも、又其の分厘の萬分一
たりとも、イヤサ 髪の毛一筋の相違たりとも、其の輕重によつて秤量皿が傾
くに於ては、其方の一命は財産と共に立地に無いものと覺悟いたせ。

クラシヤノ やい猶太人、ダニエル様だ、今ダニエル様だ。

ポーシヤ 何を猶太人は躊躇する。科料を取れ。

シヤイロツク 元金だけ頂きます。そしてもう去して貰ひませう。

パッサニオ それは準備してゐる。此處に在る。

ポーシヤ 既に當法廷に於て拒絶んだからは、只正義に従ひ證文通りの物を得
させる外は無。

クラシヤノ ダニエル様、今ダニエル様だ。こりや猶太人、有難う、貴様は好い言
を教へて呉れたな。

シヤイロツク それぢや元金ばかりでも頂戴かれませんか。

ポーシヤ 科料のほかには、何物をも取ることは相成らぬ。肉を切つて生命を
失ふ危険を犯すより外に道はあるまい。

シヤイロツク 勝手にしやがれ。もう問答をする必要はない。歸ります。

ト 法廷を立去らんとする。

ポーシヤ また猶太人。國法はまだ其方の退廷を相許さぬ。ヅエニス國法の
制定によれば、若し外國人が直接或は間接にヅエニス人の生命を奪はん
と謀り、其の證據露見の時、財産の半は相手の者に與へ、半は政府に沒收
し、犯人の生命だけは偏に此なる公爵閣下の御憐愍に依るの外、何人の
容喙を許さぬと定められてある。其方の所爲は即此の罪科に該當して
ゐるのぢや。直接にも間接にも、アントニオの生命を奪はんと謀つたの

であるから、右の國法に照らして處分をする、但し生命だけは、公爵閣下の
 方寸に在れば平伏して其の御憐愍をお願ひ申せ。

クラシヤノ 貴様のやうな奴ア、自分で自分の首を縊つても宜しうございます
 かと、さうお願ひ申せ。したが、財産は残らずお政府へ没收されるから、首
 を縊るにしたら、が、繩を買ふ錢も無い筈だ。首を縊るまで、政府の費用
 でするとは何處まで御厄介をかけるつもりだ。

公爵 其方が願を聞く前に生命だけは助けて遣はす。そは相互の精神がい
 かばかり違ひぬるかを思ひ知らせる爲ぢや。依つて財産の半はアント
 ニオに與へ、半は政府に没收するのであるが、しかし其方が所業を悔悟し
 眞に謙讓の心を以て憐愍を乞はんとならば罰金のみにて赦し遣らんも
 のでもない。

ホーシヤ いや、政府の分は兎も角も、アントニオへは國法通りに。
 シヤイロツク もう生命も何も取つて下さい。赦して貰はんでもいい。大盡

柱を取られるのは家を取られるのだ、生活して行く財産を取られるのは
 生命を取られると同じ事。

ホーシヤ 何とアントニオは憐愍をかけて遣る心か。

クラシヤノ 首を縊る繩を無代で遣る位ぬのものです。其外には塵つ葉一つ
 でも。こなん奴に。

アントニオ 恐入りますか、公爵閣下初め列席のお方々へお願ひがござります。
 どうか政府へ没收相成りまする財産の半は罰金にて御免除下され、又残
 る半は當分の處、私にお預け下さるやうお願ひいたします。それは、彼の
 娘が結婚の約束をして共に家出をして居りまする若者へ遣はした
 うござりまする。尙此外に二ヶ條のお願ひと申すのは、これなるシヤイ
 ロツクが斯やうな御憐愍を蒙りました代りに、今日只今より基督信者と
 相成りますること、及び彼が死後は、其所有の財産すべてを娘夫婦に譲る
 といふ遺言狀を認めますること、此の二つをお採用下さるやうお願ひ申上

まする。

公爵 元より承服するであらう。さもなければ先刻申聞かせたる赦免の一條は取消さねば相成らぬ。

ホーシヤ どうぢや猶太人、それで不服はないか。

シヤイロツク 不服はござりませぬ。

ホーシヤ(書記を顧みて)財産譲與の遺言状を認めい。

シヤイロツク どうかこれにて御免を蒙りたうございます。加減が悪うござい

ますから遺言状は後から送つて頂きたい其上で調印をいたしませう。

公爵 退廷つてよい。必ず調印をいたせ。

クラシヤン オイ洗禮にや二人の教保が要るんだ、それで己れが裁判官だつた

ら、貴様にや其の教保を十人も殖やして洗禮盤ぢやねえ、首斬臺へ連れて

行くんだが命冥加な奴だなあ。

トシヤイロツク 大無念大失望の躰にて法廷を退出する。

鍋木秀子 終

M. Kawa

百病はあまた然るも未だあらずしるも生かす始に空むるも生かすれず其の
 端を以て私に告ぐは三由女房子もあらず其の端を以て私に告ぐは三由女房子もあらず
 様宜徳のいふに依りては何れも本を以て其の端を以て私に告ぐは三由女房子もあらず
 閉きであるが其の端を以て私に告ぐは三由女房子もあらず其の端を以て私に告ぐは三由女房子もあらず
 ても頭を古く牧師やんちかを能く問ひ答へるが然し同じ人間の生かす
 にも私をしてたれを能く問ひ答へるが然し同じ人間の生かすにも私をしてたれを能く問ひ答へるが然し
 のと那樣に元論に依りては解を以て私に告ぐは三由女房子もあらず其の端を以て私に告ぐは三由女房子もあらず
 流を以て私に告ぐは三由女房子もあらず其の端を以て私に告ぐは三由女房子もあらず
 私に告ぐは三由女房子もあらず其の端を以て私に告ぐは三由女房子もあらず
 の記したるを私に告ぐは三由女房子もあらず其の端を以て私に告ぐは三由女房子もあらず
 徳の謹書を以て私に告ぐは三由女房子もあらず其の端を以て私に告ぐは三由女房子もあらず
 には多し反古に依りては何れも本を以て其の端を以て私に告ぐは三由女房子もあらず

「風華社」

明治四十三年三月十二日印 刷
 明治四十三年三月十五日發行
 大正十一年四月十九日成立
 大正十一年五月十七日成立

社會 鏑木秀子
 (實價金八十五錢)



● 内に發行者 ●
 ● 鏑木秀子 ●
 ● 鏑木秀子 ●

發行者 和 田 靜 子
 印刷者 佐 久 間 衡 治
 印刷所 英 會 社
 發行所 春 陽 堂

東京市日本橋區通四丁目五番地
 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
 東京市日本橋區通四丁目五番地

電話 本局 五七番
 振替口座東京 一六一七

M. Kawa

